抓むかすると一層痛みを增す。(又俗に腰腰が痛むといふ)

灸療法。懸樞、命門、陽關、大腸俞、腎俞、足の三里、三陰交に米粒大の灸十壯する。

腕關節ロイマチスの灸治法（大正十三年十月靑森縣）

陽谿、陽池、陽谷、大淵、三里、に半米粒大の灸十壯、全治するまで毎日施灸する。

三角筋ロイマチスに對する採穴を求む（大正十五年富山縣、同九年四月 同十二年福井縣其他）

共採穴、上肢を擧げて陷凹する肩髃。肩髃と膲俞との中間の肩髎。腋窩の後方肩峰突起後面の下肩髎の後下部肩貞。肩端で肩胛棘と鎖骨の間の巨骨。肩胛棘の上際で曲垣の外方の秉風。第一胸椎の兩傍三寸の肩外俞。大椎の傍二寸の肩中俞。其他手の三里等を取穴する。

三角筋ロイマチスの症狀と療法（昭和七年六月大阪府）

(A)症狀。三角筋の輕度の腫脹、官能の障礙、特に上肢を擧上する時に疼痛が劇增する、又筋を指間につまむ時は痛みを增す。主徵候は三角筋の筋痛である。

(B)療法。前項及前々項を參照せよ。

急性關節ロイマチスの處置（大正九年十月岐阜縣）

(A)原因。筋肉ロイマチスに同じ。

(B)症狀。好んで肩胛、肘、腕關節等、比較的大きな關節を侵す、又遊走性で、一關節が治ると、他の關節を侵す事が多い。全身症狀としては惡寒、高熱、發汗が著明で、特に酸臭が强い。

(C)處置。關節の周圍に半米粒大、又は米粒大位の大きさの灸を十壯、十五壯各々其症狀に應じて施灸する。

備考。ロイマチスが點灸によつて奏效するの理は、「灸の生理的作用病理作用」を考へよ。殊に蛋白體注射と同樣の免疫體の產成、血管擴張、新陳代謝機能の增進等を、忘れぬやうにしなければならない。

豫後。適當の治療によれば良好である。

又鍼によつて奏效するの理由は。鍼の原理より考察せよ。

關節ロイマチスと關節炎、多發性關節炎、淋毒性關節炎との鑑別。及び神經痛との鑑別等は、「病理診斷學」の四四八頁以下を參照せよ。

肘關節ロイマチス、腕關節ロイマチス等類題を作製して研究せよ。

三叉神經痛の原因症狀治療法竝に穴名（大正十二年十一月福岡縣、昭和四年三月北海道廳、同七年六月大阪府）

解題。神經痛中最も多いものである、此神經は分佈區域が廣くして、顏面骨、頭蓋骨(腦蓋骨)に淺在性の場所が多いからである。

又此神經痛は全神經を侵す事は殆どない。多くは一枝痛、二枝痛、三枝痛、或は細小分枝等に來る神經痛である。故に場所に從つて臨牀上、上眼窩神經痛、篩骨神經痛、下眼窩神經痛、下顎神經痛、舌神經痛、前頭神經痛等に區別する。殊に第一枝痛はよく特發するものである。

(A)原　因。ヒステリー、神經衰弱、貧血、神經質、感冒、其他鉛、水銀中毒、齒の疾患、熱性傳染病、眼、鼻、耳等の疾患及び婦人生殖器病等から反射性に來る。

(B)症　狀。劇甚なる發作性疼痛で、眼瞼の反射性痙攣、潮紅、或は蒼白、淚、鼻汁流出、唾液分泌過多、筋攣縮等を伴ふ事が多い。

(イ)第一枝痛は、眼神經痛といふ。毛樣神經痛は眼に來る。前頭神經痛は前頭に來る。壓痛點は上眼窩緣「上眼窩孔部」にある。

(ロ)第二枝痛は、上顎神經痛といふ。鼻根、眼瞼、上脣、上齒列、上齒槽等に來る。壓痛點は「下眼窩孔部」にある。

(ハ)第三枝痛は、下顎神經痛といふ。下脣以下殊に下齒、下齒槽に來るものが最も多い。壓痛點は「前顎骨孔」部にある。

(C)治療法及穴名。

灸治は。主として、天柱　風池、肩外、肩中、大杼、身柱、手の三里、合谷、等に誘導、或は反射刺戟を企てる。

鍼治は。陽白、攢竹、四白、巨髎、迎香、下關、頰髎、承漿等に三叉神經の末梢を刺戟し、肩背等諸穴より反射刺戟を試み、又は誘導する。

備考。陳舊でないものは豫後はよい。

後頭神經痛の原因症狀治療法

(大正十五年十月滋賀縣、昭和九年秋秋田縣　昭和九年春山梨縣其他)

(A)原　因。普通一般神經痛の原因と大體同樣であるが、頸椎上部の壓迫又はカリエス等からも來るものである。

(B)症　狀。多くの場合大後頭神經を侵す、壓痛點は後頭點、卽ち天柱にある。

小後頭神經痛の壓痛點は、胸鎖乳嚢筋と僧帽筋の間の頸點、卽ち風池にある。

又顱頂結節部の顱頂點にもある。

(C)治　穴。大後頭神經痛には、天柱、風池、後頂、百會等を主治穴とする、

小後頭神經痛、後頭下神經痛には、完骨、風池、天關等を、

大耳神經痛には、翳風、天容、完骨等を主治穴として、

何れも肩中、肩外、手の三里、合谷等から反射刺戟を企てる。

備考。「後頭神經痛の壓痛點と其要穴の部位」(昭和五年九月青森縣)

大後頭神經痛の灸治點

(大正九年十月靜岡縣)

天柱、肩中、肩外、手の三里。

備考。天柱は經穴學上禁灸穴であるが、此場合は施灸しても差し支へない。

膊神經叢痛の原因症狀刺鍼穴名

(A)原　因。ヒステリー、神經衰弱、貧血、惡液質　ロイマチス、過勞、外傷、熱性傳染病等に發するもので膊神經叢の分佈區域に來る。痛みは一つ二つ又は三四の神經根等に感ずるものである。此神經叢痛は、肩背又は、膊に擴延する。

(B)症　狀。

(イ)內膊皮下神經痛は。腋窩、上膊內面、肘關節部に。

(ロ)前內膊皮下神經痛は。上膊の內側、前膊の尺側に。

(ハ)前外膊皮下神經痛は。前膊の撓側に。

(ニ)腋窩神經痛は。三角筋。三頭膊筋部に。

(ホ)撓骨神經痛は。上膊と前膊の背面に。

(ヘ)正中神經痛は。拇指球、拇指、第二、第三、第四指の撓骨側に。

(ト)尺骨神經痛は。前膊尺側諸筋と、第四、第五指、の尺骨側に。

等に來る發作性疼痛で、壓痛點は腋窩の上部、內上髁の後部、鎖骨上窩、肩胛下角等にある。

(C)刺鍼點。第五、第六、第七、頸椎棘狀突起の傍一寸五分の所、及肩中、肩外、缺盆、天鼎、等及び三里、合谷等に刺鍼點を撰ぶ。(注意、缺盆は普通禁鍼であるが此の場合は淺き刺鍼は差支へない)

正中神經、尺骨神經、撓骨神經痛に對しては各々其經路に散在する經穴に。

其他の皮下神經痛には其經路に從つて淺き刺鍼を試むればよい。

肋間神經痛の症狀及び其鍼治法

(昭和九年奉靜岡縣、昭和四年四月福岡縣　同七年五月栃木縣)

肋間神經痛の原因症狀刺鍼點並に刺鍼上の注意

(大正九年五月香川縣、同十五年十月廣島縣、昭和二年十月佐賀縣)

解題。よく試驗問題となるものである。類題中から一番難しそうなのを撰んで詳解してをくから卷末の類題によつて答案を作るがよい。痛、麻痺、痙攣と、以上三つの神經症中、痛が問題に出たなら、それは一等樂なのである。

又昭和二年秋の和歌山縣の鍼術の實地試驗問題は「肋間神經痛とは如何、其の原因、症候、豫後、療法を問ふ」といふのであつた。

(A)原　因。神經質、貧血、寒冷、過勞、神經衰弱、ヒステリー、刺鍼の過誤、婦人科病、其他代謝障礙、筋の鬱血、黴毒、脊椎の疾患等。

(B)症　狀。好んで第五以下第九肋間神經の左側に來るもので、寧ろ持續性の疼痛で呼吸、咳嗽、談話の際痛みが增す。壓痛點は脊柱に接する脊柱點、肋間の中央の側點、胸骨緣にある胸骨點である。

(C)刺鍼點。脊柱點と胸骨點を撰び、側點は可成之を避け、手の三里、合谷等から反射刺戟を傳達する。

(D)灸治法。神經痛の一般療法の原則として溫熱刺戟はよく效くものである、まして灸治は單なる溫熱刺戟に非ずしてそれ以外に種々なる作用があるから一層奏效著明である。

(E)經　穴。神封、步廊、不容、肺兪、厥陰兪、膈兪、肝兪、膽兪、身柱、手の三里、合谷等。

(F)刺鍼上の注意。

胸骨側緣を深刺すると心臟や大血管を刺す事がある。

其他左前胸部は心臟である。

又肋間神經は肋骨溝を通じ、其穿行枝は皮膚に分佈するものであるから深刺の必要がない。

殊に側點の刺鍼は下手に刺鍼すると疼痛が却つて增劇する。

(G)豫　後。無論良である。

乳腺神經痛

(A)原　因。ヒステリー性、貧血性、生殖器疾患等のある妙齡、又は中年の婦人に來る。

(B)病　狀。第四、第六肋間に來る一種の神經痛で、乳腺の疼痛である。

(C)療　法。第四、第五、第六胸椎の傍一寸五分の處と、乳根とに刺鍼する。

其術式は單刺術、弱雀啄術等でよい。

乳腺炎

(A)原　因。乳房の鬱血、乳汁停滯、乳嘴の損傷等、

(B)症　狀。乳房の腫脹、潮紅、灼熱、疼痛等。

特に化膿菌によるものは、頭痛、惡寒、發熱を來し化膿する。

(C)療　法。膻中、心兪、厥陰兪、各々小灸七壯する。

腰痛を起すべき疾病の名稱と其治穴名　(昭和五年十月滋賀縣)

(甲)病　名。腰筋ロイマチス、腰神經痛、過勞、腰椎炎、脊髓勞、流行性感冒(其他熱性傳染病)、打撲、腎臟炎、

其他婦人科病一般、腰椎脫臼、等。

(乙)穴　名。腎兪、腰兪、陽關、腰眼、大腸兪、五樞、帶脈、三里、三陰交等。

腰痛に對する灸治の可否　(大正十一年十月兵庫縣)

(A)可　否。可　也。

(B)理　由。溫熱的刺戟が疼痛に對して鎭痛作用ある事は一般に知らるゝ所である。ましてや、灸治は單なる溫熱刺戟ではなくして一般生活細胞の活動性を亢め、オブソニンや白血球を增加し、血管を擴張して新陳代謝を盛んならしむる等及び其他尙不明の效果さへ有するものであるから、腰痛は無論灸治の最適應症である。

腰痛に對する灸治點　(大正八年三月埼玉縣、同八年三月東京府、昭和七年四月北海道釧路)

腎兪、腰兪、陽關、腰眼、大腸兪、足の三里に灸十壯宛、又五樞、帶脈にも十壯する。

腰腹神經痛の原因症狀治穴を述べよ　(昭和九年春富山縣 大正十年四月秋田縣)

(A)原　因。神經炎、腰筋過勞、腰筋ロイマチス、筋及び筋鞘の打撲、其他一般神經痛の原因たり得る種々なる疾患、婦人科病、骨盤內の疾患、便祕等。

(B)症　狀。腰部、腹部、時となれば下肢に放散する、發作性疼痛である。所謂神經叢痛は第二、第三、或は第三、第四腰椎の神經幹又は神經枝に來る。壓痛點は、腰椎棘狀突起の外方腰點、腸骨梯の中央腸骨點、腸骨前上棘の內方下腹點とである。

(C)治　穴。「前項」の經穴を見よ。

備考。分枝の神經痛

(イ)股神經痛(一名前坐骨神經痛)は、上腿の前面と內面、下腿の內面、足跗の內緣から蹠趾に至る徑路に發作性に疼痛が來る、歩行の際痛みを增す、そして知覺障礙のある事もある。壓痛點は、ブーパルト氏靱帶の下卽ち股點、膝の內面膝點、內踝の直前足踝點、蹠趾の基底趾點、である。

(ロ)閉鎖神經痛は、上腿の內面から膝關節に擴がる疼痛である。

(ハ)外股皮下神經痛は上腿(卽ち大腿)外面の疼痛である。壓痛點は陰市、伏兎、風市である。

(D)治　穴。各其部の經穴と腰椎部の經穴とを用ひる。

備考。「腰部に於ける刺鍼法竝に刺鍼點(昭和六年九月神奈川縣)」「股神經痛の鍼治法(昭和七年五月奈良縣)」

坐骨神經痛の原因症狀刺鍼法點灸法

(昭和六年四月秋田縣、同七年六月大阪府、昭和四年三月山梨縣、昭和四年四月京都府、昭和三年五月富山縣、同三年四月長崎縣、同六年秋岩手縣、昭和六年十一月熊本縣、其他)

坐骨神經痛に就て　(昭和九年春東京府、昭和九年秋北海道)

(A)原　因。感冒、過勞、濕潤、冷却、ロイマチス、便祕、骨盤內腫瘍等の壓迫、姙娠、微毒、糖尿病、中毒、腰髓の疾患等。

(B)症　狀。臀部より上腿の後面と下腿の後面及び外側、足の外緣から足背に牽引性に來る稍々持續性の疼痛で、一進一退、消長する。

(C)診　斷。稍々持續性の坐骨神經の經路に發する疼痛。足蹠部を持つて膝關節を伸直して股關節で屈曲すると劇痛を訴へる所謂ラセギュース氏現象。健側に體を傾ける坐骨神經痛性側彎、及び壓痛點である。

(D)壓痛點。坐骨下溝の中央。大腿後面の中央。膝胭窩の中央。腓骨小頭部等。(昭和九年春神奈川縣)

(E)鍼灸點。次髎、中髎、下髎、承扶、殷門、犢鼻、陽陵泉、三里、下廉、飛陽、合陽、三陰交等。

(F)鍼手技。置鍼術、强雀啄術、斜鍼術(皮下刺)等、症狀によつて加減する。

(G)灸治法。各經穴に十壯、十五壯、
　症狀によつて灸炷の大、小等をも加減する。
備考。此神經は淺在性で經路が長いから侵され易い。
　又腓骨神經痛、脛骨神經痛は各々其經路に來る、
　此二神經は坐骨神經の二終枝であるから、つまり坐骨神經下部痛である。
「坐骨神經痛の原因及び壓痛點」(昭和九年春兵庫縣)

常習頭痛の原因症狀鍼灸治法

（昭和九年春廣島縣、大正八年六月東京府、昭和六年五月和歌山縣、其他）

（一名神經性頭痛）

(A)原　因。熱及び其他機質的變化を伴はない官能性の頭痛である、
　神經質、遺傳、心身過勞、不眠等から來る。
(B)症　狀。所謂頭蓋內の疼痛感であつて、劇痛と鎭痛とが交替したり間歇したりして一日中にでも消長がある。
　毛髮に一寸觸れても痛みを感ずるやうな知覺過敏な事もある。
(C)灸治法。天柱、風池、完骨、肩中、肩外、天髎、三里、合谷、魚際、曲差、頭維、懸顱、完骨、等の各穴を取穴し
　て後頭、肩背の諸穴には雀啄術、頭蓋諸穴には淺皮單刺術を施す。
備考。灸療法。肩背の諸穴、上肢の要穴を誘導穴として八壯位するとよい。

關節神經痛の症狀及び治療法

關節に何等の機質的變化なく、發作性に來る疼痛感である、腕關節や、肘關節によく來る。其關節を使用すれば痛みを增す。治穴は關節によつて異なる。病關節の周圍及び、其上下等に刺鍼又は施灸して鎭靜法を行ふ。
　備考一。豫後は良である。
　備考二。又膝關節に來るものは膝關節神經痛、肘に發するものは、肘關節神經痛といふ。

痛　風

（昭和四年五月兵庫縣、同四年五月佐賀縣）

(A)原　因。遺傳、酒及び肉食過多、鉛中毒等
(B)病　理。體內に於ける尿酸の異常刺戟である。殊に尿酸が組織や血液中に蓄積するが爲めに固有の痛風發作を來す
(C)症　狀。普通夜間、蹠趾、跗骨關節に、又稀には膝關節に來る。腫脹、潮紅、灼熱、と劇痛發作である。
　中等度の發熱を伴ひ、慢性のものは關節の肥大と硬直を來す(之を痛風結節といふ)。
(D)豫　後。直接生命には關しないが、慢性のものが多い。
(E)療　法。植物性食餌と安靜を主とし、鍼灸何れも腎俞、足の三里、照海を主治穴とする。
　備考。但し、本病は日本では澤山はない疾患である。

糖尿病の原因症候竝に鍼治法

（昭和九年秋佐賀縣）

（A）原　因。膵內分泌の障礙。

但し遺傳、體質、ビール過飲、感冒、黴毒等は誘因となる。

（B）症　狀。倦怠、筋の脫力、遠和、多尿、煩渴、頭痛、肩凝、神經痛等。

（C）療　法。鍼。厥陰俞、三焦俞に二寸計り刺入雀啄術、天柱、風池、足の三里に三分乃至五分計り刺入して弱き雀啄術を行ふ。

灸。三焦俞半米粒大の艾炷七壯、石門に同五壯、足の三里に米粒大の灸五壯を施す。

備考。女子の石門は經穴學上禁穴であるが此場合は施灸してもよい。又京門を代用するもよい。

肢端知覺異常症

解題。所謂手や足の指の知覺異常を來すものをいふのであつて、官能性のものである。

又血管神經の異常とも考へられてゐる。

知覺異常とは蟻走感覺、鈍痛、冷感、知覺過敏等をいふ。豫後は良である。

自ら答案を作成して見よ。

偏頭痛の原因症狀及び其鍼灸治法を問ふ

（昭和九年春滋賀縣、大正九年五月鳥取縣、昭和九年春香川縣、昭和二年十一月長崎縣、同四年三月山梨縣、昭和七年三月東京府、昭和七年五月奈良縣）

（A）原　因。神經質、心身過勞、遺傳、ヒステリー、ヒポコンデリー、神經衰弱、酒、煙草中毒、眼、耳、鼻の疾患、其他婦人科病等から反射性に來る。

（B）症　狀。所謂頭部の偏側に來る頭痛發作である。學者によると左記の通りに分類する。

（イ）脈管運動性偏頭痛は頸部交感神經の變化によるもので、

（一）交感神經麻痺性偏頭痛は、瞳孔縮少、充血、脈緩徐等を來す。

（二）交感神經痙攣性偏頭痛は、瞳孔散大、蒼白、脈頻數等を來す。

（ロ）眼性偏頭痛は、眼花閃發、弱視等を來す。

（ハ）類似性偏頭痛は、惡心、嘔吐、躁狂狀態を伴ふといふ。［橋本內科全書］

（C）鍼治法。其症候によつて多少異なるけれど、患側の天柱、風池、完骨、和髎、懸釐、天衝、角孫、懸顱、頷厭、頭維、本神、絲竹空、等に刺鍼鎭痛法を講じ、手の三里、上廉、合谷、勞宮等に誘導、又は反射刺戟を企てるのである。

（D）灸治法。頭維、角孫、風池、に粟粒大の小灸七壯宛、身柱に米粒大の灸十壯。

手の三里に米粒大の灸十壯。

備考一。豫後は良い、鍼灸術の適應症である。

備考二。「偏頭痛に對する灸の要穴」（昭和六年一月成鏡南道）「偏頭痛の灸治點奏效理由」（昭和九年春香川縣）

偏頭痛に對する鍼の適否を記し其適するものに就て理由を記せ　(大正十五年十月兵庫縣、昭和七年四月德島縣)

(A)適　否。全部適應症である。

(B)理　由。原發性偏頭痛は純官能性のものとも考ふべく、刺鍼の機械的刺戟によつて其病變及神經の興奮は鎭靜せられて鎭痛する。

交感神經性のものは、所謂脈管神經の痙攣と麻痺であるから、

脈管神經の痙攣は刺鍼刺戟を以て之を鎭靜せしめ、

麻痺は之を興奮せしめる。

備考。「偏頭痛に對する鍼治法を記せ」(昭和二年十一月長崎縣)「偏頭痛に對する鍼治法」(昭和七年四月香川縣)

ヒステリーの原因症狀鍼治法　(昭和七年四月福井縣)

(A)原　因。神經素質、遺傳、氣儘。心身過勞、貧血、慢性病、婦人科病等。

(B)症　狀。千差萬別で詳記するに暇がない位であるが、

要するに知覺障礙は、種々の神經痛、或は卵巢痛となつて現れ、

內臟障礙は、ヒステリー球の上昇するものが最も多く、

運動障礙は、種々なる官能性筋麻痺となつて現れる。

僞性癱瘓、卽ち子癇によく似たるヒステリー大發作を來す事がある。

主として情意變換し易く、喜怒哀樂常ならず、

種々の障礙を誇張して訴へる事が特徵である。

備考。豫後は良い、經過は時とすると長い事がある。

(C)刺鍼法。鍼經法を行へばよい。經穴は症狀經過原因等によつて適宜取穴(挨穴)してよい。

例へば中極、曲骨、身柱、八髎の穴、血海等に取穴する。

ヒステリーの施灸點　(大正十四年春靜岡縣)

其原因によつて多少異なるが、最も一般的なものは婦人生殖器病から來るものが多い。

主として日常生活の感情的障礙である。

原因療法としては關元俞、小腸、次、中、下髎、丹田、曲骨等を取捨撰擇してよい。

對症的鎭經法としては天柱、風池、身柱、命門、手足の三里等から適宜撰んで施灸する。

神經衰弱の原因症狀治療穴名　(昭和八年春北海道　昭和八年春島根縣、其他)

(A)原　因。遺傳、神經質、神經過勞、生活の不規律、過房、酒の中毒等、

(B)症　狀。疲勞性、思慮減退、頭重、頭內朦朧、懷疑、穿鑿性にして、特に憂鬱、悲觀、脅迫觀念にとらはれ、種々なる官能性神經障礙を發す。

(C)治療穴名。天柱、風池、身柱、肝、膽、脾、胃俞、三焦、大腸俞、手三里、足の三里、三陰交等に。

症狀と經過とにより適宜取捨撰擇して刺戟する。

又身柱に半米粒大の灸二十壯、天樞に同じく七壯するもよい。

場合によれは全身の要穴に淺き皮膚刺鍼を施すと良效を奏す。

(D)奏效理由。一般神經機能の亢奮し易きを鎭靜し、榮養を佳良ならしむるが爲によく奏效す。

不　眠　症

(A)定　義。不眠症は或種の疾病經過中に來る症狀の一つであつて、獨立せる疾病ではないが、鍼灸家が實地上よく當面するものである。

睡眠の不充分、不安定なるものを一括して不眠症といふ。

(B)原　因。(一)心理的。不安、興奮、歡喜、失望等。

(二)官能的。神經衰弱、ヒステリー、頭痛等。

(三)環境。枕、寢衣、寢室の更りたる時等。

(四)動脈硬化症、心瓣膜病、性病及性障礙等。

(五)茶、コーヒ等。

(C)症　狀。一定時間睡眠不能、半醒半睡、醒め易き睡眠等、其結果肉體、精神共疲勞、倦怠を來す。

不眠の灸治點

(昭和二年春東京府、同五年四月島根縣)

其原因にもよるが、天柱、風池、身柱、足の三里。

備考。其理由。

元來睡眠の起る事を說明せる學說は種々であるが、最も有力なのは腦の貧血說であつて、腦の貧血が睡眠を誘起するといふ事の第一の證左は、內外人共に皆枕を用ひて、頭部を高くし腦の血量を減じて睡眠を計る事と。

食後胃部に於ける血液の循環が旺になると、睡眠を催すのはよく人の知る所である。

だからして、天柱、風池や、足の三里等に施灸して其部の血管を擴張して、頭部の血液を誘導する事によつて睡眠を誘發する事が出來る。

所謂上記各穴は不眠の灸治點である。

ヒポコンデリーの原因症狀治療法

(A)原　因。主として青年壯年の男子に發し、神經衰弱、花柳病、失望、病氣に對するの恐怖、過房、自瀆等から來る

(B)症　狀。病氣に對する恐怖、病氣だと勝手に思ふ妄想、自己に關する恐怖觀念等が特徴である。
天柱、風池、手の三里、合谷、勞宮、足の三里、三陰交等に取穴治療する。
備考。豫後大概は良。
(C)治療法。神經衰弱の治療法と略同樣である。
備考。前畧恐怖觀念が若し自己の身體竝に精神に關するものなる時は之を依ト昆哑里と名く。安藤內科類症鑑別

振顫症

(A)定　義。意識と無關係に來る、全身又は局所の律動的反覆運動である。
(B)原　因。(一)心理的。精神感動、興奮、不安、喜悅、驚愕、忿怒等。
(二)慢性の重病。老衰等。
(三)中毒性。煙草、酒、茶、コーヒ、モルヒネ、鉛、水銀、砒素中毒等。
(四)溫の影響。寒冷等。
(五)官能的疾患。ヒステリー、神經衰弱、不眠、癲癇、バセドー氏病等。
(C)療　法。原因療法。

書痙の灸治法　(大正十一年五月熊本縣)

筆痙の原因症狀治療法　(昭和五年四月島根縣、其他)

(A)原　因。過度の書字、ペン、筆、机の不良、驚愕、苦慮、興奮、遺傳、神經質等。
(B)症　狀。
(イ)痙攣性書痙は。腕と手に强直を來し疼痛性感覺を伴ふ。
(ロ)震顫性書痙は。强度の顫ひを發して字體亂れる。
(ハ)麻痺性書痙は。執筆の時すぐ疲勞を感じて字が書けない。
(C)治療穴名。主として撓骨、正中二神經の經路に刺鍼(雀啄術)、又は點灸する。
天柱、風池、肩中、肩外、肩髃、臑會、尺澤、曲池、小海、三里、上廉、合谷、二間、三間、少商、勞宮等。
備考。著者註、筆痙は卽ち書痙の事である。筆痙は亦職業的神經症ともいふ。

アテトーゼ

(A)原　因。腦のレンズ核の障礙である。
原發性に或は小兒麻痺に附隨して起る。
(B)症　狀。指又は趾を徐々に屈げ、次いで之を伸す運動を繰り返す、時には顏面に來る事もある。

舞踏病に似て、それよりも緩慢、低調である。

(C)療　法。鍼、小兒鍼。

灸、大椎、身柱に半米粒大の小灸、年齢の數だけ用ゆ。

バセドー氏病

(A)原　因。過勞、生殖器の異常、姙娠、分娩の影響等。

備考。男性及兒童にも發する事あれども、思春期より壯年期の女性は本病を發し易い。

(B)症　候。(一)心悸亢進、(二)甲狀腺腫脹、(三)眼球突出、先ず現はれ、次いで、(四)振顫、(五)脫汗を來し、遂に精神狀態が變調し易くなる。

(C)療　法。鍼、天柱、風池、大杼に三番鍼深さ五分、天突、水突、廉泉、同深さ二分乃至三分、肩中、肩外、中注、帶脈、外髎、手三里に同深さ二分乃至三分。灸、天突、廉泉、手三里に小灸五壯。

備考。山下學士は、本病に對し一灸點に麥粒大の灸十壯して、良效を收めたる事を醫學界に報告した。

舞踏病の原因症狀治療法　(昭和九年秋佐賀縣)

(A)原　因。遺傳、神經質、貧血、精神感動、模倣、關節ロイマチス、萎黃病、姙娠、心臟病等。

(B)症　狀。精神過敏、頭痛、等を前驅して指から膊、頰、背、下肢にまでも及ぶ骨格筋の不隨意收縮、拮抗筋群の變

調性攣縮であつて、恰も舞踏狀に一伸、一縮し、重症のものは步行不能とさへなる。

(C)治療法。主として鎭痙、鎭靜法を施すべきものである。

鍼治は、天柱、風池、身柱、手の三里、合谷、勞宮、足の三里、三陰交等に三分乃至五分刺入と雀啄術を施す。

灸治は、天柱、風池、身柱、三陰交に半粒大の艾灸五壯乃至七壯をすゆ。

備考一。本病は思春期以後二十五歲位までの婦人に多い。

備考二。豫後大概のものは良である。

眩暈の原因症狀治療穴名

(A)原　因。眩暈は空間で體勢平均が保ちがたい場合に生ずるもので、症候的病名である。

(イ)官能的原因によるもの。神經衰弱、ヒポコンデリー、ヒステリー、睡眠不足、心身過勞、貧血等の場合。

(ロ)機質的原因によるもの。小腦の腫瘍、出血、其他五官器の疾患等。

(B)症　狀。所謂メマヒである、身體平均の位置を失ひて倒れる、此際多くは頭痛、嘔吐等を伴ふものである。

(C)豫　後。多くは良である。

(D)療　法。前項に記した諸穴に鎭痙法を施すとよい。

備考。身體及び頭首の位置を感覺する神經は、前庭神經であつて、其中樞は小腦にある。

癲癇とは何ぞ（昭和九年秋福井縣）並に之が治療法

突然人事不省となり、全身痙攣を反覆するもので、原因により二種に區別する。

（A）眞性癲癇（卽ち特發性癲癇）は、解剖上何の變化をも證明する事の出來ぬもの、卽ち遺傳等。

（B）假性癲癇は、　（イ）反射性癲癇、　（ロ）症候性癲癇である。

（イ）は末梢神經の外傷、異物、耳、鼻、齒、寄生蟲刺戟及び、姙娠等。

（ロ）は腦の疾患、其他運動性腦皮質が刺戟せらるゝ場合等。

（C）症　狀。俄然叫聲を擧げて卒倒し、人事不省となり、同時に强直性痙攣を發して後、間代性痙攣となり口角泡を吹き、數分以內に覺醒して、呆然たるものである。

假性癲癇は症狀眞性癲癇よりも輕い。定型性ではない。

（D）治療法。主として鎭痙法である。

（E）治　穴。百會、神庭、人中、本神、天柱、完骨、大椎、身柱、三里、合谷、行間、湧泉等。

備考。豫後は直接生命に危險はない。

顏面神經麻痺の原因症狀鍼治法

（昭和九年秋鹿兒島縣、大正十四年秋田縣、同九年四月廣島縣、同八年十月奈良縣、大正十二年十一月北海道廳、昭和四年山口縣、昭和六年三月臺北州、昭和七年山梨縣、其他）

顏面神經麻痺の處置を記せ（昭和二年春福井縣）

顏面神經麻痺の症狀並に主治穴其奏效理由（昭和六年十月德島縣）

（A）原　因。神經の損傷（鉗子分娩、打撲等）、中耳炎、腦髓の疾患、黴毒、癲病、熱性傳染病及び感冒。

但し、感冒より來るもの普通最もよく全治する。

（B）症　狀。其原因が腦髓にある中樞性のものと、顏面神經纖維に來れる末梢性のものとで多少異ふ。

一、中樞性の時は。多くの場合兩側に來り、或は偏側に來る時と雖も、多くは半身不隨等の一症狀として來る。

而して前額部には障礙なく、電氣反應は消失し、反射運動は存在する。

一、末梢性の時は。片側の顏面を侵す事が多い、そして多くの場合閉眼出來ない。

片側麻痺は患側は弛緩し、皺襞が消失して下垂し、閉眼出來ぬ。其他健側に牽引される。

麻痺側は表情運動が出來なくなる。

但し健側は表情運動が出來るから怪異な顏となる。

兩側が麻痺するとノツペリした假面の如き顏となる。

備考。癤によく來る。

（C）鍼治療法。顏面神經の運動機能を恢復するのが目的であつて、顏面神經叢（翳風）に、或は末梢纖維に、又は三叉神經知覺纖維の反射等を應用せねばならぬ。

最强刺戟と深刺は必要でない。

單刺術、散鍼術、震顫術等を施す。

部位によると細鍼を以て皮下刺を行ふもよい。

(D)穴　名。天柱、風池、完骨、翳風(鍼三分乃至五分)。攢竹、陽白、頭維、懸顱、懸釐(鍼半分一分)。下關、顴髎等(散鍼、又は皮下鍼)頰車、大迎、地倉、巨髎等(鍼、二分三分)等。

(E)奏效の理由。

刺鍼刺戟作用によつて麻痺せる顏面神經の運動を恢復す。

翳風は顏面神經の耳下腺叢に刺戟を直達したるもの、

天柱等は頸椎神經を媒介として刺戟を傳達したるもの、

顏面部の各穴は、顏面神經末梢を刺戟すると同時に三叉神經の刺戟傳達性を利用したるものである。

備考。豫後は原因によつて異なる、感冒等から來るものは治癒しやすい。

(F)灸治法。翳風半米粒大の灸五壯、耳門三分の一米粒大の灸三壯、風池同十壯、曲垣米粒大の灸十壯。

顏面神經痛に對する刺鍼穴名及び奏效の理由

(大正十三年三月山梨縣、同十四年十月富山縣、同九年四月廣島縣)

顏面神經痛とは卽ち三叉神經痛の事であるから其部を見よ。

顏面神經痙攣の原因症狀治療穴名及奏效の理由

(昭和六年五月岩手縣)

(A)原　因。主として精神興奮による。其他顏面神經の疾患、中樞、末梢の疾患及び反射性に發するものが相當に多い。

(B)症　狀。顏面筋の全部又は一側に來る筋の攣縮で、大概の場合は一局部に限局するものである、最もよく眼輪匝筋に來る。

然る時には所謂眼瞼痙攣である。

强直性の時には閉眼し、

間代性の時には瞬目となる。

(C)治療穴名。天柱、風池、完骨、翳風、攢竹、絲竹空、陽白、四白、巨髎、顴髎等。

(D)奏效理由。主として興奮を鎭靜するのである、興奮せる神經官能は刺鍼の機械的刺戟及び、其他不明の原因によつて鎭痙する。

備考。官能性のものは豫後良。

三叉神經麻痺の原因症狀治療穴名

(一名　咀嚼筋麻痺)

(A)原　因。主として中樞性である。腦膜炎、腦微毒、其他腦疾患の一徵候として來る。

實地上原發性としては稀有に屬する。官能性にはヒステリーから來る。

(B)症　狀。咬筋、顳顬筋麻痺で下顎下垂し、且つ內、外翼狀筋麻痺の爲に側方にも移動せない、咀嚼が出來ぬ。

(C)治　穴。咀嚼筋に直接刺戟を與へて筋の運動性の恢復を圖る、下關、懸釐、顴髎、巨髎、頰車、大迎、等を主治穴とし、翳風等にも刺鍼する。

(D)奏效の理由。筋は刺戟にあふと動作の狀態卽ち收縮する、之を筋の興奮性といふ。であるから麻痺せる咀嚼筋に鍼を刺して、直接に弱雀啄や輕き散鍼術等の機械的刺戟を與へると、麻痺筋が興奮性を恢復するのである。

又鍼には機械的刺戟以外に、尙不明の效果があるようである。

翳風の刺鍼は顏面神經を介して刺戟を傳達したのである。

眼筋麻痺の原因症狀治療法

(A)原　因。官能性には神經質、ヒステリー等によつて發し、其他機質的には外傷、壓迫、中毒、糖尿病、腦、脊髓の疾患から發し、感冒も又よく之が原因となるものである。

(B)症　狀。眼筋の共働運動が障礙せられて、光線が網膜の同一點に入らないから斜視、複視を來す。

(イ)動眼神經麻痺は。上眼瞼が下垂する眼は上、下と內方には運動せない。麻痺せない外直筋がよく收縮するから眼球は外方に牽引せられて外斜視を來す、瞳孔散大す。

(ロ)外旋神經麻痺は。外直筋が其作用を失ふから眼球內方に轉じ、內斜視を來す。

(ハ)滑車神經麻痺は。上斜筋が麻痺するから眼球を下內方に廻轉する事が出來ない、殊に階段を降る時複視を來す。

(C)療　法。原因にもよるが、麻痺筋の恢復を圖るのが目的だから、興奮法を用ふるがよい。直接眼筋を細鍼で刺戟するのもよいが、餘程熟練せなければならないから反射的に刺戟を傳達するやうにする。

曲差、攢竹、睛明、四白、承泣、瞳子髎、絲竹空、陽白、本神、又後頸部等から三、四取穴するもよい。

副神經麻痺の原因症狀治療穴名

(昭和二年十一月鹿兒島縣、同五年十月福岡縣、昭和六年十月石川縣)

(A)原　因。肩上重荷、過勞、感冒、頸部の壓迫、損傷、頸椎の疾患、延髓球麻痺。

(B)症　狀。多く偏側に來る、胸鎖乳嘴筋麻痺、及び僧帽筋麻痺である。

(イ)僧帽筋麻痺は。鎖骨上窩の陷沒と肩胛骨の下垂である。

(ロ)胸乳筋麻痺は。斜頸を來す。(註、胸乳筋は胸鎖乳嘴筋の略、以下皆同じ)

(C)治療穴名。(イ)、(ロ)二筋の起始、停止、筋腹等に興奮的の刺鍼刺戟を與へる。

(イ)には天柱、頸椎棘狀突起の兩傍一寸位の所、大椎以下脊中迄の各穴。

胸椎の傍一寸五分の處の大杼以下脾俞迄の各穴。同三寸の傍の附分以下意舍迄の各穴。

其他天髎、肩貞等、肩胛棘の上下の各穴に刺鍼する。(但し鍼は深きを要しない)。

(ロ)には風池、完骨、天容、天窻、氣舍等を主治穴とする。

備考。こんなに全部の經穴を用ゆると否とは術者の斟酌にまかす。

横隔膜神經麻痺の原因症狀治療穴名

(A)原　因。感冒、頸部の壓迫、頸椎の疾患・外傷、アルコール、鉛中毒等。

(B)症　狀。呼吸困難、努責運動障礙、吸息時心窩陷沒、呼息時の膨脹等。

(C)療　法。第四、第五頸椎の傍一寸の處、胸鎖乳嘴筋と肩胛舌骨筋の交叉せる隅角に刺鍼三分乃至八分、其他氣舍、不容、京門、章門、日月から內上方に斜刺する。

横隔膜痙攣の原因症狀治療法

(昭和五年十月愛知縣、昭和七年四月埼玉縣)

解題。他の痙攣のやうに、强直性と間代性とを區別する。

(A)原　因。

(イ)强直性痙攣は。感冒及傳染病等から。

(ロ)間代性痙攣は。吃逆(シヤクリである)、胃の膨滿、哄笑、ヒステリー、肋膜炎、腦の疾患等から。

(B)症　狀。

(イ)は强く擴がつた胸廓の下部は靜止し、上部は呼吸困難を來す。

(ロ)は横隔膜は突然收縮して空氣を吸ふと共に聲門が閉されて、これと同時に一種の音を發す。つまりシヤクリである。

(C)治療法。原因によつて多少違ふけれども刺鍼、點灸部は前項と同じである、此ものには强刺戟を以て鎭痙手技を行ふ。

(D)灸　治。は胸鎖乳嘴筋と肩胛舌骨筋と交叉せる部に、半米粒大の艾炷八壯巨闕に十壯する丈けでよい。

備考。豫後、良。

尺骨神經麻痺の原因症狀治療法

(昭和五年九月青森縣、同五年十月富山縣　昭和七年四月新潟縣)

(A)原　因。癲病、外傷から來るもの最も多い、極く稀には感冒や、傳染病後に來る事もある。

(B)症　狀。小指球、骨間筋、第三、第四の蟲樣筋、尺側深屈指筋、尺腕屈筋(內尺骨筋)等が麻痺するから所謂癲病患者によく見るやうな第一節が著しく背屈して末節は掌面に屈曲せる抓握手となる。(俗にショウガ手又鷲手といふ)

(C)治療法。尺骨神經の經路にある經穴に刺鍼又は點灸する、主として興奮法を行ふ。

(D)鍼治穴。肩中、肩外、天泉、小海、少海、通里、神門、小府、後谿等。

備考。灸は小灸を五壯乃至七壯する。

正中神經麻痺の原因症狀治療穴

(大正九年十二月和歌山縣)
(昭和五年九月沖繩縣)

(A)原　因。主として外傷である、極く稀には傳染病から發する事もあるが、本病は稀有の疾患である。

(B)症　狀。廻前圓筋、廻前方筋、淺・深屈指筋、長、短屈拇筋、短外轉拇筋等が麻痺する。

(C)治療穴。第四、第五、第六頸椎の傍一寸の處、缺盆、天府、曲澤、郄門、大陵、勞宮等。

撓骨神經麻痺とは如何其原因症候豫後及治療法を問ふ

(昭和九年春岩手縣、昭和二年秋和歌山縣、同八年三月山梨縣、同五年四月福井縣)

撓骨神經麻痺の原因症狀治療穴名並に術式

(大正九年十月愛知縣、昭和七年四月島根縣其他)

(A)原　因。此神經は外側にあるから肘を屈げて枕としたりした場合に壓迫され易い。

其他打撲等の外傷、感冒、傳染病、中毒等によつて發する。

(B)症　狀。

(イ)前膊を水平にして、手掌を下面に向けると手は弛緩下垂する、指を背屈する事は出來ない。(所謂猿手)

(ロ)第一指節は伸す事が出來ないが、第二、第三節は伸す事が出來る。(これは骨間筋、蟲樣筋が正中、尺骨神經の領域であるから)。

(ハ)膊撓骨筋の麻痺で前膊の屈曲も不自由になる。

(ニ)又此神經は手背の撓側半分、拇指、示指等に知覺神經纖維を分佈してゐるから、輕度の知覺障礙を伴ふものである。

(C)治療穴名。巨骨、肩髃、臑會、曲池、三里、上廉、陽池、孔最、大淵・魚際、少商、合谷、二間、三間。

(D)術　式。

(イ)鍼治は、肩、上膊、前膊では二分乃至五分位刺鍼して弱雀啄廻旋術を行つて、麻痺せる神經や筋の興奮を圖り、手指部では半分、一分の單刺術を施して、知覺の恢復を圖ると同時に、麻痺せる神經末梢の恢復を圖る。

(ロ)灸治は、成るべく經穴を鍼治の半數以下に減じ、半米粒大の灸各々七壯位して麻痺筋の恢復を圖る。

備考。「撓骨神經麻痺治療に必要なる灸穴を記せ」(昭和二年秋神奈川縣)といふ問題に對しては穴名丈けを記せばよい。

「腓腹麻痺の鍼治の適、不適並に理由」(昭和四年五月兵庫縣)は此神經麻痺の事である。又豫後は原因にもよるが治癒するものが多い。

前大鋸筋麻痺の原因治療穴名

(一名　側胸廓神經麻痺)

(A)原　因。過勞、壓迫、ロイマチス、外傷、傳染病後、又筋肉萎縮症の一つとして現はれる。

(實地上相當患者のあるものである)。

(B)症　狀。上肢を下垂すると、麻痺側の肩胛骨は胸廓より隔離して肩胛下隅は脊柱に接近する。上肢を擧げると、水

平位迄しか上らない、それを前方に轉ずると肩胛骨は胸廓を離れて上下から双手で肩胛骨がつかめる。

(C)治療穴名。極泉、天宗、肩外、中府、手の三里、勞宮等。

聯合肩膊麻痺(一名上肢神經叢麻痺)の原因症狀治療穴名

(昭和七年六月大阪府、昭和九年春島根縣)

(A)原　因。多數の上肢神經の麻痺であつて、過勞、肩上重荷、ロイマチス、壓迫、外傷、稀には神經炎性麻痺を原發する事もある。

(B)症　候。運動麻痺が主要な症狀で、病竈の部位によつて左の三種に區別する。

(一)エルブ氏神經叢麻痺は(一名上部叢麻痺)。第五、第六の神經纖維の分佈領域に來るもので、三角筋と上膊の內側二頭膊筋、內膊筋と廻後筋の麻痺を來す。

(二)分娩麻痺は、(一名產科麻痺)。分娩時產婆等が暴力を以て頭蓋を牽引したり、又は醫師の鉗子手術等の場合に來る。

(三)クルンプケ氏麻痺は(一名下部叢麻痺)。第七頸椎神經、第一胸椎神經の分佈區域に來る、拇指球、小指球、骨間筋が麻痺し、瞳孔縮小、眼窩陷沒を伴ふものである。

(C)治療穴名。

(一)天鼎、缺盆(鍼二分乃至五分)卽ちエルブ氏鎖骨上點、第五、第六頸椎の外方一寸五分の處(鍼五分位)、雲門、肩髃(鍼二分乃至三分)、曲池、三里(鍼三分乃至五分)、孔最、大淵、溫溜、陽谿(鍼二分乃至三分)等。

(二)同　前。

(三)大椎、肩中、肩外(鍼二分)、極泉(鍼三分)、後谿、合谷、勞宮、少府、魚際(鍼二分乃至三分)等。

備考一。エルブ氏鎖骨上點とは何ぞや(試驗問題)。上膊神經麻痺の灸治點(昭和四年五月岩手縣)

備考二。エルブ氏は、鎖骨の上方二仙迷乃至三仙迷の處で、第六頸椎の橫突起の高さの胸鎖乳嘴筋の後外方、僧帽筋の前下緣で電氣的刺戟を與ふると、三角筋、二頭膊筋、內膊筋、膊撓骨筋が收縮するのを發見した。

これがエルブ氏鎖骨上點である。膊神經叢の一部に相當する。

乳嘴の中央(乳中)より直登して、鎖骨の上に登つた所に缺盆穴があり、缺盆の上方には天鼎穴がある。

大小胸筋麻痺の症狀治穴

(前胸廓神經麻痺)

(A)症　狀。上膊の內轉が困難で、拍手が出來ぬ、肩上に手が乘らぬ。

(B)治　穴。第五、第六頸椎の外方一寸五分の處と、俞府、或中、神藏、靈墟、神封、步廊、氣戶、庫房、屋翳、膺窓中府、臑會、合谷等、

備考。前胸廓神經と、大小胸筋の起始停止を想起せよ。

菱形筋麻痺の症狀と治穴

(後胸廓神經麻痺)

(A)症　狀。肩胛骨が脊柱に接近せぬ、肩胛骨を固定する力が弱くなる。

(B)治　穴。第四、五頸椎の傍二寸の處と、肩外、附分、魄戸、膏肓、肩中、大杼、風門、肺兪、大椎、身柱等。

備考。同筋の麻痺は肩胛下隅が上擧せられ肩胛骨傾斜し手を水平位以上に擧ぐる事困難となる。[奥、坂本氏內科書上卷]

濶背筋麻痺の症狀治穴

(A)症　狀。上肢を後下方に廻せぬ、つまり後で帶が結べぬ。

(B)治　穴。自ら考へよ。

備考。濶背筋の起始は、第八胸椎以下の棘狀突起と、腰背筋膜、腸骨櫛の後部、下三個の肋骨。停止は、上膊骨後面の上方の小結節棘である。

神經は第五、第六頸椎神經の前枝の纖維から成る肩胛下神經で、そして此筋の下方は腰椎神經の後枝である。

背筋麻痺の原因症狀治穴

(A)原　因。進行性筋萎縮、脊髓空洞症、脊髓炎等。

(B)症　狀。徐々に背筋が萎縮するの結果、脊柱は後彎前屈位より直立位に移る事が不能となる、强て起立さすと後方に倒れる。

(C)治　穴。足の太陽膀胱經の背の第一行(脊柱の兩傍一寸五分)と第二行(脊柱の兩傍三寸)の部の要穴を主治穴とする。

腹筋麻痺の症狀治穴

(A)症　狀。仰臥位から起坐位に移る時に上肢の力でなければ出來ぬ、脊柱前彎、腹部膨滿、腹壁下垂、努責不充分となる。

(B)治　穴。第五肋軟骨の前面から恥骨弓全横徑までの、腹部の諸穴を主治穴とする。

又足の三里、三陰交から反射刺戟を與へる。

備考一。腹部の經穴は正中線(任脈經)各一寸毎に一穴宛、正中線の兩傍五分の處に一寸宛下つて一穴宛、正中線の兩傍二寸の處に一寸宛下つて一穴宛、正中線の兩傍三寸五分の處では散在性にある。

但し臍の上、下、左、右寸法異る所あり。

備考二。筋麻痺は、筋機能の廢絶である。言ひかへると筋の働きが出來ぬ樣になることである。故に筋の作用を理解して居れば、筋麻痺の症狀は自ら明かとなるものである。

股神經麻痺の原因症狀治穴

(A)原　因。腸腰筋ロイマチス、骨盤內腫瘍の壓迫、脊髓の疾患、外傷等。

(B)症　狀。腸腰筋と四頭股筋の麻痺を來す。

大腿を腹に屈曲する事が出來ぬ。

坐位から起立する事困難となる。

又歩行も困難となる。

(C)治　穴。腎、大腸、府舍、衝門、箕門、中瀆、陰包、血海、陽關及び足の三里、三陰交等。

備考。股神經痛に對しても經穴は同樣である、神經痛には鎖經手術、麻痺には興奮術を行ふの差がある丈けである。

股神經は腰神經叢の枝別で第二、第三、第四腰椎の神經で腰神經叢分枝の最大枝である。腸腰筋の間を下行して之れに枝別を與へ、ブーパルト氏靱帶の下から數條の筋枝、皮枝となる。

腰神經叢の枝別は。

(1)腸骨下腹神經、(叢根は第一腰椎神經で、腸骨櫛の部で橫腹筋を穿ちて下腹部に分佈す。)

(2)腸骨鼠蹊神經、(叢根は同前、腸骨櫛及ブーパルト氏靱帶の部から陰阜陰囊に分佈す。)

(3)陰部股神經、(叢根は第一、第二腰椎神經で二枝に分れ精系の皮膜と鼠蹊部に分佈す。)

(4)外股皮下神經、(叢根は第二、第三腰椎神經で、腸骨前上棘の下から大腿の外皮に分佈す。)

(5)股　神　經、(本頁の五行目及び一四七頁參照)。

(6)閉鎖神經、(叢根は第二、第三、第四腰椎神經で、閉鎖管を出て大腿內側の諸筋に分佈す。)

閉鎖神經麻痺の原因症狀治穴

(A)原　因。獨立的原發するものは實地上殆どない、主として股神經麻痺と共に來り、又は分娩によつて發する。

(B)症　狀。大腿內轉筋の麻痺であるから、左右の患肢を接着する事が出來ぬ。

外鎖筋麻痺の爲に外轉運動も困難になる。

(C)治　穴。大腿內側の諸穴、橫骨、陰廉、五里、陰包、血海、三陰交等。

備考。閉鎖神經痛を自ら考へよ。(壓痛點は五里、血海等である。)

臀神經麻痺の症狀治穴

(A)症　狀。大、中、小臀筋、內鎖筋、股鞘張筋の麻痺である。

大腿の外轉障礙。

前屈位から直立位に移る事困難となる。

(B)治　穴。中膂內俞、白環俞、秩邊、會陽、長强、委中等。

坐骨神經麻痺の原因症狀治療法

坐骨神經に對する治療法　(大正十五年十月栃木縣)

解題。爰に揭げた栃木縣の問題は痛、麻痺、に分類して答案を作らねばならぬ、坐骨神經の分佈狀態は解剖の部を痛の部を見よ。

(A)原　因。外傷、骨盤內壓迫、過勞、感冒、難產、脊髓の疾患、其他官能性神經系の疾患等。

(B)症　狀。外轉不能、膝關節の屈曲不能、步行困難、足尖の下垂等。
又末梢麻痺は腓骨神經麻痺、脛骨神經麻痺を來す。
(C)治　穴。坐骨神經痛の部を見よ。(卽ち次、中、下髎、承扶、殷門、陽陵泉、三里、三陰交、厲兌)等。
備考。奏效の理由は鍼科學、灸科學の、「麻痺に對して鍼術、灸術は何が故に奏效するか」の部を見よ。

腓骨神經麻痺の原因症狀と治穴　(昭和六年十月富山縣)

(A)原　因。脊髓及脊柱の疾患、坐骨神經の經路に於ける外傷、異常產(難產)、骨盤內腫瘍等。
(B)症　狀。下腿の伸筋が麻痺する、伸展不能となる、內轉足、外轉膝を來す。
(C)治　穴。犢鼻、三里、巨虛上廉、巨虛下廉、條口、陽輔、懸鐘、申脈、京骨、束骨、通谷、至陰等。
(D)刺鍼法。前記各穴に弱雀啄術を用ゆ。

脛骨神經麻痺の症狀治穴

(A)症　狀。下腿屈筋が麻痺する。屈曲不能となる、外轉足、內轉膝を來す。
(B)治　穴。承扶、殷門、委中、曲泉、陰陵泉、三陰交、中封、商丘、公孫、大白、大都、隱白等。
備考一。右二者に疼痛を發するものは下部坐骨神經痛である。
備考二。總腓骨神經は、大腿の後側大內轉筋裂口の下で、坐骨神經が總腓骨神經、脛骨神經の二終枝に分れたものの一つであつて

二頭股筋の內側を下り、膝腘窩をすぎて腓骨小頭を廻り、長腓骨筋の起始部に入りて。
淺、深の二腓骨神經となる。
淺腓骨神經は、長、短腓骨筋の間を是等の筋に枝別を分ちて下りて足背に至り更らに足趾に分佈す。
深腓骨神經は、長總趾伸筋の間を下り第一、第二趾の背面に分佈する。
脛骨神經(後脛骨神經)は、下腿後側の淺深二層間を下り、內踝の後側から足蹠に至つて內、外足蹠神經となる。

舌下神經痙攣の原因症狀治穴

(A)原　因。遺傳、神經質、ヒステリー、神經衰弱等に來り、又は腦疾患の一症候として他の痙攣と共に來る。
(B)症　狀。言語障礙、呼吸困難、舌後退等。
(C)治　穴。廉泉、天柱、瘂門(普通禁鍼、此場合は差支へなし)、四瀆等。

神經炎の原因症狀療法

(A)原　因。感冒、過勞、ロイマチス、外傷、中毒(鉛、銅の中毒等)、其他傳染病等。
備考。感冒は本病の重要なる誘因である。又職業上よく使用する筋の領域に發しやすいものである。
(B)症　狀。知覺神經、運動神經、又は混合神經の其何れかに炎症を起すによつて症狀も異なるが、神經痛樣の持續性疼痛、知覺異常、運動麻痺、筋肉萎縮、皮膚又は爪の榮養障礙、局所の浮腫、疼痛等は主徵候である。

但し急性神經炎は惡寒、戰慄、發熱を伴ふ。

(C)病理解剖所見。神經間質の結締組織、或は神經の實質、又は兩者に肥厚、赤發、出血、增殖、變性等の變化が現はれるものである。

(D)經　過。急性は多くは二、三週間を以て經過し、慢性のものは數ケ月に及ぶこともある。

(E)療　法。大椎、身柱、筋縮、手足の三里に小灸十壯宛、或は刺鍼三分乃至五分、其他全身の要穴に皮膚鍼を施す。又末梢神經炎には前記の諸穴の他、侵されたる神經の經路に從つて治療穴を求むる。

脚氣の症狀と鍼灸術の效果　(大正十三年四月滋賀縣、同十年春愛知縣)

脚氣の灸治點を記せ　(大正八年五月佐賀縣、同九年五月鳥取縣、同八年三月宮崎縣、同七年十二月北海道廳、昭和四年埼玉縣)

脚氣八處の穴に就て　(昭和九年春千葉縣、兵庫縣、香川縣、昭和四年春埼玉縣、同七年五月高知縣)

脚氣の症狀竝に灸治點及奏效の理由　(昭和四年春埼玉縣)

脚氣の鍼灸治法　(昭和四年五月長野縣)

脚氣の徵候及び其處置法　(昭和六年十月宮城縣)

解題。類題は非常に多い、脚氣(Beriberi)は治療界の問題である。

(A)原　因。ヴイタミンB缺乏、含水炭素攝取過剩と認むる者多きは、近時學界の趨勢である、

(B)誘　因。氣候、風土の影響、姙娠、產褥、衰弱、不攝生等、

(C)症　狀。下腿脛骨前面から初まる浮腫、鈍麻、知覺異常、腓腸筋の握痛、膝蓋腱反射の初め亢進、後消失、便祕、心悸亢進、胃症狀等。

又症狀によつて。(1)浮腫性、(2)麻痺性、(3)惡性の三種を區別する人もある。

(1)は、主として浮腫が高度で(C)の樣な脚氣としての一般症狀を伴ふもの。

(2)は、筋肉の萎縮と麻痺が主なるもので、其他は(C)の樣である。

(3)は、主として心臟を侵すもので、熱があり、紫藍色を呈して衝心して死するもの。

(D)灸治點。昔から風市、伏兎、犢鼻、外膝眼、足の三里、上巨虛、下巨虛、絕骨(懸鐘)は脚氣八處の穴として有名である。

其他は對症的に取穴治療する。

(E)灸治法。脚氣八處の穴に小銑丸大此〇位の灸十壯する。

(F)鍼治法。灸治點と同じ經穴に弱雀啄術、振顫術等を施す。

(G)鍼灸術の效果。鍼灸共に良效を奏す。

殊に灸術は特效藥にも劣らぬよい效果がある。

(H)奏效の理由。鍼の原理、灸の生理作用、病理作用を參照せよ。

豫後。多くは良。心臟を侵すものは不良の事がある。

筋萎縮に對し灸治の奏效する理由　（大正十三年五月奈良縣）

解題。萎縮とは、病理總論の退行性病變中の萎縮をいふものであつて、萎縮とは、(A)單純性萎縮、(B)變性萎縮、(C)增殖性萎縮の三大別位に區別して考へねばならないが、こゝでは筋肉萎縮を單純性及び變性萎縮位に解釋して、なぜ灸治がよいかといふ、灸科學の灸の作用を概論的に書いて答案とする。

筋萎縮は榮養の缺乏によつて起るものであつて、組織の再生機能の減退と、動脈血の減少又は缺乏とに原因するものが多く、又病的產物の中毒作用によるものもある、であるから筋萎縮に灸を施すと、灸の刺戟は直接に筋組織を刺戟して筋細胞は興奮し、血管は擴張し、血壓が高まり、動脈血は一時に共部に盛んに集中して、新陳代謝を旺盛にし、萎縮筋の榮養を恢復するものと考へらる。

又施灸後オブソニンや白血球が增加して病的產物を食盡したりする。

以上の理由で奏效するのである。

腓腸筋痙攣に對する鍼灸點　（大正十年五月佐賀縣）

解題。此問題には其穴名丈けを答案に書けばよい。

穴名。委中、委陽、陽關、合陽、陰谷、承筋、承山、三陰交、大敦、厲兌、等。

腓腸筋痙攣の原因症狀

解題。腓腸筋痙攣は俗にいふこむら返りで、又別名を拘攣ともいふ。

(A)原因。過勞、脚氣、水泳、神經質、貧血、コレラ、糖尿病、急劇なる下痢等。

(B)症狀。疼痛性の强直痙攣で、突然强度に其筋が收縮して固くなつて劇痛を伴ふ。

備考。治療穴名。委中、承筋、承山、合陽、三陰交等。

又古書の所謂、轉筋とは此ものをいふのである。

肩部拘攣卽ち肩の凝りの原因竝に治穴鍼治法之が治癒する理由　（昭和三年六月三重縣）

(A)原因。普通左記の三種に區別する。

(イ)局所的原因。肩部筋の過勞、ロイマチス、神經炎等。

(ロ)一般的原因。神經質、不眠、感冒、心身過勞、神經衰弱、等。

(ハ)反射的原因。肺結核、其他婦人科的疾患、消化器疾患等から來る。

(B)治　穴。肩中、天宗、曲垣、大杼、肺俞、肩外、附分、膏肓、神堂、譩譆、天柱、風池、第三、第四、第五頸椎棘狀突起の一拇指横徑の傍、手の三里等の中から强壓して輕快を覺へ、又は壓痛を感ずる部の經穴中から適宜取穴(挨穴)する。

(C)鍼治法。撰定したる一乃至四穴位迄の穴に、三番鍼を以て術者の手に響を感ずる深さに刺入して强雀啄術を行ふ、又は一二分間置鍼する。

(D)治癒する理由。三浦博士の說によると鍼には無毒性の麻醉作用があるといふ、其他刺鍼の機械的刺戟が直接神經纖維に作用して其興奮を鎭靜し、血管を擴張して新陳代謝を旺盛となし、乳酸や炭酸等の疲勞物質を驅逐するからである。

蕁　麻　疹　(ほろせ)

(A)原　因。腸內異常醱酵(自家中毒)、蛸、蝦、蟹等の中毒、糖尿病、消化器病、生殖器病等。

(B)症　狀。皮膚に細き發疹を來し、搔痒を伴ふ、殊に入浴溫室等に居る時は搔痒感增進する。

(C)經　過。急性のものは隱現速かなれども、慢性のものは、一般醫療に抵抗して治療し難いものである。

(D)療　法。膏肓、三焦、に米粒三分の一大の小灸各々九壯宛。

腦貧血の原因症狀治穴　(大正十二年十一月岡山縣、同十年五月高知縣)

(A)原　因。ヒステリー、腦神經衰弱、不眠、精神感動等による血管運動神經の痙攣、內、外出血、心臟衰弱等。

(B)症　狀。急性と慢性とによつて多少症狀が異なる。

(イ)急性腦貧血は。顏面蒼白、四肢厥冷、脈貧數、冷汗、惡心、嘔吐、眩暈、視野朦朧、卒倒等を來す。

(ロ)慢性腦貧血は。頭痛、頭重、眩暈、耳鳴、眼花閃發、心悸亢進を訴へる。

急に起坐した等の場合には卒倒したりする事もある。

(C)治　穴。醫學士大久保適齋氏は四肢の末梢の知覺銳敏なる部を撰んで刺鍼し、末梢の血管を收縮せしめ、腦に血液を還流せしむる還血法を唱ふ。(經穴略す。)

又身柱、肩外、肩中、百會、前頂、後頂、風池、三里、巨虛上廉、束骨、竅陰、大敦、厲兌、等に强單刺術等を施して、頭內血管運動神經の痙攣を反射性に緩解せしむ。

備考。必ず頭部を低くして、刺鍼又は灸治を施さねばならぬ。

大概の場合豫後は良である。

貧血の症狀及治療法　(大正十五年十月滋賀縣)

前項を見よ。

(イ)腦充血の原因症狀鑑別及び刺鍼法　(昭和五年五月長崎縣)

(ロ) 腦充血の原因症狀刺鍼灸法　(昭和五年六月宮崎縣)

(ハ) 腦充血に對する灸治點と其解剖的部位　(昭和七年四月埼玉縣)

(ニ) 腦充血の原治症候及び鍼治法と奏效の理由　(大正八年四月富山縣)

解題。(イ)と、(ロ)と、(ニ)は腦充血に關するすべてを答へねばならぬ。(ハ)はたゞ灸治に用ゆる穴名と其經穴の解剖的位置を答ふればよい

(注意。解剖的位置は經穴學の部を見よ)。

(A)原　因。腦充血は急性、慢性、動脈性、靜脈性等に區別するのであつて。

(甲)動脈性腦充血は。多くは急性である。心身過勞、精神興奮、神經衰弱、ヒステリー、心臟肥大、便祕、等から發し。

(乙)靜脈性腦充血は。多くは慢性であつて、腦より還流する靜脈の壓迫、呼吸器病、循環器病等が主なる原因である。

其他咳嗽、努責は一時性腦鬱血を來す。

(B)症　狀。(甲)急性腦充血は、頭部充血感、顏面潮紅、淺顳顬動脈の搏動亢進、脈强實、頭痛、眩暈、痙攣を發し人事不省となり、鼾聲を發し、瞳孔は縮小する。

(乙)慢性腦充血は、多くは鬱血であつて頭重、上衝、頭痛、眩暈、眼花閃發、耳鳴、惡心、心悸亢進等を來す。

(C)鍼治點。腦頭蓋に屬する各穴、肩背、四肢、指趾の末梢等に取穴する。

(D)穴名及手技。頭維、百會、本神等には淺き單刺術、天柱、風池には深さ五分位の廻旋術、身柱には單刺術、手の三里、合谷、魚際、足の三里、巨虛上廉、下廉、三陰交、懸鐘、陽輔、外丘等には雀啄術等を、二間、三間行間、申脈等には强き單刺入術を施す。

其他には對症的に處置す。

備考。原因にもよるが豫後多くは良である。

(E)奏效の理由。頭蓋以外の血管を擴張せしめて、腦に充血せる血液を腦以外の末梢に誘導し、其他刺鍼刺戟によつて、血液循環を生理的狀態に導き鎭經を計るからである。

又藤井氏に據ると後頸部に於ける皮膚刺戟は頭內血管を收縮せしむると。

腦充血と腦貧血との病理解剖的變化

(A)腦充血。

(1)腦實質は、薔薇色で澤山の小出血斑點がある。

(2)腦膜も潮紅する。

(3)腦膜竇も血液に富む。

(B)腦貧血。

(1)腦實質は、蒼白色となる出血斑點はない。

(2)腦膜も蒼白色で貧血する。

(3)腦膜竇の血液も減少する。

腦充血と腦貧血の處置　(大正七年九月北海道廳)

よく考へて答を作れ、經穴は大體同樣で理論は反對である。

高血壓病とは何ぞ之が灸治穴名と奏效理由

血壓亢進症に對し灸の效否に就て其理由を記せ　（昭和九年秋岐阜縣）

定義。高血壓病とは或る期間血壓が、正常血壓よりも高壓を呈し、これが主要なる症候乃至症候群を來す疾患を總稱する。

(A)原　因。動脈硬化症、萎縮腎、內分泌の異常、多血質、腎炎、或種の心臟疾患、血管神經官能の異常等。

(B)症　狀。脈搏硬變、血壓上昇、頭痛、逆上、眩暈、胃腸障礙、神經痛等。

(C)灸治穴名。大杼、心兪、腎兪、足の三里。

(D)奏效理由。(C)に擧げたる各穴は經絡の學說による要穴であるは勿論、肺臟、心臟、腎臟のヘッド氏帶である。

灸は甲狀腺等のホルモンに或種の影響を與へるものと考へらる。

灸は一時血壓の上昇を來すが後却つて下降を來す。

灸は血液循環を生理的に圓滑ならしめ、刺戟療法として良效をもたらすものである。

腦溢血及半身不隨に對する鍼灸治法　（昭和三年五月滋賀縣、同七年五月栃木縣）

中風とは如何なるものか之に對する施灸の時期

並に其部位　（大正十五年四月奈良縣、同十二年七月三重縣、昭和六年八月山形縣）

解題。中風、又は卒中とは腦の溢血腦出血の事である。

(A)原　因。種々であるが普通左記の如く區別する。

(イ)血管の變化。就中最も多きは粟粒動脈瘤の發生、石灰樣變性、脂肪變性、腦動脈硬化症等。

(ロ)血壓の亢進。循環障礙、萎縮腎等。

(ハ)腦實質の變化。炎症、軟化、萎縮等。

身體短矮にして脂肪の多い者は本病にかゝり易い、卒中體質といふ。

憤怒、怒責、酒、熱浴、遺傳、素因、不規律な生活等は誘因となる。

(B)症　狀。俄然人事不省となつて卒倒す、昏睡、鼾聲、運動、知覺、諸反射機能等全く消失して、卽時又は二、三日中に死するものあり(卒中發作)。

死せざる時は呼吸深長、顏面潮紅、顳顬動脈强く搏動し、瞳孔の反應は消失し、大小便を失禁す。

卒中發作が緩解すると廢墜症狀を殘す。

所謂殘留性病竈症狀であつて、言語澁滯、半身不隨が廢墜症狀の主徵候である。

(C)施灸の時期。卒中發作の當日は普通の醫療にまかすか、又は普通醫師と共同治療をするがよい。發作當日でも救ひ

腦溢血に施灸する時期及び最も有效なる施灸點　（昭和四年春靜岡縣）

腦溢血後の半身不隨症の刺鍼法及び主治穴　（昭和六年十月島根縣）

得る自信あり、且つ患者の請托あらば施鍼又は點灸して差支へない。

(イ)鍼治法は。腦充血の部に記した諸穴處方でよい。

(ロ)灸治法は、翳風、天柱、風池、肩中、肩外、肩井、心兪、曲池、三里、肩髃、風市、足の三里、絶骨、行間等。

廢墜症狀に對しては、殊に鍼術、灸術の適應症である、經穴は大體同樣である。

備考一。病理解剖所見の概略、出血竈の大、小は種々である、血管の破裂が小さくとも、全半球の大部に亘る事もある。出血竈の形狀は、圓形、長形、不正形の事もある。

新鮮なるものは靡粥狀陳舊なるものは血腫を作り、又は血球は分解吸收されて透明な漿液となる事もある。

發作と共に死するは電擊性卒中といふ。

備考二。又中風豫防の灸法がある、諸家によつて多少異なるが明堂灸經の所謂中風七穴の灸法は、百會、曲鬢、曲池、肩井、風市、足の三里、絶骨、以上七穴に灸七壯乃至十壯するのである。

本病に就て更に詳細を極めんとする人は別著實驗鍼灸病理學後篇を讀まれたい。

備考三。「中風の原因及び症狀灸治療法」(昭和八年夏神奈川縣)

中風症に施灸すべき時期と上肢に施す可き主治穴名

(大正十年京都府)

(A)時　期。發作鎭靜後、又は廢墜症狀期卽ち半身不隨を來せる時が最もよい。

(B)上肢の穴名。肩髃、曲池、三里、魚際等。

腦溢血後の半身不隨に對する灸療法

(大正十二年十一月長崎縣)

灸療法は前々項の(C)の部の(ロ)を見よ。壯數は半米粒大の艾一穴に八壯宛する。

半身不隨に對する刺鍼法と奏效の理由

(大正十四年十月富山縣)(同十四年十二月埼玉縣)

經　穴。五七四頁の(C)の部の、(イ)鍼治穴、(ロ)灸治穴、全部を用ひて適應手技を施こす。

奏效の理由。刺鍼の機械的刺戟によつて、直接に麻痺筋や神經の興奮を計り、腦の溢血せる血液の新陳代謝を旺んならしめて吸收、消散せしめ、又不明の原因あつて奏效する。

備考。「半身不隨症の原因、症狀、治療穴名」(昭和三年五月滋賀縣)

失神の原因症狀治療法

原　因。症狀。治穴。共に皆腦貧血五六八頁に同じである。

備考。失神とは症候的病名であつて、卒倒して一過性人事不省となる事である。

脊髓炎の原因症狀治穴

脊髓炎の症候竝に施灸の利害　(昭和四年五月鹿兒島縣)

(A)原　因。結核、感冒、外傷、チフス、インフルエンザ、淋疾等の急性傳染病より發す。
慢性のものは結核又は黴毒が屢々其原因となる。

(B)症　狀。病竈の高さ(脊髓斷區)によつて症狀は多少異なる。

(一)頸髓炎は、上下肢の運動麻痺、上肢の筋萎縮、眼、瞳孔現象、全身の知覺障礙を來す。

(二)胸髓炎は、實地上最も多く、下肢運動障礙、腹背筋肉の萎縮、胸部以下の知覺障礙を來す。

(三)腰髓炎は、下肢の運動麻痺、膝蓋腱反射の消失、下肢の知覺障礙を來す。

(四)薦髓炎は、大體に於て腰髓炎と略々同樣であるが、臀部の下端と內股に知覺障礙が著明である。
其他一般に始めは電擊痛、弛緩性麻痺を現はし、後に痙攣性の麻痺となる。
必ず膀胱、直腸障礙を伴ひ、尿失禁、尿閉、尿淋瀝等を來す。
又榮養障礙の爲褥瘡を發す。

(C)經　過。始め發熱し、幾日かの後に下熱し、次に數週、數ヶ月で症狀が定型的となる。

(D)豫　後。適當の鍼灸療法によるものは治するものがある。
重症のものは全治困難。
輕症のものは一部の運動麻痺をのこしやすい。

(E)治　穴。頸髓炎には、大椎、大杼、手三里、合谷。
胸髓炎には、大杼、身柱、魄戸、神堂、手三里。
腰髓炎には、天樞、命門、陽關、大腸俞、犢鼻、足三里。
薦髓炎には。長强、中膂內俞、血海、三里、三陰交等を適宜施灸する。
又場合によつては足の太陽膀胱經より挨穴(取穴)する。

脊髓勞の原因症狀治穴　(昭和七年四月福井縣　昭和七年三月朝鮮京畿道)

(A)原　因。陳舊なる黴毒である。外傷、荒淫、大酒、頻產等は誘因となる。

(B)症　狀。大體に於て脊髓炎によく似て居る。

(C)經　過。緩慢。數年、或は十數年に及ぶ。

(D)診　斷。膝蓋腱反射の消失。
帶狀知覺障礙。
ロンベルグ氏症候(兩眼を閉ぢ兩踵趾を接着して直立せしむる時は動搖して倒れさうになる狀態)。
脊髓炎との鑑別。
脊髓勞は早期に知覺脫失を來すが運動麻痺は脊髓炎よりも遲い、脊髓炎は運動麻痺が早く現れる。

(E)治　穴。身柱、手の三里、合谷、委中、足の三里、三陰交、絕骨等。

(F)豫　後。治癒困難。

脊椎(脊柱)カリエス
脊髓壓迫症の原因症狀(一名龜背)

(A)原　因。最も多きは結核、其他脊椎骨の腫瘍、黴毒等。

(B)症　狀。脊柱變形、脊柱の自發的、他動的疼痛、神經痛(電擊痛)、知覺過敏、等。大體脊髓炎によく似てゐるが、其鑑別點は。軀幹や頭部を動かすと或る一部位が硬直する、椎骨を壓迫すると著明な疼痛がある。棘狀突起は後方に突出して龜背となつてゐる。

(C)治　穴。鍼灸醫術の原理を考へて治穴を定むるがよい。

(D)豫　後。治、不治あつて一定せぬ。

備考。原因。結核菌によるものは、臨牀上これを脊椎(脊柱)結核といふ。患者は多數あるものである。

即ち脊椎カリエスである。

脊椎カリエスの經過は、普通緩慢である。灸治の適應症である。

灸法。四華、患門、大椎、大杼、身柱、筋縮、腰俞、等。

脊髓空洞症

(A)原　因。先天的發育異狀、遺傳。

(B)症　狀。進行性筋萎縮、知覺異常、榮養障礙等。

(C)治　療。灸は大杼、大椎、身柱に米粒大の灸七壯、足の三里に同五壯灸ゆ。

鍼は大杼、大椎、身柱、肩中、肩外、足の三里を主治穴として、全身の要穴に淺き皮膚鍼を施こす。

血友病

(A)原　因。遺傳、(眞因不明)

(B)症　狀。小瘡でも出血著るしくて止血しがたい。

但し思春期後に至ると出血傾向は稍々減少するものである。

(C)療　法。一番鍼を以て全身の要穴に接觸的淺刺を施す。

日射病

(A)原　因。夏季の無風、鬱熱、太陽熱直射。

(B)症　狀。頭痛、眩暈、體溫上昇、脈搏幽微細小等。

(C)療　法。全身要穴に接觸的皮膚鍼を施す。

第二章　小兒科病學

小兒科學の意義

發育の道程にある、心身共に未だ完成せられてゐない人の內科的疾患に就ての記述である。

小兒の診察に就て

小兒は診察に際して號泣、抵抗・拒否等を爲すが故に、その診察は、大人の場合の樣に順序よく系統的には出來ぬものである。我皇漢醫學に立脚する直觀的診察の方がよいかと考へられる。小兒の疾病は、大體に於て治癒し易い。

そして、實際臨牀上では、疾病の數が大人よりも少ないものである。

小兒科病の治療は、藥學的效果の多くを期待し得ぬ、現今の小兒科學上一種の强壯療法とも考ふべき、理學的療法たる我鍼灸醫術の應用によつてなるべく之が治療を爲し、藥物療法は出來る限り之を避くるが合理的である。

小兒の疾病には、特に所謂小兒鍼、又は所謂小兒灸が驚く程效果を奏するものである。

小兒診療上、些か心得て居らねばならぬ事項二、三を左に記して初學の參考としてをく。

(1) 小兒期

(1) 初生兒……臍帶斷端の脫落するまで、生後約七日乃至十二日間。
(2) 哺乳兒……初生兒期後から離乳期、卽ち滿八ヶ月乃至滿一ヶ年迄。
(3) 幼　兒……離乳後から滿六歲迄。
(4) 兒　童……七歲より十三歲迄。
(5) 思春期……睾丸、卵巢ホルモンが、性的の特徵を現はし來る時期で個人によつて差がある、大體十四、五歲以後。

本邦小兒の體重

	男兒		女兒	
分娩直後	三・〇〇〇	二・八〇〇	二・八九〇	〇・七七〇
滿二週	三・二九〇	〇・八八〇	三・一九〇	〇・八五〇
滿二ヶ月	四・〇八〇	一・〇九〇	三・七九〇	一・〇一〇
滿四ヶ月	六・〇四〇	一・六一〇	五・七七〇	一・五四〇
滿六ヶ月	七・〇五〇	一・八八〇	六・四九〇	一・七三〇
滿八ヶ月	七・八七〇	二・一〇〇	七・三一〇	一・九五〇
滿十ヶ月	八・四三〇	二・二六〇	八・〇六〇	二・一五〇
滿一歲	九・〇〇〇	二・四〇〇	八・五一〇	二・二七〇

滿　二　歳……一〇・八〇〇……二・八八〇＝　九・九〇〇……二・六四〇
滿　三　歳……一二・二五〇……三・二七〇＝一一・五一〇……三・〇七〇
滿　四　歳……一三・六八〇……三・六五〇＝一二・一五〇……三・四四〇
滿　五　歳……一五・一八〇……四・〇五〇＝一二・五九〇……三・八九〇
滿　六　歳……一六・五〇〇……四・四〇〇＝一六・〇一〇……四・二七〇
滿　七　歳……一七・四七〇……四・六六〇＝一六・九一〇……四・五〇〇

備考。但し此體重は學者により著書によつて可成り動搖(增減)がある。

乳兒榮養法

乳兒の榮養法には左の三法がある。

(1)天然榮養(自然榮養法)。
(2)人工榮養(不自然榮養法)。
(3)混合榮養(天然、人工混合榮養法)。

一、天然榮養。

生母又は乳母の乳汁を以て保育する事である。此の榮養法が、最もよいのであることはいふまでもない。

授乳法。

(イ)回數。一日五回乃至六回。
(ロ)時間。三時間乃至四時間の間隔を以て與へる。
(ハ)分量。滿腹して乳房を離すまで與へる。
(ニ)離乳。强壯兒は八ヶ月で離乳して、牛乳、粥汁、粥等の混合食に移らしめる。
薄弱兒の時は、十ヶ月乃至十二ヶ月で、混合食に移らしめる。

二、人工榮養。

牛乳が最も普通に用ひられるものであるが、此物には蛋白質と鹽類が人乳よりも多くして、糖分が足らぬから、糖を加へねばならぬ。

又水(煮沸せるもの)を以て稀釋せねばならぬ。

稀釋度

月數(年齡)	牛乳	水	一回量(グラム)
自一ヶ月　至二ヶ月	一	三	一二〇、〇
自三ヶ月　至四ヶ月	二	一	一四〇、〇
自五ヶ月　至七ヶ月	三	一	一六〇、〇
自八ヶ月　至九ヶ月以後	全乳		二〇〇、〇

(但し早產兒又は消化不良の傾向ある時は、更らに水分を多くして用ひねばならぬ。)

含水炭素の添加。

牛乳を上記の通り稀釋すると、蛋白質と鹽類は、人乳と大差なくなるが、含水炭素(糖)と脂肪が人乳よりも不足するから稀釋乳、全乳に糖を加へねばならぬ。

糖は。砂糖、乳糖、水飴、メリンスフード、滋養糖、マルツ汁エキス等がよい。

又、米、燕麥等の煎汁、或は夫等の粉末を用ひる。

便祕の傾向ある時はマルツ汁エキスを下痢の傾向ある時はメリンスフード、水飴、滋養糖等を用ふるがよい。

添加糖の量。

生後一ケ月……○・五%乃至一%

同　二ケ月……一%

同　三ケ月……二%

同　四ケ月、五ケ月……四%

同　六ケ月以後……六%

但し生後滿一ケ月以内は用ひぬがよい。

脂肪の添加。

此のものは特別の榮養障礙の場合以外は用ひなくともよい。(使用の時は小兒科專門醫の指導を待つがよい)

人工榮養兒の授乳回數。

一日五回乃至六回。

但し夜睡眠中は與へぬ方がよい。

一回の分量の限度は(稀釋したもの又は全乳)約一二〇〇瓦乃至二〇〇瓦迄である。

三、混合榮養。

人乳が不充分の場合に母乳と前記人工榮養法を混用する事である。

そして何れの場合でも、副榮養物であるヴイタミン(A)、(B)、(C)に對する注意を忘らぬ樣にせねばならぬ。

此目的の爲に果物の絞り汁や、野菜の煎汁を極く少量に添加するものである。

第二節　小兒科學各論

體質異常

意義。

一、體質異常は定型的の獨立せる疾患ではない。

一、或種の疾病に對する易感性體質である。

一、普通兒にあつては生理的刺戟である場合でも異常反應を來して。それが疾病となつたり疾病の誘因となつたりする。

分類。

備考。この體質異常の分類命名は、學者によつて多少異つて居る。

例へば、

(1)淋巴胸腺體質

(2)滲出質(滲出性體質)

(3)神經痛風體質

の三大別に區別する學者が多いが、

本書は理解を專一として、

(1)淋巴胸腺體質

(2)滲　出　質

(3)神　經　素　質

(4)多　血　質

(5)弛緩遲鈍質

(6)無力性體質

の六種に區別して記述する。

但し此等の體質は、劃然たる區別のあるものではない。

實地上に於ては、夫等が互に混和して存在するものである。

其混在せる體質性症狀の中で、例へば滲出質が著明であれば之を滲出性素質といふのである。

原因。體質異常の眞因は不明であるが、遺傳性が多き點丈けは各學者の肯定する處である。

療法。鍼治は、手謂小兒皮膚鍼を、毎日一回行ひて連續治療し、體質の改善を計る。灸治は、身柱に米粒三分の一大の灸二壯乃至五壯或は七壯、年齢、症候等によつて壯數を加減し數週數月に及ぶべく、長期施灸するに當つては、時々施灸を中止し、再三に及んで又繼續せねばならぬ。

備考。「虛弱體質に對する施灸法」(昭和九年秋佐賀縣)の問題は此記述に就て考へよ。

滲出質（滲出性體質）

(A)意　義。此體質の特徴は、皮膚、粘膜の滲出性傾向と、加答兒性炎の傾向とを有する事である。又別名を炎症性素質ともいふ所以である。

脂肪や鹽類の新陳代謝が障礙され易く、且つ水分代謝の不安定である。

(B)症　狀。(イ)脂　漏。顱頂部の皮膚に黃褐色の(糠樣の)痂皮を生じ、之を除くと赤色で稍々濕潤して居るが、翌日になると再び痂皮が出來る。

(ロ)紅　斑。頰部に生ずる限局性の紅斑で、後に鱗屑狀になつて剝落する。

(ハ)發　疹。粟粒樣又は蕁麻疹樣の發疹で上、下肢の伸側、臀部によく現はれる。

(ニ)地圖舌。舌の上皮剝落して周圍の不整な地圖樣の剝落部を生ずるが哺乳には差支へがない。消失したり、現はれたりする。

其他咽喉頭加答兒、氣管枝加答兒、胃腸加答兒等を來し易い。

又頑固なる鼻加答兒を伴ふものが多い。

要　約

症候を極く簡單にいへば、

一、一般刺戟に敏感である。

一、かぜをひきやすい。

一、皮膚がたゞれやすい。

一、水分代謝並に榮養が不安定である。

淋巴腺體質

(A)前　提。此體質は解剖學上、胸腺淋巴腺の增大せるもので、生前之を證明することは困難である。

(B)症　狀。(イ)皮膚蒼白、割合に肥えてゐる皮下脂肪に富む。

(ロ)扁桃腺、淋巴腺等が肥大して居る。

(ハ)些細な運動や精神感動で、不安、夜驚症、痙攣、搐搦等を來し易い。

(ニ)但し實地上殆ど診斷困難である。

麻醉劑應用、血淸注射、等で突然死亡する者は此體質と關係があると考へられて居る。

神經素質（所謂神經質）

(A)症　狀。(イ)此體質の乳兒は物に驚き易い。

(ロ)睡眠、哺乳、榮養共に不良、啼泣し易い。

(ハ)眼光鋭にして淸澄である。

(ニ)運動は衝動的で刺戟に感じ易く、感情は鋭敏である。

(ホ)所謂才人的蒲柳の質である。

多血質

(A)症狀。(イ)よく肥つてゐて身體各部の發育は可良である。

(ロ)發汗し易く其結果濕疹に罹り易い。

弛緩遲鈍質

(A)症狀。(イ)皮膚、粘膜蒼白。

(ロ)筋肉弛緩、運動不活潑。

(ハ)顏貌遲鈍、注意力散漫である。

無力性體質

(A)症狀。(イ)皮膚蒼白、皮下脂肪蓄積不良。

(ロ)胸廓扁平狹少、心窩部鋭角。

(ハ)體重に比較すると身長が高すぎる。

(ホ)有閑階級、上層階級の學童によくみる一種の型である。

(ヘ)大概神經素質と混在する。

總括

(B)療法。以上の體質異常兒は、五九二頁の腺病質等と共に俗に謂ふ疳虫の一部分である、それ等の體質改善には、必ず鍼術又は灸術を應用すると共に、榮養に注意し、適度の戸外運動と、日光とに惠まれねばならぬ、

施鍼、施灸は必ず試みねばならぬ。

鍼治。所謂小兒鍼がよく效く。

灸治。大椎、又は身柱に三分の一米粒大のもの三壯乃至五壯。

備考。所謂小兒鍼の技術方法及び人體に及ぼす影響

(甲)方法。

一、螺旋裝置の單入鍼俗に謂ふ小兒鍼を用ゆ。此鍼は一種の瀉血鍼のやうにバネ仕掛になつているものであるが、鍼尖を求むる深さに一彈きすれば出るやうに加減してをく。

二、疾病に應じて、一定の穴に淺く彈入し鍼頭を一打して彈入し、指が鍼頭を離れると、鍼尖は舊位置に返る。

三、又三番の毫鍼をとりて示指と拇指との間に縱形(指の長軸と一致させる)に挾み、鍼尖を求むる長さ(約一分の三分一位)に出し

て、要穴に接觸的單刺術を施こす。

三、小兒鍼施術に際しては、鍼管も押手も不要である。

各穴に一鍼宛を施こすもので、時間の如きは數分で施術を得るものである。

一、頭部、項部、顳顬部、肩、背、腹部、四肢の要穴を疾病に應じて撰擇して手早く之を行ふ。

(乙)其作用。(影響)

一、皮膚の知覺神經は刺戟によつて興奮す、其興奮が脊髓に傳導され、交通枝を介して交感神經を興奮せしむ、故に交感神經は緊張狀態となる。

一、緊張狀態に在る、交感神經によつて支配せらるる網狀織內皮細胞も亦緊張す。

一、此網狀織內皮細胞は血液成分の化成に有力なる一系統であるが爲に、其結果として、白血球、免疫物質(正常凝集素、正常溶血素等)、纖維素原等は增量す。

一、遮光による(光線の不足を意味すと考ふるもよし)アチドーヂス(酸毒症)を、アルカローヂス(酸毒症中和狀態)とする。

一、骨の發育にも良好の影響を及ぼす。

註、參考文獻。藤井秀二博士、水野重元博士の業績。

腺病質

定義。小兒結核による症候群を呈するものを腺病質といふ。

(A)體質異常との關係。滲出質、淋巴胸腺質の小兒が、結核に傳染せる場合の症候群を一括して腺病質と考へてよい。

之を否定する一派の學者もあるが、體質異常を除外すると理解し難い。

(B)症狀。一、全身症狀としては皮膚蒼白、筋の弛緩、食思不振、時としては輕熱を來す事もあるが多くは無熱である。

一、眼症狀。結膜炎、角膜炎、流涙、羞明等。

一、發疹。口、鼻、眼等の周圍に濕疹を來し易い。又よく鼻汁を流出する。

一、淋巴腺の腫脹。特に頸部、後頭下部、顎下部、耳後、腋窩、鼠蹊部、肺門等の淋巴腺の腫脹。

備考。これ即ち腺病の名のある所以である。

二、又指趾骨に肥厚性變化を來すものもある。

一、頑固なる鼻加答兒の爲に上脣が肥厚して、定型的腺病性顏貌を呈するものもある。

一、特に下痢し易い。

(C)經過。慢性。

(D)豫後。良。

(E)養生法。適度の運動、日光、其他生活環境の改善。(藥物療法はない)

(F)療法。鍼治法。小兒鍼。

灸治法。大椎、大杼、又は身柱に小灸三壯乃至五壯。

平衡失調症

(A)原　因。普通は人工榮養兒の含水炭素不足の場合による。

備考。無智(乳兒榮養上の無智識)なる牛乳榮養法による場合である。

(B)症　狀。體重增加の緩慢、發育不良、便祕、或は石鹼便、一般抵抗力の減弱等。

(C)療　法。小兒鍼を應用すると同時に牛乳中に水飴、或はマルツ汁エキスを加ふるとよい。

備考。又小兒鍼を毎日施行して、滋養糖、モルテッドミルク、水飴の中の何れかを混じて榮養すると成績甚だ良好である。

食餌性貧血

(A)原　因。人工榮養、(特に乳粉の如き)、離乳遲延、ヴイタミンの缺乏等。

(B)症　狀。皮膚蒼白、筋肉弛緩等。

(C)療　法。榮養に注意し。

鍼治法。全身の要穴に小兒皮膚鍼を施す。

灸治法。身柱に小灸三壯乃至五壯する。

呼吸性激情性痙攣

(一名憤怒痙攣)

(A)原　因。神經素質、二歲乃至五歲位の幼兒に屢々來るものである。

(B)症　狀。感情の激する時、激怒性興奮の極に達して、瞬間性呼吸休止、眼球上竄、顏面蒼白、チアノーゼを呈す。

(C)療　法。鍼は風池、天柱、完骨、大椎、身柱、手三里、合谷等の要穴に一分乃至三分する。

灸治法。天柱、大椎、身柱に小灸三壯する。

小兒急癎(卽ち漢名驚風)の原因症狀治療法

(A)原　因。發熱、消化不良、胃腸違和、感冒、寄生蟲、齒牙發生期等。

幼兒は大腦皮質內の反射制止機が完全に發育してゐないからだと考へられてゐる。

(B)症　候。顚癇發作に稍々似てゐて、牙關緊急、齒齒、眼球上視、全身に痙攣を發するが數分位で鎭靜する。

一日數回反覆する事もある。

(C)治療法。所謂小兒皮膚鍼で鎭痙を計る。神庭、百會、懸顱、懸釐、完骨、天柱、風池、大椎、身柱、肝、膽、脾、胃、三焦、懸樞、鳩尾、巨闕、上脘、中脘、下脘、天樞、手の三里、二間、三間、中渚、商陽、關衝、足の三里、上巨虛、下巨虛、三陰交、絕骨、行間等に接觸的淺刺鍼を施す。

備考一。豫後良、鍼灸の最適應症。

備考二。普通幼兒には鍼の深さは僅かに眞皮に達する程度でよい。

灸療は大椎、身柱に小灸を年齡の數だけ炷へる。

異嗜症

(A)原　因。神經素質、小兒ヒステリー、稀には蛔蟲等。

(B)症　狀。卽ち味神經の異常で、土、壁、砂、木炭、白墨、生米、煙草等の食品でないものを好んで食ふ者である。

(C)療　法。鍼治法。大椎、身柱、三里、合谷に强單刺術を行ふ。
灸治法。大椎、又は身柱に小灸五壯する。

小兒の夜啼に對する鍼療法（昭和七年四月福岡縣）

夜驚症（一名睡怖）の原因症狀療法（昭和六年三月山梨縣）

(A)原　因。滿一歲乃至小學校に入學するまでの幼兒幼童に多い。
神經質、腺病質、貧血兒、薄弱兒によく發生するもので、神經の刺戟、違和、飽食、怪異の玩具、圖書等が其動機となる。恐らくは、
硬腦膜の血壓が上昇するものでないかと考へられてゐる。

(B)症　狀。夜間遽然睡眠から醒めて、恐怖狀態を呈するものであつて、突然大聲を放つて泣く、又母や乳母に抱き付いたりする、そして數分、十數分で鎭靜して安眠する、一夜中そういふ事を何度も繰り返す事もある。

(C)治療法。前項と同じ經穴に、淺き單刺術を企て、反射的に鎭經せしめ、刺鍼刺戟によつて一般細胞の活動性を亢め

植物性神經系統の機能を調節するもので、必ず偉效を奏す。
灸治法。亦前項に同じ。

備考。所謂狹義の「むし」である。又人によると夜啼症ともいふ。

消化不良症の原因症狀治療法

(A)原　因。不良の乳汁、過れる人工榮養、榮養分の不適當、過飲等によるものと。
腸管外傳染(例へば氣管枝炎、流行性感冒、中耳炎、等の場合)等。

(B)症　狀。嘔吐、下痢、靑便、疝痛、發熱等あつて、酸臭又は惡臭ある所謂不消化便を排泄する。
(不消化便は下痢樣便で粘液や豆腐粕の樣な白色塊、又は血液を混じ腐敗性惡臭、酸臭等がある)。
體重增加は停止し或は萎縮を伴ふ。

(C)療　法。出來るならば、六時間乃至二十四時間位絕食せしめて、消化器の休養を計り、授乳、食餌の間隔を四時間とし、夜間睡眠時間中は食餌を與へぬ樣にして充分榮養の授與と成分、分量に注意し、所謂小兒鍼を施こすものである。
小兒鍼は特に身柱、膈、肝、膽、脾、胃、三焦、巨闕、上脘、中脘、下脘、商曲、肓俞、天樞、風池、肩中、肩外、大椎等及四肢の要穴に淺刺鍼を忘れぬようにせねばならぬ。
灸治法。身柱に小灸三壯、三焦に三壯する。

備考。幼齢兒或は重症の者は豫後不良の事がある。

乳兒脚氣の原因症狀治療法

(A)原　因。生母、乳母等の脚氣乳汁から來る。

(B)症　狀。吐乳、青便、便祕、浮腫、聲音嘶啜等。
重症は痙攣をも反覆して豫後不良となるものがある。

(C)療　法。症狀を熟慮した上で、醫師の指導をうけて斷乳し、前項に準じて小兒皮膚鍼を施す。

小兒急性腸加答兒

(A)原　因。食物の腐敗、過食等。

(B)症　狀。疝痛、下痢、嘔吐、發熱三十八九度或はそれ以上、小腸加答兒の場合には不消化性食物の殘滓があつて粘液が少なく、大腸加答兒の場合には粘液が多く裏急後重がある。(註釋。裏急後重は、しぶりばらの事である)

(C)療　法。出來得るならば二十四時間位絶食せしめ、前腹部、腰、背部の要穴に刺鍼する。
灸治は小兒斜差の灸を應用してもよい。

(D)豫　後。多くは良、但し急に心臟を侵すものは不良。

備考。斜差の灸とは肝兪左一穴、脾兪右一穴、女子なれば肝兪右一穴、脾兪左一穴である、小兒胃腸の疾患には本

穴を應用してよい。

小兒慢性腸加答兒(一名脾疳の蟲)の原因症狀治療法

(A)原　因。急性腸加答兒から續發し、又は原發性には薄弱兒の不適當なる榮養によつて來る。

(B)症　狀。下痢一日數回或は十數回、惡臭ある流動性下痢便、粘液下痢便を排泄し、腹部膨滿、羸瘦、貧血等が甚しいつまり(脾疳)脾肝の蟲ともいはれるものである。

(C)療　法。小兒鍼又は小兒斜差の灸(七壯)を施す。
特に鍼は主として足の太陽膀胱經背の第一行(大杼以下)第二行(附分以下)、其他腹部の要穴。足の三里が主治穴である。

(D)豫　後。適當の治療を行へば良である。

慢性氣管枝炎

(A)原　因。體質異常、急性よりの續發、感冒等。

(B)症　狀。時々發する熱、咳嗽、皮膚蒼白、榮養障礙、聽診上濕性、乾性の囉音等。

(C)療　法。鍼治法。小兒鍼。
灸治法。大椎、身柱、曲池に小灸三壯乃至七壯する。

年長兒には灸、年齢の數丈を炷ゆ。

小兒腎臟炎（慢性腎臟炎）

(A)原　因。多く幼兒に來る、麻疹、猩紅熱、ヂフテリア等。
又原因不明の特發性の場合もある。

(B)症　狀。蒼白、貧血、頭痛、發熱、食慾不振、浮腫、尿中の蛋白等。

(C)經過と豫後。慢性ではあるが治癒するものが多い。

(D)療　法。鍼治法。一般小兒鍼、特に注意して腰部の要穴(三焦、腎兪)に輕き刺鍼を行ふ。
灸治法。命門(小灸三壯乃至五壯)、腎兪(小灸三壯乃至五壯)、足三里に同じく小灸三壯する。

所謂腦膜炎の原因治療法（鉛毒性腦膜炎）

(A)原　因。生母、乳母、等が用ゆる白粉の鉛分が、乳汁によつて乳兒に移行し。中毒するものであるといふ。(平井博士)

(B)症　狀。痙攣等の狀態は薄腦膜炎によく似て居るが、第一貧血、第二暗綠色不消化便の長期排泄、第三爪甲の褐色變化、等で經過が長い。治癒し得る。

(C)治療法。斷乳又は乳母を替へて小兒鍼或は小兒灸を應用し、榮養に注意する。

結核性腦膜炎の原因症狀治療法

(A)原　因。結核菌が腦膜を侵すもので乳兒には少く、滿一年以後學齡迄の兒童に最も多い。

(B)誘　因。中耳炎、麻疹、百日咳、外傷、手術等。

(C)症　狀。
(イ)第一期(前驅期)。食思不振、發熱、不機嫌、頭痛、羸瘦等、で固有の症狀を呈しない。
(ロ)第二期(腦膜刺戟期)。知覺過敏となり、徐脈を現し、頭痛、嘔吐、叫喚、意識溷濁、牙關緊急、項部强直痙攣を反覆する。
(ハ)第三期(麻痺期)。呼吸、脈搏の不正、高度の羸瘦、高熱、常に間代性痙攣を發し、遂に心臟麻痺を以て死す。

(D)療　法。鍼治法。百會、前頂、上星、身柱、天柱、風池、合谷、其他腹部、背部、下肢の要穴に淺く刺鍼する。
灸治法。天柱、風池、身柱、肺兪、合谷、足三里に細小の灸十二壯。

漿液性腦膜炎

(A)原　因。肺炎、百日咳、胃腸障礙、麻疹、中耳炎等。(毒性弱き細菌又は毒素の爲と考へられて居る)。

(B)症　狀。高熱、重篤なる痙攣發作等。

(C)療　法。前項に同じ。但し初學者は小兒科專門醫に讓るがよい。
備考。豫後多くは不良。

遺傳性運動失調症

(一名フリードライヒ氏病)

(A)原　因。多くは遺傳、其他不明。
(B)病理解剖所見。脊髓萎縮、後索變質、小腦索、クラーク氏索の萎縮等。
(C)症　狀。生後四年乃至七年位迄の間に發病し、徐々に運動の失調を來すのが特有で、膝蓋腱反射消失、眼球震顫、筋肉拘攣、萎縮、內翻馬足を來す。
(D)療　法。鍼治法。小兒鍼。
灸治法。大椎、身柱、命門、手足の三里に小灸三壯乃至五壯する。
備考。藥物療法には特效藥がない。

進行性筋肉萎縮症

(A)原　因。遺傳、其他は不明。
(B)病理解剖所見。脊髓前角の進行性退化。

(C)症　狀。病理解剖的變化を來せる脊髓神經の分佈區域の筋運動力の減弱と、萎縮が主徵である。好んで幼兒に發し始めは下腿の筋が對向的に萎縮し、終には背部から上肢にまでも及ぶ。
(D)療　法。鍼灸療法共、遺傳性運動失調症に同じである。
備考。脊髓空洞症も又よく進行性筋肉萎縮を來す。

腦性小兒麻痺

(A)原　因。神經質、遺傳、兩親の結核、又は黴毒、酒客、分娩時の異狀等。
(B)誘　因。インフルエンザ、百日咳、麻疹、等。
(C)症　狀。單癱(一肢、一筋群の麻痺)、偏癱(半身不隨)、或は對癱(兩側麻痺)、が主症候である。
(D)豫　後。生命に直接危險はないが治癒困難である。
(E)治療穴。前項の經穴を應用す、又對症的に治療する。
設問。「單癱」、「偏癱」、「全癱」とは何ぞや。

小兒急性脊髓前角炎

(一名ハイネ、メヂン氏病、又一名急性脊髓性小兒麻痺)

(A)原　因。脊髓附近の病變、其他外傷、チフス、肺炎、敗血症、結核等。

主として生後一年乃至學齢迄の兒童を侵す、脊髄灰白質の前角の急性炎症である。

(B)症　狀。俄然たる高熱を以て初まり、精神朦朧となり、間代性全身筋肉痙攣を來し、昏睡し數日後に多く覺醒するが麻痺を殘すものがある。麻痺は偏側或は兩側に來り、筋の萎縮を發し、經過が長引く。時には內轉馬足外轉膝等を來すものである。知覺障礙、膀胱障礙、直腸麻痺はない。萬一それらの麻痺があつても一過性である。

(C)治　療。始めは消炎鎭痙法である、麻痺期には興奮法を行ふべきである。灸術は命門、身柱、足の三里、三陰交等に十壯宛を施すべく、鍼は年齢に應じて一分、二分、三分深さを定め、一般小兒皮膚鍼を應用してよい。

百日咳(疫咳)の原因症狀治療法

(A)原　因。ボルデー、ジヤングー兩氏によつて發見せられた小桿菌である。

其菌の傳染によるもので、深吸氣をして後急激に發する短呼息の連續せる咳嗽、神經反射機能の亢進、呼吸中樞の發作的過敏等が主症候である。

(B)症狀と經過。其經過は之を三期に區別する。

(イ)カタール期。此期には鼻加答兒や氣管枝加答兒樣の症狀を呈する、熱はない。此期は約一週乃至三週位である。

(ロ)痙　攣　期。此期には痙攣性の咳嗽に苦しむ事甚敷、苦悶の狀とても座視するに堪えぬものである。そして其咳嗽發作は一分乃至五分位である。此痙攣咳嗽期は最も期間が長引いて數週以上に及ぶ

(ハ)減　退　期。此期には痙攣性の咳嗽發作は著るしく回數を減じて日々快方に赴く。

(D)治　穴。天柱、風池、完骨、後頸部の阿是の穴(太祖「大椎の大凹部」百勞四穴「大椎及び其直上二寸の處から兩傍一寸の所と、大椎の兩傍一寸四分の處左右合せて四穴)を求め其他肩背の各穴、卽ち肺兪、肝兪、脾兪、三焦兪、手の三里、合谷、手指末節の各穴、足の三里、行間、厲兌等。

備考。要するに鍼治療法は一般神經系に對する鎭靜法及び榮養强壯療法が主眼である。

そして又迷走神經の咳嗽中樞の興奮をも鎭靜するのである。

灸治の場合は大椎に灸七壯身柱に七壯(細小艾)するとよい。

白血球及免疫物質の增加、溫熱刺戟作用等によつて、相當の效果を奏するものである。

百日咳には一般醫療に特效藥のないのは人の知る所であるが、特殊療法としての百日咳感作ワクチン注射も大した結果がない。最新版の東大講師山本博士著「小兒科學」にも此意味は明記せられてゐる。

鍼灸醫術の應用は合理的療法である。

風　疹(かぜぼろせ)

(A)原　因。病原菌不明。

但し此ものは良性の發疹性傳染病である。

(B)症　狀。潛伏期は普通二週乃至三週で、三十八度前後の輕熱を前驅して後、麻疹、又は猩紅熱の發疹に類似してしかも異りたる圓形豌豆大位の着色せる發疹を來す。

備考。風疹にはコプリツク氏斑(麻疹の部を見よ)は現はれぬ。

バルロー氏病の原因症狀治療法

解題。以前モーレー氏は急性尙健病として報告したもので、又一名を乳兒壞血症ともいふ。

(A)原　因。ヴイタミンCの缺乏による。主として人工榮養兒に來る。

(B)症　狀。皮膚顏面の蒼白、著明なる頭部、頸部の發汗、大顖門の膨隆、股關節、膝關節等の腫脹、運動時の疼痛等である。

(C)療　法。林檎汁等のヴイタミンCの含有多き新鮮な果物をすりつぶして其汁を與へ、鍼治法は一般神經系を鎭靜せしめ新陳代謝機轉を旺盛にするの目的を以て、天柱、風池、身柱、胃俞、脾俞、肝俞、大腸俞、懸釐、懸顱、三里等を主治穴として小兒鍼を施す。

驚風とは何ぞや竝に之が治療法

(A)驚風とは。搐搦、急瘛引付け卽ち痙攣で、(四肢が間代性に一弛一縮する事)、又は生齒困難、驚愕、等の爲に來る痙攣をいふ。

(B)鍼治法。一般鎭痙療法で小兒皮膚鍼を施す。

(C)灸治法。身柱に半米粒大の小灸十五壯、又は小兒斜差(肝俞左一、脾俞右一)の灸を應用する。

小兒癎蟲又蟲或は疳とは如何竝に之に對する鍼灸療法を記せ

(A)癎　蟲。神經素質、搐搦、夜驚症、睡眠不良、流涎、胃腸の違和、原因不明の不機嫌、發熱等を總稱するもので、蟲、或は疳も、同じ意味である。

備考。此場合に於て眼球稍々青色を呈する場合が多い。

(B)鍼治法。一般神經系の鎭靜を圖り、新陳代謝機轉を調節するのが主目的である、稍々年長兒に對しては、百會、懸顱等に鍼半分位の深さ、天柱、風池、完骨、身柱、大椎、肝、膽、胃、三焦、懸樞、等に鍼半分乃至一分巨闕、上脘、中脘、天樞、章門、前谷、中渚、二間、三間、商陽、三里、上巨虛、三陰交、絕骨、行間等に鍼半分位する。

備考。幼齡兒には以上の要穴に接觸的淺刺を行ふ。

(C)灸治法。大椎及び左右の、大杼、陶道、身柱に各五壯位する。

(D)豫　後。鍼灸適應症、良。

備考。又五癎の蟲とは、皇漢醫學では、

脾痼、肺痼、心痼、肝痼、腎痼、等の五臟の痼症をいつたのである。(女字は疳と痼同意義に混用せらる)

腺病とは何ぞ之が症候と治療法

定義。腺病とは一種の小兒結核による症候群をいふものであつて、淋巴性體質又は滲出性素質を有する小兒に發し易い。

(A)症　狀。皮膚薄弱蒼白、粘膜は加答兒や炎症を來し易く、殊に後頭淋巴腺、頸部淋巴腺、顎下淋巴腺は著しく肥大してゐる。これ所謂腺病の名ある所以である。

(B)豫　後。豫後はよい。

(C)療　法。鍼灸の適應症である、小兒皮膚鍼、又は大椎、身柱等に小兒灸を應用する。

胎　毒

定義。胎毒とは先天微毒の事であつて、母體の微毒の胎內傳染である。

(A)症　狀。主として皮膚、粘膜、骨の病變であつて、汎發性皮膚濕疹、脫毛、全身及び手掌、足蹠にまで及ぶ膿胞疹膿性鼻汁を分泌する鼻加答兒、口內の潰瘍、骨膜炎、軟骨炎等。

(B)療　法。一般醫療の驅黴療法と共に、療法を施す、特に身柱に小灸三壯するがよい。

備考。小兒の疾病は、これ丈けでないが、小兒固有の疾病の著明なるものを論述したのである。更らに一歩進んで、より以上に及ばんとする人は實驗鍼灸病理學後篇、小兒科學の部を見よ。

第三章　眼科學之部

初生兒膿漏眼(一名風眼)

(A)原　因。淋菌の傳染である、主として分娩時產道で傳染する。

(B)症　狀。多くは一眼、時とすると兩眼が一晝夜の間に侵されて、眼瞼、眼結膜、角膜にまで及び、赤發、腫脹、浸潤を呈し、膿汁が分泌し眼瞼は膠着して開かず、强て開くと膿汁が流るゝ樣に出る、重症はよく失明する、恐るべき眼病である。

(C)療　法。檢定試驗場では禁忌症である。眼科醫療を主とする、鍼灸治療は補助療法の範圍を出でゝはならぬ。

備考。豫防法、分娩直後に產婆はタレデー氏點眼法(二%硝酸銀水點眼)を行ふ。但しタレデー氏改良法は二%は刺戟强すぎるとなして一%の同液を使用する。

眼瞼緣炎

(A)原　因。滲出性質、淋巴體質、腺病質等の薄弱兒に發し易く、又眼瞼の不潔、結核、貧血等の場合も侵され易い。

(B)症　狀。潰瘍性眼瞼緣炎(俗にいふ眼チャ〳〵)と、鱗屑性眼瞼緣炎とを區別する。潰瘍性は、睫毛囊の周圍に膿胞を作つて崩壞するものである。

鱗屑性は、痂皮が糖を撒いたようになる。

(C)治　療。鍼治は、曲差、攢竹、四白、陽白、本神、絲竹空、頭維、頷厭、懸顱、角孫等に單淺刺術、肩背の大椎、身柱、肩外、肩中等に誘導、または反射刺戟を與へる。

灸治は、大椎、身柱、肝俞に小灸(半米粒大)を年の數だけすへる。

涙　嚢　炎

(A)原　因。葡萄狀球菌、連鎖狀球菌、肺炎菌等の化膿菌。

(B)症　狀。鼻根間と內眥の皮膚に限局して、赤發、腫脹、(特に皮膚は緊滿して浮腫狀を呈す)、灼熱、疼痛、頭痛を訴へる。

(C)鍼治法。晴明、攢竹、曲差、懸顱、懸釐、に鍼一分單刺術、天柱、風池に鍼三分乃至五分雀啄術、合谷に鍼三分單刺術を行ふ。

(D)灸治法。風池、大椎、肩中、肩外、合谷に米粒大の灸七壯する。

結　膜　炎

(A)原　因。眼の過勞、塵芥等の異物、採光不充分、等。

(B)症　狀。眼瞼の炎症症狀、卽ち眼瞼結膜の輕度の腫起、潮紅、搔痒痛、流涙、羞明等。

(C)治　穴。前項に同じ。

臚胞性結膜炎

(A)原　因。腺病質、滲出質等の體質異常及び榮養不良等。

(B)病　狀。結膜に於ける臚胞の形成、その臚胞は下眼瞼、眼瞼緣に數個の透明な小粒が併列してゐるものが多い。自覺症狀は輕度の眼瞼充血と搔痒感とである。

(C)目　的。體質の改善、榮養の增進。

(D)療　法。小兒に對しては、風池、完骨、大椎、天樞、肝俞、合谷、手足の三里を要穴として、皮膚鍼を行ふ。大人に對しては、肩外、肝俞、命門、三焦俞、足の三里に鍼、或は施灸する。

角膜實質炎の原因症狀治穴

(A)原　因。多くは先天黴毒、其他結核、腺病、榮養不良。

(B)症　狀。角膜表面の粗糙と、溷濁、遂には乳白色の磨硝子狀となる、羞明角膜の疼痛、角膜の潰瘍等。

(C)治　療。前項に準ず、且つ榮養强壯療法として大小內臟叢に刺戟を傳達すると案外の效果を收め得る。

夜盲症(とりめ)原因症狀治療法

(A)原　因。ヴイタミンAの缺乏、榮養不良、產褥、强烈なる日光等。

(B)症　狀。夕暮から視力が減じて盲人の如くなる、燈火が煌々と輝くと幾分視力が恢復する、眼球に病變はない。

(C)治　療。前項に準ずる、肝油、鰻の肝などを食せしむるとよい。

風　眼(一名大人膿漏眼)

初生兒膿漏眼に同じ。(六〇九頁參照)

備考。禁忌症である。

トラホームの原因症狀治療法

前提。トラホーム豫防取締規則を國家が制定して、其傳搬を取締つてゐる眼傳染病である。

(A)原　因。眞因不明。

(B)症　狀。上、下眼瞼の結膜に、極く小さい粟粒のやうな稍々帶黃灰白色の小濾胞を生じ、其濾胞の摩擦の爲に眼球は赤發、腫脹、混濁して遂に角膜潰瘍や角膜翳を來し又は失明する事もある。

慢性のものは眼瞼に瘢痕を形成して必ず角膜の疾患を來すものである。

(C)治　穴。眼瞼緣炎と同じ。

備考。トラホーム患者は、鍼灸醫術に從事する事は法規上許されない。

又病毒を傳搬する事は自他共に迷惑であるから、治療の前後に特に消毒を嚴重にせねばならぬ。

眼科疾患と頭痛との關係

硬腦膜に三叉神經の細小分枝硬腦膜枝(第一枝の分枝)が分佈するが故に、

(A)屈折異常眼にして眼鏡の不適當、內直筋等の異常、眼性偏頭痛、視神經炎、網膜出血等より眼性頭痛が來る。

(B)鍼灸療法。對症的に頭痛を治療す。

原因療法は各々其原因に從ふて治療す。(註。屈折異常眼卽ち亂視)。

主要なる眼科疾患の概念

(1)白　內　障。水晶體の疾患で水晶體の混濁せるものをいふ。

(2)綠　內　障。患者の瞳孔が碧く見ゆるから、此名がある。

一定の眼疾患あつて來るものは續發性綠內障である。

原因不明のものは之を原發性綠內障といふのである。

(3)亂　視。角膜徑線の方向によつて、光線の屈折狀態の異常なるものをいふ。

(4)角膜葡萄腫。角膜が崩壞して虹彩が脫出し、瘢痕組織を成形して、膨脹突出せるものをいふのである。

備考。肝俞、天樞に灸す。

近視眼

(A)原　因。遺傳、體質的傾向、採光不充分、細小なる活字等。
(B)療　法。灸、角孫、懸顱、上關に三分の一米粒大のもの三壯。
鍼、角孫、懸顱、懸釐、曲差、本神、陽白、下關、に接觸的淺刺術を施し、手の合谷に鍼三分する。

附り　中耳炎

(A)原　因。感冒、熱性發疹性傳染病。
(B)症　狀。耳痛、難聽、重聽、耳漏等。
(C)療　法。耳門、聽宮、聽會、翳風等。

第四章　內科的齒科學之部

齒痛の種類及び適應不適應を區別し適應症に對する鍼灸の法を問ふ

(昭和四年十月京都府)

(A)種類及適應、不適應の區別。

種類	適不適の區別
(イ)齒槽膿瘍	不適應症。(但し實地上禁忌症には非ず、對症的に效果ある場合が多い。)
(ロ)齒膜炎	
(ハ)生齒困難(智齒發生)	根本治療は疑問である
(ニ)齒髓炎及齲齒	が對症療法としては良
(ホ)齒齦炎	效がある。
(ヘ)神經性齒痛(上下齒槽神經痛)	最適應症である。

(B)適應症に對する鍼治法。
(イ)强雀啄術、置鍼術等、强刺戟を原則として患者の症狀、年齡體質等に適應したる手技を施して鎭痛せしむ。
(ロ)經穴。巨髎、迎香、禾髎、地倉、承漿、下關、顴髎、聽宮、頰車、翳風、天柱、風池、肩中、肩外、合谷等。

又解剖學的に前、後顎骨孔を刺鍼點とし、其他痛む齒によつて取捨擇す。而して誘導或は反射刺戟を與へる。

（C）灸　法。翳風に小灸十壯乃至十五壯、合谷、大杼に同く九壯施こす。

齒痛に對する刺鍼法及び目的

（昭和七年四月石川縣、其他各地の實地）

（A）刺鍼法。强雀啄術、置鍼術の强刺戟を原則とし、顏面の中部及上、下顎骨部の各穴を取穴して刺鍼する。特に後顎骨孔からは稍々內下方に斜鍼を試み、前顎骨孔からは後上方に斜鍼して雀啄術を行ふ。

（B）目　的。强刺戟を以て興奮せる前上齒槽神經、後上齒槽神經、下齒槽神經の鎭靜を圖る。

備考。齒痛の原因は、齲齒、齒膜炎、齒髓炎、齒槽神經痛、外傷、肩のこり等である。

齒痛の刺鍼點

（大正十四年九月臺灣臺南州、昭和五年五月千葉縣、昭和六年四月群馬縣）

原因症狀は。疼痛ある齒の種類によつて多少相違あるが、

（A）上齒痛に對しては。巨髎、禾髎、顴髎、下關、聽宮、翳風を主治穴とし。

（D）下齒痛に對しては。聽宮、翳風、頰車、大迎、後顎骨孔、前顎骨孔を主治穴とす。

何れも肩背部の、肩中、肩外、大椎、手の三里、合谷等に誘導又は反射刺戟を與へる。

生齒困難症とは何ぞや竝に處置

（A）原　因。生齒期の乳兒の不明の睡眠障礙、消化障礙、體溫上昇、痙攣等の諸症を來すものである。廣い意味では、素人はやはりむしの中に算入してゐる。

（B）療　法。一般小兒鍼が卓效がある。

備考。本邦乳兒の生齒は最初、七、八月頃、門齒（前齒）から生へ始める。

但し個人によつて生齒の月齡には相當遲速あるものである。

第五章　婦人科學

白帶下の大略を述べ且つ施鍼部位　(大正七年九月奈良縣)

(A)白帶下の大略。

帶下とは子宮、子宮頸管、膣の分泌物を總稱したものであつて、俗にコシケと稱へられて居る。

稍々粘稠の少し白濁して居る分泌物が膣管を濕潤粘滑ならしめて居て、普通の性臭を帶びて居るものは生理的である。

分泌が多量で時々足にまで傳はるものや、腐敗分解によつて酸臭を帶びたものが多量に分泌する場合、水樣帶下が多量の時、又は血液を混じたるもの等は皆病的白帶下である。

(B)施鍼部位。

上、次、中、下髎、曲骨、等は主治穴である、帶脈、五樞、衝門、胞肓、血海等を補助穴とする。

備考一。施灸點。次、中、下髎、血海。

備考二。「帶下に對する施灸の可否施灸點並に取穴法」(昭和九年秋岡山縣)

月經不順に施すべき灸治穴名　(大正八年十月京都府　大正九年五月島根縣)

左右の歸來、腰俞、上髎俞、次髎俞、又は上髎、次髎、中髎俞左右六穴及び血海、三陰交に灸してもよい。

備考。

(1)月經不調(卽ち不順)の原因。腺病質、貧血、結核、衰弱、精神過勞、萎黃病、子宮位置の異常、子宮內膜炎等。

(2)症狀。週期的に(普通約二十八日目前後)月經がなかつたり、月經が中途で閉止したり、平素の月よりも少量であつたりする。其他反射性に神經症狀を發する。

月經過多症の原因症狀治療法　(各地實地試問)

定義。生理的範圍を越えて月經血の多量なるものをいふのである。

(A)原　因。局所的原因と一般的(全身的)原因を區別する。

(イ)局所的のもの。內膜の肥厚、充血、實質炎、子宮筋腫等。

(ロ)一般的のもの。慢性貧血、脂肪過多、腺病質、神經質、萎黃病等。

(B)症　狀。慢性貧血症狀、又は輕度の急性貧血症狀、及腰薦部の鈍痛、同じく寒冷感、下腹牽引痛等、特に月經時多量の出血を主徵とする。

備考。診斷、容易である。凝固せざる月經血が、月經時に多量である。

(C)豫　後。原因にも依るが、鍼灸治療の成績を擧げ得るものが多い。

(D)療法理論。子宮筋の收縮を計り、子宮に於ける毛細血管を收縮せしめ、骨盤內の充血を散ぜしむるが目的である。

(E)療　法。子宮内膜炎の主治穴と同じであつて、上、次、中、下髎、膀胱俞、中極等、又足の三里、三陰交、行間に誘導したり反射させたりする。

月經困難症　（昭和三年秋山口縣）

定義。月經時には、肉體的にも精神的にも種々なる影響を蒙る事は一般周知の通りであつて、其生理的範圍と所謂月經困難症との判然たる區別は困難ではあるが、月經時に勤勞を廢して疼痛を主訴とするものが、爰にいふ所の月經困難症である。

(A)原　因。卵巣、喇叭管、子宮の畸形、それ等の炎症、位置の異常、腫瘍、充血及び内分泌の異常等。

但し主として迷走神經緊張症(ヴワゴトニー)が月經困難症の成因である。

備考。其神經分佈。

内生殖器の神經分佈の詳細は未だ完全に研究されて居らぬようであるが、大體腰部自律性神經が上位の腰骨孔から出でて分佈するものであつて、此神經は下腸間膜動脈の分岐部邊で、多數の神經節を有する大子宮神經叢を構成してから、腰骨胛の前面で左右に分れて、すべての内生殖器に分佈するものである。そして脊髄神經は種々なる經路をとつて、子宮や卵巣の神經叢に混入し、迷走神經は大動脈神經叢を媒介として腰髄より發するものは結合枝を介して分佈するものである。

(B)病理及び症狀。卵巣、子宮、喇叭管に何等かの原因が存する時、迷走神經の異常興奮を來して（ヴァゴトニー）陣痛樣痙攣性疼痛を發し、肩の凝り、惡心、嘔吐、胃腸蓬和(迷走神經の反射媒介による)等を來す。

(C)治　療。鍼治は、上髎俞から五番の三寸鍼で二寸以上刺入して輕き雀啄術を行ひ、次髎、中髎、下髎俞に這入る丈深く鍼して一種の刺戟を傳達し、

又子宮のヘッド氏帶大横、歸來、氣衝に接觸的の單刺術を行ひ、血海、三陰交、足の三里に鍼五分して反射刺戟を傳達する。

(D)灸　治。腰眼と中髎に極小灸十壯、血海に反射を目的として同く小灸八壯する。それが終つたならば最後に正座せしめて天柱に小灸(米粒大)七壯すればよい。

(E)豫　後。あらゆる婦人科的醫療に頑固に抵抗した痼疾も此療法を行へば、毎日施行して一週間位で確實に治癒するものである。

子宮痙攣の原因症狀鍼治療法　（昭和九年秋靜岡縣、大正八年三月廣島縣其他）

解題。症候的病名である。

(A)原　因。子宮癌腫、位置の異常、月經困難・喇叭管、卵巣等附屬器の疾患から來る機質的のものと、便祕、貧血、寒冷、神經質、精神興奮、ヒステリー等から發する官能性のものとがある。

(B)症　狀。下腹壓重、緊張、過敏、骨盤内痙攣性刺痛、ヒステリー球上昇、四肢厥冷、人事不省等。

(C)鍼治法。天樞、氣來、曲骨、衝門、小腸、上、次、中髎、血海等に、五番六番鍼を以つて二寸、又はそれ以上深刺して强雀啄を施す。又足の三里に三分乃至五分刺鍼して反射刺戟を傳達する。

備考。灸治法。次髎、曲骨、三陰交に半米粒大の艾灸七壯乃至十壯宛を施こす。

慢性子宮實質炎の原因症狀治療法

定義。平等なる子宮の增大である。

(A)原　因。主として細菌の傳染による內膜炎。其他後傾、後屈等子宮の位置異常。

(B)症　狀。骨盤內壓重感、月經過少、月經困難、不定時性出血、姙娠障礙、腰薦部の不快感、寒冷感疼痛、下肢牽引痛、便祕等を訴へる。

特に腫大せる子宮の壓迫による裏急後重感がある。

備考。子宮は全體に平等に增大して、姙娠子宮よりも堅く專門的雙合診又は外診の際、下腹壁より左手を骨盤部に壓入しても多少の壓痛がある。

(C)豫　後。生命に危險がない。

生殖に對しては豫後不良なることが多い。

(D)療　法。鍼治、灸治共に子宮內膜炎に準じて取捨撰擇す。

又大腸、關元、小腸俞、に刺鍼二寸乃至二寸五分强刺戟を以て脫糞中樞に刺戟を傳達して排便を企てることも肝要である。

子宮頸管加答兒の原因症狀治療法

(A)原　因。主として淋菌の傳染による、其他產褥にては頸管破裂、會陰破裂が本病の誘因となり、貧血、腺病質、體質、生殖器不潔、月經時の不注意、手淫、性交過度等。

(B)症　狀。子宮膣部及子宮外口は糜爛して深紅色を呈し多少の腫起を來し、オランダイチゴの如く顆粒狀を呈する。主なる症狀は、血液を混じた白帶下であつて、又濃い粘液性の場合も多い、性交時に少量の出血を來し少し疼痛のあることもある。

下腹、腰薦部の不快、鈍痛、下肢牽引痛、其の他反射性神經症狀、植物性神經障礙を來す事が多い。

(C)治療の目的。組織細胞の賦活性を亢め體質の改善を計ると共に、其部の新陳代謝を旺盛にし、分泌物の排泄を良好ならしめ、抗毒素の產成を促す。

(D)療　法。鍼治は上、次、中髎、會陰、腰俞、曲骨、血海等。

又足の三里、三陰交より、誘導、或は反射を企つ。

灸治は下の六ツ灸等がよい。

急性慢性子宮內膜炎の原因症狀治療法

(大正九年四月京都府、昭和七年六月大阪府、昭和三年五月奈良縣)

(A)原　因。女性淋疾、分娩產褥に於ける異常及不攝生、冷却、濕潤、過勞、其他不適當なる生殖器刺戟等。

(B)分　類。急性、慢性を區別す、又細菌の有無によつて、

(甲)黴生物性內膜炎。

(乙)非黴生物性內膜炎(メトロパチー)を區別する。

備考。急性内膜炎は、微生物性内膜炎が急性の經過を取るものをいふ。慢性の經過を取るものは慢性内膜炎である。

非微生物性内膜炎は、所謂慢性子宮内膜炎にして、

間質性内膜炎
汎發性内膜炎　……(慢性内膜炎)

腺性内膜炎……(内膜增殖症)

を區別する。

分類要約

(イ)急性内膜炎、

(ロ)慢性内膜炎、

附たり　内膜增殖症。

(B)症　狀。急性内膜炎は。淋菌、其他膿菌、腐敗菌等が原因となる。

惡寒、發熱、脈頻數、下腹痛、惡露惡臭を放ち、症狀一般に重篤である。

慢性内膜炎は。骨盤内及下腹部の鈍痛及不快、腰薦部の疼痛、下肢牽引痛、腰薦臀部の冷感、子宮の知覺過敏等を來し、水樣帶下、白色膿乳樣の白帶下、帶黃色帶下を來し、其他頭痛、肩の凝、不眠、心悸亢進等の反射性神經症狀を呈するものである。

(C)療　法。子宮粘膜の健康を恢復し、子宮に於ける新陳代謝を調節するを以て目的とし。小腸、上、次、中髎、關元俞、曲骨、血海を主治穴として、刺鍼深さ二寸乃至二寸五分雀啄術を以て中等度の刺戟を企て、血海、足

三里、三陰交等に、誘導、又は反射を試むる。

其他反射性に來る神經症狀及植物性神經の(卽ち胃腸障礙違和)異狀に對して、足の太陽膀胱經等の各穴に、取捨擇擇刺鍼する。灸治は之に準ずる。

備考一。豫後、急性のものは骨盤結締織炎、腹膜炎、膿毒症、敗血症等を來して豫後不良となることがある。慢性のものは生命に關係ない、又よく鍼術灸術を以て治癒する。

備考二。骨盤内結締織とは、骨盤内内臓及筋肉等の隙間を充塡する組織そのものである。

子宮萎縮症の原因症狀治療法

解題。子宮に慢性の榮養障礙があると、子宮は當然萎縮する。

(イ)生理的萎縮。は老人性萎縮、授乳性萎縮、の二種を區別する。

老人性萎縮。は四十五六歲更年期に於て、子宮全體に萎縮するもので老人性退行性萎縮である。

授乳性萎縮。は分娩して授乳する婦人に來るもので萎縮は主に體部に限る、授乳を中止すると回復する。

(ロ)病的萎縮。は久時授乳する婦人は全身榮養障礙の結果として、離乳後でも萎縮してゐる、これは病的萎縮の部に算入する

こんな婦人は萎縮中姙娠は困難である。

(A)原　因。結核、慢性腎炎、關節ロイマチス、甲狀腺腫、精神感動等、及び榮養障礙の高度なるもの、產褥熱等、其他子宮の炎症性疾患後の卵巢機能の變化等。

(B)症　狀。殆ど全部無月經を伴ひ、性感障礙のあるものもあり、子宮は縮小し壁は菲薄となり、帶下は減少し身體は羸瘦するものが多い、肩の凝り、頭痛、眩暈等を發す。

(C)療法概論。萎縮は子宮體部筋が其容積を減じて縮小し、動脈血の灌漑が不充分となり、生理的興奮性の減じたるものであるから、所謂興奮法を施すべきである、

又卵巢興奮法をも應用する。

(D)療　法、鍼治は小腸、次、中、下髎、腰眼、會陰、府舍、等に深刺三寸位、中等度の雀啄術、又は廻旋術を行ふ。

灸治は下の六ツ灸を主治穴とし、其他中樞、血海等を應用する。

子宮癌腫の原因症狀治療法

(A)原　因。不明、誘因は多產、頸管加答兒等。

備考。病理解剖所見、上皮細胞が癌細胞となるもので、其發生の部位によつて、頸部癌、體部癌、膣部癌、を區別するが實地上は頸部癌が一等多數なのであるから、頸部癌に就て記述する、其他は類推して大過ない。

頸管粘膜表面の圓壔上皮、頸管下端の扁平上皮から癌腫を發生するものである。癌腫は息肉狀をなして大小種々の顆粒を形成して凹凸不等な翻花狀を呈するものは(翻花狀癌)、膣部潰瘍となつて腔胴を作るものは(腔胴癌)、其他侵蝕性に圓形潰瘍を作るもの、深部へ侵潤性にひろがるもの等がある。

(B)症　狀。初期には自覺症を缺く、病勢が進むと不定時性の出血、血樣で惡臭ある帶下、疼痛、其他全身症狀を呈す

ものである。

出血は初め不定時性で、性交、勞働によつて增劇し、終には多量の出血を來して慢性貧血が高度となる。

帶下は所謂、シラチナガチ、卽ち血性膿汁帶下であつて惡臭が甚だしい、疼痛は初め一般婦人病の患者同樣であるが、末期には劇痛持續性で下肢に放散し、患者は日夜苦惱する、終には所謂癌腫惡液質に陷る。

備考。豫後多くは不良、早期剔出したるものは良である。でないと平均二年位で死ぬ。

(C)療　法。早期子宮の剔出、レントゲン放射等である。

(D)鍼灸法。對症療法の他仕方がない。

參考。癌の統計は女子は男子に二倍して罹患する、子宮癌は女子癌腫全體の三分の一を占む、男子の胃癌の數と女子の子宮癌の數とは大差ない。

喇叭管炎の原因症狀療法

(A)原　因。鬱血、淋菌、大腸菌、結核等の爲に來る喇叭管の炎症である。

(B)區　別。

(イ)單純性喇叭管炎。

(ロ)傳染性喇叭管炎。

註。單純性喇叭管炎は鬱血のために起るものである。
傳染性喇叭管炎は淋菌、連鎖狀球菌、葡萄狀球菌、大腸菌、結核菌によつて病變を來す。

備考。病理解剖。喇叭管炎は偏側の事もあるが、兩側を侵すことが多い、又部位によつて、喇叭管內膜炎と、喇叭管間質炎とを區別する、粘膜の結締織及筋纖維迄肥厚增殖して結節を生ずるものは、結節性喇叭管炎である。
其他喇叭管水腫は、漿液の潴溜するもの、
喇叭管膿腫は、化膿するもの。
喇叭管血腫は、血液の潴溜するもの、
喇叭管囊腫は、囊狀となりて隆起するものである。

(C)症　狀。
(イ)單純性喇叭管炎は。病變が輕度であつて下腹部の左右或は一側に鈍痛又は卵巢痛を來し、患側の下肢に牽引痛を來す。
(ロ)傳染性喇叭管炎は。病原菌が種々であるから其症狀及經過も種々あつて一定せないが、下腹部鈍痛牽引痛等は必發の症狀である。
勞働、性交、月經等の場合には增惡する。
又喇叭管の收縮時には堪へ難き喇叭管痛を發す。
急性喇叭管炎、は限局性腹膜炎症狀と四十度前後の發熱を呈するものである。

(D)類症鑑別。蟲樣突起炎、盲腸炎、等と鑑別せねばならぬ。

右側喇叭管炎は、盲腸炎や蟲樣突起炎と誤る事が多い、此の錯誤は專門家にすら多いものである、絕對的鑑別法は一寸むつかしいから熟練せる專門家に依賴するがよい。

(E)豫　後。大概のものは豫後良。

(F)療　法。八髎の穴、曲骨、中極等を主穴とする。

惡阻の原因症狀療法　(昭和九年秋岡山縣)

(A)原　因。未だ確實でないが、姙卵及其附屬物から生ずる毒素が、母體の血中に入つて起る姙娠中毒症であるとせられてゐる。

(B)症　狀。姙娠の二ヶ月乃至三ヶ月の初め頃發する惡心、嘔吐、食慾不進、嗜好品の變化等の、消化器障礙が生理的程度を超過して高度となり臥褥する場合で、
第一期(輕　症)。食後にのみ惡心、嘔吐があつて、榮養障礙を來すもの、
第二期(中等症)。食物攝取に關しないで惡心、嘔吐が頻發して削瘦著しきもの、
第三期(重　症)。身體反射機能減退し、搐搦、腦症等を呈して、生命をおびやかすもの、
を區別する。
第三期の惡阻は普通鎭嘔せず、脈は百二十至以上、發熱、譫語、嗜眠狀態等を發して多くは死す。

(C)療法理論。卵巢ホルモンの調節を計り、大小內臟叢及內臟動脈軸叢に、類化機能の調節術を試むるものである。

(D)療　法。中注、帶脈、外陵に淺刺鍼及び肝、膽、脾、三焦俞、に鍼二寸內外雀啄術を施し、又手の三里より反射刺戟を企つ、氣海俞、大腸、關元俞に同じく鍼する。
左の不容、承滿に鍼三分內外の單刺術、足の三里に三分乃至五分の單刺術を施して反射刺戟を企つ。
灸之に準じて取捨し三分の一米粒大の灸八壯內外する。

(E)豫　後。普通良、第三期のものは不良。

備考。「惡阻に對する刺鍼の可否、刺鍼點」(昭和九年秋岡山縣)

子宮血の道とは何ぞや其灸治點

(A)子宮血の道とは。慢性子宮內膜炎、子宮位置の異常、卵巢、喇叭管の慢性炎症等、子宮及附屬器の一切慢性の疾患及び、產前即ち姙婦の神經症狀、產後即ち褥婦の貧血、其他神經症狀等をいふのであつて、頭痛、頭重、逆上、不眠、憂鬱、腰部、薦部、下腹部等の鈍痛、下肢牽引痛、不定の神經痛等の症狀を主訴とするものをいふのである。

(B)其灸治點。子宮內膜炎の部に記したる諸穴を主治穴として、其他對症的に挨穴施灸すればよい。

備考。豫後は無論良である、經過は其原因と療法とによつて長短種々である。

古來よりの婦人科病の名穴三穴を擧げよ

(一)氣海俞。
(二)關元俞。
(三)血　海。

婦人病の一ツ灸

血海。又は腰俞、或は次髎俞等の中から一穴を撰ぶ。

第六章　傳染病學

總說

一、病原微生物の侵入によつて發病する疾病は卽ち皆傳染病である。

一、傳染病の發生には(1)傳染原(細菌)、(2)菌侵入門、(3)菌の數量、(4)感受性がなければならぬ。(傳染病發生の要因)

一、細菌學上、病理學上、大衆衞生上、それ〴〵專門的觀點から種々區別或は分類せらるゝものである。

一、傳染病が個人及大衆に及ぼす害毒は、菌の性質、菌の數量、毒性の强弱、免疫の有無、抵抗の如何、豫防法の巧拙等によつて、疾病狀態は複雜にして且つ多岐である。

一、チフス、肺結核、脾脫疽、インフルエンザ、疔、癤腫、耳下腺炎等に至るまで傳染病の病名だけを、列記しても數頁に及ぶであらふ。

一、但し傳染病篇に於て論ずるものは法律によつて豫防、隔離等を制定せられたる傳染病類及び傳染力强く危害甚しき疾病に限るものである。其各症の重要なるものは以下各論に於て記述する。

各論

第一節　法定十種傳染病

腸チフス

(A)原　因。エーベルト氏が發見した固有運動を有するチフス桿菌。

(B)傳染の徑路。接觸傳染(人から人に)、間接傳染(主として飲料水、食品から)。

(C)侵入の門戸。コレラと同じ。

(D)症　狀。固有の熱型、稽留熱、煤舌、脾腫、脈と熱の不一致、重病狀顏貌等。

(E)豫　後。良、不良あつて一定せぬ、特に二週三週頃腸出血を來すものには豫後不良のものが多い。

(F)傳染病豫防規則の定むる所に從つて隔離治療する。

(G)消　毒。同前。

備考一。糞便の消毒には石灰乳を、

井水にはクロール石灰水を五百瓦に對して一瓦の割合に、

浴水に對しては一石に對し同じく二十瓦の割合に之を加へて用ひ。

又患者看護者の手は嚴重に消毒せねばならぬ。

被服等の病毒に汚染せるものは、一定の蒸氣消毒器を用ひて、消毒器內の空氣を排出せしめ、攝氏百度以上の溫熱を流通せしめて一時間以上消毒せねばならぬ。

備考二。腸チフスの灸治療法　(昭和六年十月沖繩縣)

一、天柱は古來より瘧を治す名穴である。
一、胃俞、三焦俞は、消化、吸收、同化機轉を良效にす。
一、天柱に毎日米粒大の灸七壯乃至十壯、胃俞、三焦俞に毎日同じく七壯する。
一、全治するまで連用する。

備考三。青地、時枝、原諸博士の實驗業績が示すが如く、灸治は免疫物質を增加する。
古來溫疫(熱性傳染病)に灸は盛んに應用せられたものである。
現今法規上チフスに灸治の應用は實際上議論あらんも、本縣の試驗委員が本問題を提出せられし識見に敬服す。

パラチフス

(A)原　因。佛國のアシャール、ペンソード氏が發見した其菌である。
又ブリオン氏、セイゼル氏は凝集反應、培養等の差異によつてA型、B型を、區別した。
(B)傳搬の徑路。飲料水、食品、生肉等。(本菌は牛の腸によく寄生する)。
(C)菌侵入の門戸。チフスに同じ。
(D)症　狀。大體チフスに同じ、やゝ經過と症狀が輕い。
(E)チフスと同じ。
(F)消　毒。患者を隔離し、喀痰、尿、汗、糞便、衣服等法規に從つて嚴重に消毒する。

赤　痢

(A)原　因。志賀氏の發見による赤痢菌である。細菌性赤痢、アメーバ性赤痢を分つ。
(B)傳搬の徑路。主として糞便及びそれに汚染せられたるものによる。
(C)菌侵入の門戸。口腔からである。
(D)症　狀。二日乃至八日の潛伏期を經て、單純性腸加答兒の如き下痢を以つて發病し、腹痛が發作し、次に粘液と血液を混じた下痢便、裏急後重等甚敷、重症は惡寒、發熱を伴ふ。
(E)消　毒。コレラと同じ。

備考。豫防法、豫防灸又は豫防血清の注射を爲すべく、衣食住の清潔に注意し、飲食物は煮沸せるものを用ひ、糞便は必ず石灰乳で消毒せねばならぬ。

疫痢の原因症狀治療法

(A)原　因。大腸菌屬の細菌。

備考。其菌の本態は議論多くして未だ決定しないが、惡性赤痢の樣な恐るべき幼兒の傳染病である。
赤痢に準じて法律上傳染病として取締る。

(B)誘　因。消化器の薄弱、腸管內の腐敗、消化不良、腐敗物の飲食等、つまり飲食物の不攝生と不注意に由る。

(C)症　狀。突然四十度位の高熱を發し、脈搏貧數幽微、痙攣、嘔吐、昏睡等の腦症狀を來し、汚穢粘液樣、或は、惡臭ある下痢便を洩し、發病の當日心臟麻痺を以つて死亡するものがある。(九州地方では本病を颶風といつて非常に恐れてゐる)。

(D)豫　後。前記の如く急速に心臟麻痺で死亡する者が多い。

注意。疫痢の疑ある時は卽時一般醫の診斷をうけさせねばならぬ。

(E)灸　治。醫療と共同して大椎、身柱に灸二十壯する。

(F)鍼　治。は小兒皮膚鍼を應用する。

(G)消　毒。赤痢と同じ。

虎列刺(アジアコレラ)

(A)原　因。コッホ氏が發見したコンマ狀菌卽ちコレラ菌、(印度の地方病)。

(B)傳染の徑路。交通で傳搬し、主として患者の吐瀉物による汚染からである。

(C)菌侵入の門戸。口腔から(主として飲食物による)。

(D)症　狀。劇甚なる吐瀉、無色無臭の米粥汁便、虛脫等。

(E)傳染病豫防規則の定むるところに從つて隔離加療する。

(F)消　毒。主として吐瀉物、其接觸物、衣服、家屋等。

ヂフテリア(馬飛風)

(A)原　因。レフレル氏ヂフテリア菌の寄生による。

(B)傳染の徑路。人から人に、又玩具、器具、衣服、空氣の媒介で傳染する。

(C)菌侵入の門戸。吸氣によつて、咽喉頭、鼻腔等から。

(D)症　狀。咽頭の粘膜、又は扁桃腺に帶黃灰白色の義膜を生じ、漸次、鼻腔、喉頭、氣管に及ぶもので、此際其毒素の爲に、發熱、脈搏微弱、譫語、呼吸困難等を來す。

(E)法規の定むる所により隔離治療す。

(F)消　毒。同前。

備考。此疾患にはヂフテリア血淸を早期に大量の注射をすれば奏效確實である。必ず早期普通醫師の治療を請ふべきである。

流行性腦脊髓膜炎

(A)原　因。メニングコツケン、(胞內雙球菌卽ち流行性腦脊髓膜炎菌)。

(B)傳搬の徑路。接觸又は扁桃腺からとせられてゐる。

(C)菌侵入の門戸。呼吸器から。

(D)症　狀。惡寒戰慄を以て發病し、後不定の弛張熱を呈し、皮膚、筋肉は知覺過敏となる、其他坐位で下腿が伸ばせぬ(ケールニッヒ氏症狀)、劇頭痛、嘔吐、項部强直等。

(E)豫　後。死亡率相當多く、治癒後に於ても、遺殘症狀によつて癈疾となるものがある。

(F)法規の定むる所により隔離治療す。

(G)消　毒。衣服、室內等規定の通り嚴重に消毒する。

猩紅熱

(A)原　因。眞因不明。

(但し近時本病の重症患者の血液中に、連鎖狀球菌を發見すといふ學者あり)。

(B)傳搬の徑路。本菌は强き耐久力を有し、種々な物品に附着した毒素が數ヶ月後に傳染する場合がある。

(C)菌侵入の門戸。主として扁桃腺からではあるまいかといはれてゐる。

(D)症　狀。普通四日乃至七日の潛伏期を經て發疹する、胸部頸部から始つて全身に及ぶ、各疹一つの疹に融合して、恰も猩々の樣に全身潮紅し高熱を發するが、約一週以內に落屑期に入り、糠粃狀の落屑が甚だしく約二週間位つづく。

(E)法規の定むる所に從ひ隔離治療する。

(F)消　毒。患者の全排泄物、衣類、室內、器具等を三%石炭酸水で嚴重に消毒する。

痘瘡(ほんぼうさう)

(A)原　因。眞因不明であるが、强烈な發疹性傳染病である。

(B)傳搬の徑路。人から人に。

(C)菌侵入の門戸。不明。

(D)症　狀。惡寒、高熱、譫語、腦症狀、劇しき腰痛等を前驅して後、第一日に麻疹に似た發疹を來し、

第二日には丘疹にあり、

第三日には水泡になり、

第六日には膿胞に變じ、周圍に紅暈があつて中央が陷凹し、

其後三四日で痂皮を作るものである、後痘瘡瘢痕を殘して治癒す。(不幸な場合は豫後不良)。

(E)明治四十二年法律第十五條種痘によつて豫防する。

(F)消　毒。膿汁、痂皮、淚液、唾液、其他衣服等の患者の接觸物等。

備考。エドワード、ジエンナー氏の發見せる種痘によつて、人類は痘瘡の不幸を救はれたのである。種痘で免疫性を得る。但し最近の學說では免疫期間は半年乃至二年位だといはれてゐるから、流行時には必ず再種痘をせねばならぬ。

發疹チフス

(A)原　因。不明、恐るべき傳染病。

(B)傳染の徑路。不明だが人類は最も感染し易い、衞生狀態の不良な場所に多い。

(C)菌侵入の門戸。人から人に、接觸傳染が殊に劇甚で呼吸最も危險である。(空氣傳染)

(D)症　狀。本病はチフスと何の關係もない、寧ろ發疹性傳染病である。
一定の潛伏期を經て稽留性高熱を來し、微薔疹を發し、强度の頭痛、定魏那、腦症狀、精神障礙等を來す。

(E)法規によつて、嚴重に隔離(傳染病院に收容)治療する。

(F)消　毒。あらゆる接觸物、排泄物、家屋等。

備考。防疫用には三%防疫用石炭酸水(三%粗製石炭酸水)を用ふ。

ペスト

(A)原　因。北里、エルザン氏等が發見したペスト桿菌。

(B)傳染の徑路。人から人に、猫、鼠等の獸類から人に、蚤の如き昆虫から人に。

(C)菌侵入の門戸。皮膚の創傷から、又は扁桃腺、咽頭等から。
特に肺ペストは强毒のある菌が、患者咳嗽から四散して空氣傳染をするので危險最も甚だしい。

(D)症　狀。潛伏期は二日乃至五日で俄に來る惡寒、戰慄、高熱、譫語、衰弱、脈貧數、腺の腫脹、化膿等。
肺ペストは重症流行性感冒、又は重症肺炎に似て、更に重篤で急死する。

(E)明治三十八年に發布された、內務省令第五八六號ペスト豫防心得といふ省令で國家が極力之を豫防する。

(F)消　毒。法規に定められたる所に從つて、嚴重に消毒するのであつて、患者の唾液、喀痰、大小便等全排泄物、衣服、接觸物、家屋等。

備考。衣類、蒲團の如きものゝ消毒は燒却する、又室內はホルムアルデヒード瓦斯で瓦斯消毒を行ふ。

第二節　其他の傳染病

丹毒の原因及び症狀　(昭和四年三月北海道廳)

(A)原　因。丹毒連鎖狀球菌。

(B)菌傳搬と菌侵入門。創傷傳染病として最も多きものである。人から人に、又は器物によつて傳染する、皮膚の損傷部は菌侵入の門戸である。

好んで顏面又は、頭部に發する事が多い。

(C)症　狀。感染した部の皮膚は限局して紅色を呈し、其紅斑內に水泡を作る。

其他高熱。脈及び、呼吸頻數となる。

備考。豫防法、切傷、刺創、表皮剝脫、サカムケ等は危險であるから充分注意して傳染原の侵入を防止せねばならぬ。

破傷風

(A)原　因。破傷風菌。

備考。此菌は土壤に棲息す。

(B)菌傳搬と菌侵入門。接觸又は器物の媒介によつて傳染する。皮膚、粘膜の損傷部から傳染する。

(C)症　狀。高熱、譫語、脈頻數、顏面筋痙攣、牙關緊急、角弓反張等。

備考一。「破傷風とは何ぞ鍼灸治療の可否如何」(昭和五年四月佐賀縣)

備考二。丹毒、破傷風、化膿菌等による化膿は創傷傳染の代表的のものである。注意を要す。

脾脫疽(炭疽熱)

(A)原　因。脾脫疽菌。

備考。本來は獸類の疾患である。本菌は牧場に散在して、よく牛、豚等に感染する。殊に本菌の芽胞は極めて外界の影響に對して抵抗の强いものである。

(B)傳搬の徑路。獸皮の使用。獸類、蟲類の刺傷、本菌を有する塵埃の吸入等。

(C)菌侵入の門戸。皮膚の創面、口腔、肺臟等。

(D)症　狀。數時乃至約七日位の潛伏期を經て後、傳染の局所に惡性膿疱(癰)を發生す。初めは小結節を作り、次に壞死性痂皮となり滲潤甚しく、疼痛比較的輕く、幸運な時には治癒するが、不幸な場合には卽日四十度位の高熱を發し、脾脫疽敗血症の爲に死す。

(E)消　毒。全排泄物。

癰腫(癰)

(A)原　因。葡萄狀球菌。

(B)菌侵入の門戸。皮膚の毛口。
(C)症　狀。眞皮、皮下結締組織の硬結、腫脹、疼痛、重症は發熱を來す事がある。
(D)好發部位。背、項、臀部。
備考。特に背部に發するものが多い。

癤腫

(A)原　因。葡萄狀球菌。
(B)菌侵入の門戸。皮膚の毛口。
(C)症　狀。局所の硬結、赤發、腫脹、疼痛が甚しい。更に惡化すれば全身の發熱を來す。
備考一。特に上脣の附近に發生するものが、危險を招來する事が多いから注意を要する。
備考二。癤腫は俗にいふ所の疔である。顏面に發生するは面疔といふは一般に知られてゐる通りである。

歐洲コレラ（霍亂）

(A)原　因。不明、又毒物の中毒からも來る。
(B)症　狀。腹痛があつて次で嘔吐、下痢を來し、便は黃色、帶褐色、又は血性なる事もある、重症の者は顏貌憔悴、脈貧數幽微、虛脫によつて卽日死する事もある。

流行性感冒（インフルエンザ）

(A)原　因。プアイフル氏が發見した極めて細小なるインフルエンザ桿菌であつて、時とするとひどく大流行を來して世人の心膽を寒からしむる事もある。
(B)症　狀。一日乃至三日の潛伏期を經て突然惡寒、戰慄、高熱、劇甚なる頭痛、腰薦部痛を發す。其他種々なる重篤の症狀を以て經過するものである。流行時と個人とによつて。無論輕重種々である。
(C)豫　後。惡化せざれば普通良。
(D)療　法。鍼。天柱、風池、大杼、風門、手三里。
灸。風池小米粒大の灸七壯、風門同九壯。
備考。豫防法、風門に小米粒大の灸十壯、一週間炷ゆ。

嗜眠性腦炎

(A)原　因。不明の恐るべき傳染病、流行病ならんといはれてゐる。
(B)誘　因。流行性感冒(インフルエンザ)が誘因となる事が多い。
(C)症　狀。嗜眠狀態は特殊である。其他、不定の發熱、劇頭痛を以つて始まり、次に上眼瞼下垂、舞踏病樣攣縮、複

視等を來す。

(D)豫　後。其三〇%は不良であるといふ。

備考。病理解剖の結果は、炎症性の病竈がジルウイス氏導水管、又は第三腦室にあると。

ワイル氏病　(出血性黄疸、又は熱性黄疸)

(A)原　因。出血性黄疸スピロヘータ。

(B)傳染の徑路。飲食物で口腔から、又は皮膚の損傷部から。

(C)症　狀。突然惡寒戰慄を反覆し、四十度前後の高熱、發病第五日目位には高度の黄疸を發す。次に皮下瀉血、衄血、吐血、等の出血傾向が著明になる。同時に頭痛、腰痛、筋痛が甚しく、第二週頃には、腦症狀を起し、昏睡又は發揚の狀態となる。

(D)消　毒。患者を隔離し、患者の全排泄物と、接觸せる器具等を嚴重に消毒する。

狂犬病　(恐水病)

(A)原　因。病原體不明。

(B)傳搬の徑路。狂犬病に罹れる犬及び、狂犬病患者の咬傷。

(C)菌進入の門戸。咬まれたる損傷部。

(D)症　狀。潛伏期は三週、八週、數十週に及ぶ。

(一)發病期。病毒は終に神經纖維を傳つて、中樞神經系に至るものである。咬創の局所は搔痒、灼熱疼痛を來す。精神障礙を蒙つて、不定、憂鬱となる。

(二)發揚期。半日乃至三日間位で咽頭筋、呼吸筋に痙攣を來す。

備考。此期には、水を見ても痙攣を起すに至るから、恐水病ともいふ。次で、呼吸困難、不正脈、チアノーゼ、高度の發熱(四十度五分乃至四十一度五分)を發する。

(三)麻痺期。痙攣期の終りに、全身麻痺が起り、終に呼吸麻痺によつて死亡する。

(E)豫防と療法。狂犬の撲殺、豫防注射。

注意。即時豫防注射を受くべきは勿論であるが、即時注射不可能の時は局所に大灸して後、豫防注射を受けたるもの經過良好である

マラリアとは何ぞ灸治の可否及び灸治點　(昭和三年三月東京府)

(A)原　因。マラリア原蟲によつて起る、固有の熱性傳染病である。

(B)傳染の徑路。患者の血液を「アノフェレス」と名づくる種類の蚊が吸ひ、他の人に傳染さすものである。

(C)症　狀。劇烈なる戰慄、四十度乃至四十一度位の高熱と脾臓の腫大とが其主症狀で、大概は四十八時間乃至七十二時間目位に、前記の症狀を反覆するものが多い。

(D)豫　後。多くは良、

但し慢性症、又は小兒に來れる重症のものなどは樂觀が出來ぬ。

備考。灸治の可否。

古來から灸治の適應症だとせられて居る、事實灸治は效果を奏するものである。

灸治點。風池、大椎、曲池、至陰(しいん)等。

註釋。本病は前記の症狀を反覆するから間歇熱ともいひ、古書では瘧(ぎやく)と記され、俗間では「オコリ」と稱してゐる。

キニーネは特效藥であるが、慢性のものには灸治を併用すれば、百發百中の良效がある。

黴毒の原因症狀區別鍼灸療法の可否

(A)原　因。ショウヂン、ホフマン氏によつて發見せられたる其菌。

卽ち纖細なる螺旋狀の「スピロヘーダ、パルリーダ」である。

(B)傳染の徑路。其患者との性交、接吻等の直接傳染と器物による間接傳染と、姙娠中母體の胎盤より傳染する胎盤傳染とである。

(C)症　狀。普通は、第一期、第二期、第三期を區別する。

第一期は。傳染後二週乃至三週の潛伏期を過ぎて後、傳染の局所(陰部)に硬結を生じ、多くは硬性下疳(カンソウ)となる。

註。第一期と第二期との移行期判明せぬ事もある。

第二期は。數ヶ月後皮膚に薔薇疹(Roseola)を發するに始つて、後乾癬樣の皮疹を發し、肛門や外陰部等に扁平(ヘンペイ)濕肉を發す。

此期は數年に及ぶものが多い。

第三期は。ゴム腫を形成し、又脊髓癆、麻痺狂等の、所謂變性黴毒を發す。

(D)豫防法。コンドームの使用、性道德の訓練、檢黴の勵行。

註。今や刑罰を內容とする豫防法律が制定せられ、其一部分が實行せられてゐる。

(E)鍼灸治療の可否。不可ではないが。サルヴァルサン、蒼鉛、沃度、水銀等の特效藥がある故醫療と協力して鍼灸治療をなすは理想的である。

備考。但し夫等の藥物療法が無效なる變性黴毒に、灸治を試むれば意外の奏效を呈する事がある。

(F)治　穴。膏肓、氣海の兪、腰眼、三陰交、陽輔。

又橫根返しの灸を施す。(此灸法は別著圖解經穴學參照)

癩　病　(レプラ)

(A)原　因。癩菌。

(B)傳搬の徑路。接觸傳染、現代では特に皮膚の小創面から傳染するものと、認めてゐる、

(C)症　狀。潛伏期は數年に及ぶ、
徐々に發病する。
斑紋癩、神經癩、混合性癩等を區別する。そして各々症狀は多少異なるが、
感覺異常、感覺麻痺、脫毛、潮紅、斑點等が現はれ、終には榮養障礙の爲に、四肢や鼻端が脫落する。
(D)豫　防　法。患者の隔離と、消毒が大切である。
(E)灸との關係。明治年間、中條氏、境田氏等は、癩に灸すると免疫性を賦與するであらふ事を思考し、昭和の今日原志免太郎博士は灸は癩治療に對して、何等かの關係があらふ事を提唱してゐる。
備考。著者の調査によればレプラ患者は草津溫泉に入湯しつゝ灸治を行なへるものが甚だ多いといふ。

水　痘（水ぼうさう）

(A)原　因。不詳、但し痘瘡とは全く別である、よく幼兒を侵す。
(B)傳　搬。接觸による場合が多い。
(C)症　狀。潛伏期は十日乃至十四日、三十八、九度の熱を發して、脊背部に赤色の皮疹を來し、其中心は澄明なる水泡となり、多くは豌豆大で(時とすると口內にも發し)速に破れて赤色又は帶白色の斑を有するが遂に痂皮を作つて、數日又は二週以內に痂皮は剝落する。瘢痕を殘さぬ。
(D)豫　後。良。

麻　疹

(A)原　因。不明、小兒は必ず經過せねばならぬ傳染病である。
(B)傳搬の徑路。主として其患者との接觸や、分泌物によつて感染するものであるが、又時とすると第三者の媒介がなくとも、又患者と接觸しなくとも(不明の徑路によつて)傳染する事がある。
生後六ヶ月以內の乳兒は感染率が少く、且つ傳染しても輕症である。
滿一歲乃至四歲以內の小兒は最も侵され易い、一度本病を經過すると終生免疫性を得るのが普通である。
(C)症　狀。潛伏期は約十日位で、
(一)前驅期は卽ち加答兒期であつて、潛伏期を經てから三、四日目位に粘膜に發疹して氣管枝加答兒等の加答兒症狀を發する。
(二)發疹期は二日乃至三日で顏面、(特に前額とか耳の下等に)頭部、頸部、軀幹、上肢、下肢、臀部の順序に發疹し、發疹は初め小さいが漸次大きくなる、そして、皮膚面から少し隆起して居る。
(三)二、三日にして後消退期に這入つて、糠の粉の樣なものが少し落屑する。但し輕症のものは暫時紅斑を殘すのみで落屑はせない。
(D)診　斷。內疹と、コプリック氏斑とを發見すれば、診斷は確定する。
內診とは口蓋粘膜の發疹で、
コプリック氏斑とは下顎の臼齒の對面の粘膜に生ずる、數個乃至數十個の小斑である。

(E)豫　後。ハシカの內攻とは、發疹一時に消退して毛細氣管枝炎や、加答兒性肺炎や、急性腎炎を起した場合で、死亡するものが多い。

又發疹期に毛細氣管枝炎、加兒答性肺炎等の合併性を來して死亡するものも相當に澤山ある。

流行の時期、年齡、等によつて豫後は一樣でない。

要するに麻疹は幼兒の爲には大敵である。

(F)治　療。發疹前期は風に當てゝはならぬ、

重症のものは可成一般醫療によるがよい。

消退期以後に於ては正規の消毒を嚴重にして、

所謂小兒鍼を特に身柱、膈、肝、膽、脾、胃、三焦、巨闕、上脘、中脘、下脘、商曲、肓兪、天柱、風池、肩中、肩外、大椎等及四肢の末梢等に輕く皮膚鍼を施す事を忘れてはならぬ。

備考。風疹や猩紅熱と鑑別せねばならぬ。

地方病と流行病との區別

同じく傳染病であるが。

(A)地方病。一部地方に限局して多數の患者を出すもの。

(B)流行病。其傳染病患者を各地方に亙つて生ずる場合である。

備考。アチラコチラに傳染病が發生する時は、これを散在性といふ。

所謂傳染病の種類

傳染病の種類は多種多樣である、

細菌の傳染によるものは皆傳染病である。

強制取締りを成すものは所謂法定十種傳染病で、

或程度の(肺結核の如く)豫防規則はあつても自由を抗制せぬものは、單行法による傳染病である。

一、法定十種傳染病。(次の項參照)。

一　單行法による傳染病。肺結核、黴毒、淋疾、軟性下疳、トラホーム等。

一、非法定傳染病。流行性感冒、百日咳、麻疹、肺炎、水痘、耳下腺炎、マラリヤ等。

又臨牀上經過によつて左の如く區別する。

一、急性傳染病。病毒の劇甚なる熱性傳染病に多い。

一、慢性傳染病。トラホーム、結核、黴毒、淋疾、癩病等である。

法定十種傳染病

定義。法定十種傳染病とは、法律によつて之を强制的に取締る、傳染率、危險率の多い急性傳染病である。

分類。此ものには十種あつて左記の通りに之を分類する。

第一類。腸チフス、パラチフス、赤痢(疫痢を含む)、コレラ。

第二類。ヂフテリア、流行性腦脊髓膜炎、猩紅熱、痘瘡、發疹チフス。

第三類。ペスト。

備考一。「急傳染性熱性病の種類及び傳染經路、(昭和六年十月長崎縣)。」

第八編　經穴學

備考一。十四經略解

注意。一、經穴學を理解するには、1十四經の名稱を記憶し、2次に經絡の大體を暗んじ、3續いて穴名暗記の歌を反覆暗誦朗吟すれば自ら暗記出來るものである。

一、經穴の治療應用は、1經絡の分佈、2ヘッド氏帶との關係、3鍼灸科理論、4生理解剖學的關係、5鍼灸診斷治療學等より一般的に考察すればよい。

一、近年迄は受驗生は經絡を知らずとも、大體試驗に合格出來たのであつたが著者が從前より唱導せし、皇漢醫學の本流は近來特に識者の注目する所となり、駒井博士經穴經絡の研究論文を以て、學位を得るに及んで、一段と識者に再檢討、再認識せらるゝに至り、經脈學の大體(概念)は受驗生と雖も、必ず知つて居らねばならぬやうになつた。

所謂十四經とは

人體を循環するは營衞(血液、淋巴の脈道、神經やホルモーンの有機的連鎖?)の脈道である。この脈道卽ち經脈は、東洋哲學の天地、陰陽說に基きたるもので。手と足とに三陰の脈(太陰、少陰、厥陰)と、三陽の脈(太陽、少陽、陽明)とがあるから、合せて十四經となる。

之に卽ち奇經八脈。(督脈、任脈、陽蹻脈、陰蹻脈、陽維脈、陰維脈、衝脈、帶脈)の中の

督脈と、任脈とを加へて、十四經といふ。

手の三陰。(肺、心、心包經)は卽ち手の三陰の脈であつて、腹から出でて手に至つて居る。

手の三陽。(大腸、小腸、三焦經)は卽ち手の三陽の經脈で、手から頭部に至るものである。

足の三陽。(膀胱、胃、膽經)は卽ち足の三陽の經脈で、頭から下つて足に至るものである。

足の三陰。(脾、腎、肝經)は卽ち足の三陰の經脈で、足より上つて腹に入るものである。

經脈循環の順序

手の太陰肺經、手の陽明大腸經、足の陽明胃經、足の太陰脾經、手の少陰心經、手の太陽小腸經、足の太陽膀胱經、足の少陰腎經、手の厥陰心包經、手の少陽三焦經、足の少陽膽經、足の厥陰肝經に終つて、又手の太陰肺經に循る。

而して常經卽ち此十二經に營衞が溢るゝ時は奇經に入るものである。

一、手の太陰肺經

手の太陰の脈は、中焦(三焦の中の中焦である)に起りて下つて大腸を絡ひ還りて胃口を循りて膈に上りて肺に屬す。

二、手の陽明大腸經

手の陽明の脈は、大指の次指(第二指卽ち示指)の端に起り、指の上廉を循りて、合谷兩骨の間に出づ、上りて兩筋の中に入る、臂(上膊)の上廉を循りて、肘の外廉に入り、臑外の前廉を循り肩に上る、髃骨の前廉を出で、柱骨の會上に

出づ、下りて缺盆に入りて肺を絡ひ、膈に下り、大腸に屬す。

其枝別なるものは缺盆より上り、頸にゆき、頰を貫き、下齒の縫中(上脣繫帶中)に入る。還りて出でゝ口を挾み、人中(鼻中隔の直下の滯)に交り、左は右に之き、右は左に之き鼻口を挾む。

三、足の陽明胃經

足の陽明の脈は鼻に起り頞中(鼻梁)に交る。太陽の脈を下つて鼻外を循り、上齒の中に入る。還つて出でて口を挾み、脣を循り、下つて承漿に交り額顱(顱頂骨の前方)に至る。其枝別なるものは、大迎の前より人迎に下り喉嚨(のど)を循り缺盆に入り、膈に下り、胃に屬し、脾を絡ふ。其直なる者は缺盆より乳の內廉に下る。下りて臍を挾み、氣衝の中に入る。其枝なる者は胃の下口に起り、腸裏を循り、下りて至りて、氣衝の中に合す。以て脾關(股關節部)を下り、伏兎に至り、膝臏中(膝蓋骨の下)に下る。下に骹骨(脛骨)の下廉を循り、足跗に下りて中趾の外間に入る。其支なる者は膝を下る事三寸、別れて以て下り、中趾の外間に入る。其支なる者は、跗上(足跗骨の上)に別れて大指の間に入り其端に出づ。

四、足の太陰脾經

足の太陰の脈は、大趾(踝趾)の端に起り、指の內側、白肉の際を循り、䯒骨(楔狀骨)の後を過り、內踝の前廉に上る。腨內(腓腸筋)に上り臂骨の後を循り、厥陰の前に交り出づ、上りて膝股の內の前廉を循り腹に入りて脾に屬し。胃を絡

ひ、膈に上つて咽を挾み舌本(舌根)に連り、舌下に散ず。其枝別なるものは復胃に從り別れて膈に上り、心中に注ぐ。

五、手の少陰心經

手の少陰の脈は、心中に起り出でて心系に關し、膈に下つて小腸を絡ふ、其支たる者は、心系從り上りて、咽を挾み目に系る、其直なる者は復心系從り、却りて肺に入り、腋下に出づ。下りて臑(肘尖)內の後廉を循り、太陰心主の後を行き、肘の內廉に下る。臂內後廉を循り、掌後兌骨の端に抵り掌の內廉に入り、小指の內を循りて其端に出づ。

六、手の太陽小腸經

手の太陽の脈は、小指の端に起り、手の外側を循り、腕に上りて髁中(長骨表面の隆起、(此所では尺骨莖狀突起)に出づ。直に下りて、臂骨の下廉を循り、上りて臑外(肩の外下方)の後廉を循り、肩解(肩髃のある手)に出づ。肩胛を循り肩上に交はる缺盆に入り、心を絡ひ、咽を循り、膈に下り、胃に抵り小腸に屬す。其支なる者は、別れて缺盆に從り、頸を循り頰に上り、目の銳眥(外眥)に至り、却つて耳中に入る。其支なるものは、頰に別れて頤(目の下)に上り、鼻に抵り目の內眥に至る。

七、足の太陽膀胱經

足の太陽の脈は、目の內眥に起り、額に上りて巔上(いたゞき)に交り、其支なる者は巔より耳の上角に至る。其直行なる

るものは、巔より入りて腦を絡ひ、還つて出でて項(後頸部)に下る。肩膊の內を循り、脊を挾み、腰中に抵り。入つて膂(脊の傍の肉)を循り、腎を絡ひ、膀胱に屬す。其支別なる者は腰中より下つて臀を貫いて、膕中(膝關節背面の橫紋)に入る。其支別なる者は膊內(肩背の肉)より左右に分れ、下りて肺(背の兩傍の肉)を貫き脊內を挾んで脾樞(股關節)を過ぐ。脾外の後廉を循り、下りて膕中に合し、以て下つて腨內を貫き、外髁の後に出でて京骨を循り、小指の外側の端に至る。

八、足の少陰腎經

足の少陰の脈は、小趾の下に起りて、斜に足心に嚮ふ。然骨の下に出でて、內髁の後を循り別れて跟中に入る。腨內に上り膕(膝膕窩)の內廉に出づ、股內の後廉に上り、脊を貫き腎に屬し、膀胱を絡ふ。其直なる者は、腎より上りて、肝、膈を貫き、肺中に入り喉嚨(喉頭氣管)を循り舌本(舌根)を挾む、其支なるものは肺より出で心を絡ひ胸中に注く。

九、手の厥陰心包經

手の厥陰の脈は、胸中に起り、出でて心包に屬し、膈に下つて三焦を歷絡す。其支なる者は胸を循りて脇に出でて、腋三寸を下り、上りて腋下に至り、下りて臑(肘の節)內を循り太陰、少陰の間を行きて肘中に入る。臂(前膊)に下りて、兩筋の間を行き、掌中に入り、中指を循りて其端に出づ、其支なる者は掌中より小指の次指を循りて其端に出づ。

十、手の少陽三焦經

手の少陽三焦の脈は、小指の次指の端に起りて次指の間に出で、手の表腕(腕の背面)を循りて、臂外兩骨の間(前膊の撓、尺骨間)に出で、下りて肘を貫く。臑外(肘の節の外)を循り、肩に上りて交り、足の少陽の後に出でて、缺盆に入り、膻中(兩乳の間)に交り散じて、心包を絡ひ、膈に下り、偏く三焦に屬す。

其枝なるものは膻中に依りて下りて、缺盆に出づ、直なるものは上りて耳の上の角に出で、以て屈して頰に下り頤(鼻背)に至る。其支なる者は、耳後より耳中に入り、却つて出で眼の銳眥(外眥)に至る。

十一、足の少陽膽經

足の少陽の脈は、目の銳眥(外眥)に起り、上りて角に抵り、耳後に下る。頸を循りて、手の少陽の前を行きて、肩上に至り、却りて少陽の後に出で、缺盆に入る。其支なる者は、耳後より耳中に入り、耳前に走り、目の銳眥の後に至る、其支なる者は目の銳眥に別れて大迎に下り、手の少陽に合して、頤(鼻梁)に抵り下つて頰車に加へ、頸に下り、缺盆に合し、胸中に下り、膈を貫き、肝を絡ひ、膽に屬す。脇裏を循り、氣衝に出で、毛際(陰毛の際)を循りて、横に髀(股の骨)厭(股關節外面の陷凹部)の中に入る。其直なる者は、缺盆より、腋に下り、胸を循り、季脇を過り下つて、髀厭(髀厭は髀樞の中)の中に合し、以て下つて、髀陽(大腿の外側)を循り、膝の外廉に出づ。外輔骨(腓骨)の前に下り、直に下つて絶骨の端に抵り、外髁の前に出で足跗を上つて循り、小指の次指(第四指)の間に入る。

十二、足の厥陰肝經

足の厥陰の脈は、大趾聚毛(一名又三毛ともいふ、趾上面毛のある所)の上に起り、足跗の上廉の內髁を去る事一寸を循る。髁に上る事八寸にして、交り太陰の後に出でて、腘の內廉に上る。股を循り陰中に入り、陰器を循り、小腹に抵りて、胃を挾み、肝に屬し、膽を絡ふ。上りて頑顙(頑は咽、顙は額)に入る。目系(目の深き處の脈)に連り、上りて額に出でて、督脈と巔に會す。其支なる者は、目系(目の深き所の脈)より頰裏に下りて、脣內に還る。其支なる者は復肝より別れて膈を貫き、上りて肺に注ぐ。

十三、督脈經

督脈は、下極の俞(尾呂骨尖端長强から始まるの意)に起り、脊裏(軀幹の背面)に竝びて上りて風府に至り、巔(腦)に入る、嶺を上り、額を循り、鼻柱に至る陽脈の海に屬す。

十四、任脈經

任脈は、中極の下に起り以て毛際(恥骨弓上緣)に上り、腹裏を循り、關元に上り、喉嚨に至る。陰脈の海に屬するなり

備考二。

奇經八脈

(一)督　脈

十四經略解六六一頁を見よ。

(二)任　脈

十四經略解六六一頁を見よ。

(三)陽蹻脈

は、跟中に起つて、外髁を循り、上行して風池に入る。

(四)陰蹻脈

は、是も跟中に起り、內髁を循りて、上行して咽喉に至り、衝脈を交り貫く脈氣の發する所は照海である。

(五)衝　脈

は、任脈と共に胞中に起り、脊裏を循つて後、其外に浮ぶ者は腹を循りて、上行して咽喉に會す、別れて脣口に絡ふ。故に曰く、衝脈は氣衝に起つて、足の少陰の經に竝び、臍を出で上行して胸中に至つて散ず、と。

(六)陽維脈

は、諸陽脈の會する所に起る、其脈氣の發する所は金門である。其督脈と會する所は、風府及び瘂門である。

(七)陰維脈

は、其脈諸陰の交はる所に起る。其脈氣の發する所は築賓である。其任脈と會する所は天突と廉泉である。

(八)帶　脈

は、季脇に起つて身を廻る。其脈氣發する所は卽ち帶脈である。

以上の奇經八脈の詳細は、

李時珍氏の本草綱目の奇經效篇と、張介賓氏の類經圖翼とを參考して併せ考へなければならぬ。

余は爰に初學者の爲にたゞその概念丈けを記したにすぎぬ。學者は上記の原著によつて研究されたい。

備考三。

一、奇經八脈には、任脈、督脈に丈け專屬の穴がある。

一、其他の六脈は十四經中の穴を歷絡するものである。

一、故に專屬せる穴のある任脈、督脈の穴所を正穴中に加へたものである。

備考四。

一、經穴とは經脈の循環する所(卽ち經絡)の要所に鍼又は灸すべき點を定めたもので、純粹の皇漢醫學である。

一、現今では本來の皇漢醫學が時代の西洋醫學と觸接して、本書第四編の如く鍼科學、灸科學として稍々面目を齊へんとしてゐる。

一、此經穴を何病に何々の穴等を應用して、鍼何分何寸、灸大小艾何壯を用ひて治療すべきかは、鍼灸科學を反覆熟讀して後更らに第七編病理學の部を精讀せられたい。

備考五。

「奇經の名稱」(昭和九年秋千葉縣)

第一章　經穴暗記の歌

解題。下記の歌を詩吟のごとく、又は好きな調子でもつけて朗吟して記憶すると穴名をよく覺へるものである。穴名を暗記すれば、自ら脈道と穴とが明かになる。

一、手の太陰肺經

雲門、中府、天府に列る。俠白、尺澤、孔最存す。列缺、經渠、大淵に涉り、魚際、少商、韮の葉の如し。

二、手の陽明大腸經

商陽、二間、三間、合谷に藏る。陽谿、偏歷、溫溜を經へ、下廉、上廉、三里長し。曲池、肘髎、五里を迎へ、臂臑、肩髃、巨骨に當る、天鼎、扶突、禾髎に接り、終りに迎香を以て二十穴。

三、足の陽明胃經

承泣、四白、巨髎經る。地倉、大迎、頰車峠つ、下關、頭維、人迎に對す。水突、氣舍、缺盆連りて、氣戶、庫房、屋翳屯す。膺窓、乳中、乳根に延び、不容、承滿、梁門起つ、關門、大乙、滑肉門、天樞、外陵、大巨に在す。水道、歸來、氣衝に次ぐ、脾關、伏兎、陰市に走り、梁丘、犢鼻、足の三里、巨虛上廉、條口の位に連り、巨虛下廉は與に豐隆に及ぶ、解谿、衝陽、陷谷の中、內庭、厲兌終穴にをはる。

四、足の太陰脾經

陰白、大都、大白に從ふ。公孫、商丘、三陰交、漏谷、地機、陰陵泉拗し、血海、箕門、衝門開く、府舍、腹結、大橫橫はる。腹哀、食竇、天谿に接し、胸鄕、周榮、大包隨ふ。

五、手の少陰心經

極泉、青靈、少海深し、靈道、通里、陰郄迷ふ。神門の少府。少衝を尋ねて九穴に終る。

六、手の太陽小腸經

少澤、前谷、後谿合す。腕骨、陽谷、養老すべし。支正、小海、肩貞を伴ふ。臑俞、天宗、秉風、曲垣、肩外俞、肩中の俞、天窗、天容、顴髎に上り聽宮を拜す。

七、足の太陽膀胱經

睛明、攢竹、曲差に參る、五處、承光、通天に上り、絡却、玉枕、天柱嶄し、大杼、風門、肺俞に引く、厥陰俞、心俞、膈の俞、上下を隔つ、肝の俞、膽の俞、脾の俞に續く、胃の俞、三焦俞、腎の俞中る、大腸俞、小腸俞、膀胱の俞、中膂內俞、白環俞に輸す、大杼より白環に至るは脊中を挾む事三寸、上髎、次髎、中髎、復下髎、會陽、承扶、殷門につぐ、浮郄、委陽、委中の間、腨內脊を挾んで附分當る、太陽背を行く第三行、魄戶、膏肓、神堂と譴講、膈關を隔つ、

魂門、陽綱、意舍、胃倉に乃る。育門、志室、胞の育、二十椎の下に秩邊あり。委中以下合陽之也、承筋、承山に下る飛陽、附陽、崑崙に泊り、僕參、申脈、金門に連り、京骨、束骨、通谷、小趾外側、至陰に至つて六十三穴をはる。

八、足の少陰腎經

湧泉、然谷、大鐘溢る。大鐘、照海、水泉に沈み、復溜、交信、築賓に至る。陰谷、横骨、大赫明かなり、氣穴、四滿中注に注ぐ、育俞、商曲、石關の關、陰都、通穀、幽門を開く、步廊、神封、靈墟の位、神藏、或中、俞府、少陰腎經了る。

九、手の厥陰心包經

天池、天泉、曲澤深し、郄門の間使、內關に對す。大陵、勞宮、中衝に至る。

十、手の少陽三焦經

關衝、腋門、中渚の傍ら、陽池、外關、支溝會す、會宗、三陽絡、四瀆、天井に合して清冷淵に去る。消濼、膈會、肩髎、偏に天髎、天牖、翳風、瘈脈續く、顱息、角孫、耳門をくぐり、和髎を經て絲竹空に昇るは手の少陽三焦の經。

十一、足の少陽膽經

瞳子髎行く事超々聽會、客主人、頷厭集る。懸顱、懸釐、曲鬢嶄し、率谷、天衝、浮白つぐ、竅陰、完骨、本神の社、

陽白、臨泣、目窓の窓、正營、承靈、腦空と、風池　肩井、淵腋は長し、輒筋、日月、京門立つ、帶脈、五樞、維道の道、居髎、環跳、中瀆に至る、陽關、陽陵泉又陽交、外丘、光明、陽輔の舖、懸鐘と接し丘墟、臨泣に泣いて地五會の夾谿は竅陰となる。

十二、足の厥陰肝經

大敦、行間、大衝を衝く、中封、蠡溝、中都の都、膝關、曲泉、陰包を包む、五里、陰廉は章門と期門を開いて厥陰肝經了る。

十三、督脈經

長强に初り腰俞、陽關、命門にめぐる。懸樞、脊中、筋縮にいたり、至陽、靈臺、神道つぐ、身柱、陶道、大椎の俞、瘂門、風府、腦戸に連り、强間、後頂、百會の前、前頂、齦會、上星まろし、神庭、素髎、水溝の裏、兌端、龈交こゝに止む。

十四、任脈の經

會陰に起り曲骨、中極、關元を經て、石門、氣海、陰交交る。神闕、水分、下脘、建里にめぐり、中脘、上脘、巨闕したがふ、鳩尾、中庭、膻中に上る、玉堂、紫宮、華蓋、璇璣ひらめき、天突、廉泉を經て、承漿をうく。

凡例

⊗の符號は……文部省撰定新孔穴
□の符號は……禁　灸　穴
△の符號は……禁　鍼　穴
□△の符號は……禁　鍼　禁　灸　穴

身體各部位順による經穴

腦頭蓋之部

△⊗神庭。鼻根直上、前頭部髮際。前頭筋、前頭動、靜脈、前頭神經、顏面神經、三叉神經分枝。

上星。神庭の後一寸、筋、神經、動脈同前。

△⊗顖會。前髮際を入る事二寸、帽狀腱膜中、淺顳顬動脈前枝、上眼窠神經、同名動脈、前頭神經

前頂。前髮際を入る事三寸五分、其他同前。

⊗百會。前髮際を入る事五寸、頭部頂上、左右耳角の結合線と矢狀縫合との交叉部、帽狀腱膜中、後頭動脈、大後頭神經、上眼窠動脈、上眼窠神經。

⊗後頂。百會の後一寸五分、帽狀腱膜中、後頭動脈、大後頭神經。

強間。後頂の後一寸五分、後頭三角縫合部の下、其他同前。

△□⊗腦戸。強間の後一寸五分、後頭骨外後頭結節の上の陷中、其他同前。

□風府。外後頭結節の下方陷凹中、痙門の上五分、僧帽筋腱間、其他同前。

□⊗欠盆竹。眉の內端より一分眉中に入る、眼輪匝筋中、前頭動脈、前頭神經。

⊗曲差。內背直上髮際、神庭の傍一寸五分、前頭筋、前頭動脈、前頭神經。

五處。曲差の上方、髮際を入る事一寸、帽狀腱膜中、前頭動脈、前頭神經、淺顳顬動脈前枝、顏面神經顳顬枝。

□⊗承光。五處の後方一寸五分、其他同前。

⊗通天。承光の後一寸五分顳顬動脈、後頭動脈、顏面神經顳顬枝、大後頭神經。

△絡却。通天の後一寸五分、顖頂骨と後頭骨との縫合部、後頭筋停止部、後頭動脈、大後頭神經。

△玉枕。絡却の後一寸五分後頭髮際を入ること三寸、後頭骨上項線の中央陷凹部、頭夾板筋停止部、動脈、神經同前。

⊗陽白。眉上約五分、正座して瞳の直上一寸に挨る。前頭筋、上眼窠動脈、上眼窠神經。

□⊗臨泣。前髮際を入る事五分、陽白の直上、三叉神經第一枝上眼窠神經、上眼窠動脈、顏面神經。

目窻。臨泣の上一寸、帽狀腱膜中、前頭動脈、前頭神經、淺顳顬動脈前枝、上眼窠神經。

⊗正營。目窻の上一寸、其他同前。

△⊗承靈。顱頂結節の上部、正營の後一寸五分、帽狀腱膜中、後頭動脈、大後頭神經。

⊗腦空。承靈の後一寸五分、外後頭結節の外下側、卽ち顱頂結節の後下側、其他同前。

項部

□⊗瘂門。風府の下五分、後髮際を入る陷凹せる中、僧帽筋腱間、後頭動脈、大後頭神經。

□⊗天柱。瘂門の兩傍、僧帽筋附着部の外緣、頭長筋、頭夾板筋、動脈、神經同前。

⊗風池。腦空の直下の陷凹部、頭夾板筋中、後頭動、靜脈、大、小後頭神經、後頭下神經。

完骨。乳嘴突起尖端の後方陷中、胸鎖乳嘴筋停止部、耳後動脈、耳後神經。

顳顬部附近

□⊗絲竹空。眉弓の外端より眉毛に入る事一分、前頭筋、眼輪匝筋、淺顳顬動脈前枝、顳顬神經。

本神。絲竹空の直上髮際を入る事三分。前頭筋、淺顳顬動脈前枝、上眼窠動脈、三叉神經分枝。

瞳子髎。外眥を外へ去る事五分、眼輪匝筋、顴骨眼窠動脈、顏面神經の眼輪匝筋枝。

□⊗頭維。上關の直上、髮際を入る事四分、前頭筋部、淺顳顬動脈の前枝、顏面神經顳顬枝、三叉神經の顳顬神經。

頷厭。額角、米嚼の上、懸顱の上一寸、顳顬筋前緣中、淺顳顬動脈、神經同前。

懸顱。頷厭の直下一寸、米嚼の正中、筋、動脈、神經同前。

懸釐。懸顱の直下一寸、米嚼の下緣、其他同前。

⊗曲鬢。耳の上の髮際、口を開けば空ある中、其他同前。

⊗率谷。耳上髮際の上一寸五分を前に行く事三分、顳顬筋、淺顳顬動脈の後枝、顏面神經顳顬枝。

天衝。耳上髮際の上二寸を後に六分、顳顬筋、耳後動脈、顳顬神經。

浮白。天衝の下一寸、耳後髮際を入る事一寸、乳嘴突起上部の後、耳後動脈、耳後神經。

⊗竅陰。耳後髮際を入る事六分、浮白と完骨との中央、乳嘴突起の後上部、後頭筋停止部、後頭動脈、大後頭神經

顏面部

△⊗客主人。一名上關、顴骨弓起根部の直上、耳前筋、橫顏面動脈の分枝、顏面神經終枝、下眼窠神經分枝。

和髎。耳門の前上方、鋭髮の後、動脈手に應ず、耳前筋、淺顳顬動脈、耳顳顬神經。

耳門。耳前小辨の中央缺けたる中、耳前筋、耳前動脈、耳顳顬神經。

△角孫。耳角の當る所、口を開いて壓へると凹む所、顳顬筋、淺顳顬動脈後枝、顳顬神經。

△顱息。一名顱息、耳翼根の上後部陷中、耳後筋、耳後動脈、耳後神經。

痕脈。耳翼後部にて耳の孔と相對する部の骨陷中、其他同前。

□素髎。鼻の尖端陷かなる中、鼻壓縮筋間、鼻背動脈、外鼻神經、顏面神經分枝。

⊗水溝。一名人中、鼻中隔下端と上脣との中央より少し鼻孔の方に寄せてとる。口輪匝筋中、上脣動脈、三叉神經、顏面神經の分枝。

兌端。水溝の下、外皮と上脣脣紅部との中間、筋、神經、動脈同前。

齦交。上脣繫帶の正中、口輪匝筋、口冠狀動脈、齒齦神經。

承漿。頤脣溝中央の陷凹中、方形頤筋、下脣動脈、下顎皮下神經、頤神經。

□睛明。內眥を去る事一分の陷中、內眼瞼靱帶部、內眥動脈、滑車上神經、顏面神經終枝。

□⊗迎香。鼻孔の傍五分、鼻翼下掣筋、上脣動脈、下眼窠神經分枝、顏面神經分枝。

□禾髎。鼻孔の直下人中の兩傍五分、方形上脣筋、鼻翼下掣筋、上脣動脈、顏面神經分枝。

△承泣。瞳子の直下五分、眼輪匝筋、下眼窠動脈、下眼窠神經、顏面神經、眼輪匝筋枝。

⊗四白。承泣の下五分、頰筋、下眼窠動脈、下眼窠神經、顏面神經頰筋枝。

⊗巨髎。鼻孔の傍八分、方形上脣筋、橫顏面動脈、三叉神經第二枝の分枝、顏面神經分枝。

⊗地倉。口角の外側四分、口輪匝筋、上、下脣動脈、三叉神經末枝、顏面神經末枝。

□⊗顴髎。顴骨最高部の直下、大顴骨筋、笑筋、橫顏面動脈、下眼窠神經、顏面神經末枝。

□⊗下關。上關の直下、顴骨弓の下、咬筋、外翼狀筋、橫顏面動脈、三叉神經分枝、顏面神經顴骨枝。

⊗大迎。下顎隅角の前一寸三分、咬筋附着の前緣、外顎動脈、下顎皮下神經、三叉神經分枝。

聽宮。耳前面中央の少し下、聽會の上方、耳前動脈、顏面神經、三叉神經の終枝。

⊗聽會。耳前の陷中、上關の下一寸、口を開けば空ある中、耳前動脈、淺顳顬動脈、顏面神經分枝。三叉神經終枝。

⊗頰車。下顎隅角の少し前上方、咬筋の後緣、外顎動脈分枝、下顎皮下神經、三叉神經終枝。

頸部

廉泉。頤下に於て結喉の中央の上、濶頸筋、上甲狀腺動脈、上下頸皮下神經。

⊗天突。結喉の下四寸、胸骨頸截痕、左右胸鎖乳嘴筋間、濶頸筋下緣、下甲狀腺動脈、下頸皮下神經。

□人迎。結喉の兩傍一寸五分、頸動脈搏動部卽上頸三角部、胸鎖乳嘴筋の前緣、濶頸筋中、總頸動脈、下頸皮下神經、舌下神經、迷走神經。

水突。人迎の直下、人迎と氣舍との中央、濶頸筋中、下甲狀腺動脈、下頸皮下神經。

氣舍。天突の外方の陷中胸鎖關節上端、鎖骨上窩の內方、胸鎖乳嘴筋の二頭間、下甲狀腺動脈の分枝、下頸皮下神經、鎖骨下神經。

扶突。結喉の外方三寸、人迎の後方一寸五分、胸鎖乳嘴筋、胸鎖乳嘴筋動脈、同名神經、頸神經叢の分枝。

⊗天鼎。扶突の下一寸、鎖骨上窩の上方、胸鎖乳嘴筋の後緣、横肩胛動脈、下頸皮下神經。

天容。天窻の上一寸、耳下腺部の直下、下顎隅の後、胸鎖乳嘴筋停止部の前下方、後頭動脈、大耳神經。

⊗翳風。耳下腺部、耳翼根の後下部、耳後動脈、後頭動脈、顏面神經、大耳神經。

△缺盆。鎖骨上窩の中央陷中、肺尖部、前、中斜角筋、濶頸筋、鎖骨下動脈、下頸皮下神經、鎖骨上神經、膊神經叢。

天窻。天容の直下、人迎の併行部、胸鎖乳嘴筋中、胸鎖乳嘴筋動脈、胸鎖乳嘴筋神經、上、下頸皮下神經。

□天牖。乳嘴突起の下部、天柱と天容との中間、頭夾板筋、後頭動脈分枝、小後頭神經、頸椎神經分枝。

胸部

璇璣。天突の下一寸、胸骨劍柄の中央、左右大胸筋の間、內乳動脈分枝、肋間神經前穿行枝。

華蓋。璇璣の下一寸、ルイズ角の正中、其他同前。

紫宮。華蓋の下一寸六分、左右大胸筋の間、其他同前。

玉堂。紫宮の下一寸六分、其他同前。

△膻中。玉堂の下一寸六分、兩乳の中央、其他同前。

中庭。膻中の下一寸六分、其他同前。

⊗兪府。鎖骨の直下、璇璣を去る事二寸、鎖骨下筋、大胸筋、鎖骨下神經、鎖骨下動、靜脈、前胸廓神經、肋間神經。(注意。第一肋間で第一肋骨の直下によせて兪府をとり、第二肋骨の直上に或中をとる)

⊗或中。第一肋骨の下、神藏の上一寸六分、大胸筋、內、外肋間筋、前肋間動脈、前胸廓神經、肋間神經。

⊗神藏。或中の下一寸六分、第二、三肋骨間、其他同前。

⊗靈墟。第三、四肋骨間、神封の上一寸六分、大小胸筋、前肋間動脈、肋間神經、前胸廓神經。

⊗神封。第四、五肋骨間、膻中を去る事二寸、其他同前。

⊗步廊。第五肋間、神封の下一寸六分、直腹筋起始部、內、外肋間筋、肋間動脈、內乳動脈、肋間神經、前胸廓神經。

⊗氣戶。鎖骨の直下、正中線を左右に去る事各四寸の所、大胸筋、內外肋間筋、肋間動脈、其他同前。

⊗庫房。氣戶の下一寸六分、第一肋間、其他同前。(注意。第一肋間で第一肋骨の直下によせて氣戶をとり第二肋骨の直上に庫房とる)

⊗屋翳。庫房の下一寸六分、第二肋間、大小胸筋、前胸廓神經、肋間神經、內乳動脈分枝。

⊗膺窓。屋翳の下一寸六分、第三肋間、其他同前。

△□乳中。乳頭の正中、其他同前。

⊗乳根。第五肋間、乳中の下一寸六分、他は同前。

△雲門。璇璣の兩傍六寸肩胛骨烏啄突起の下部、大胸三角筋窩の外端、腋窩動脈分枝、長胸神經、肋間神經。

⊗中府。雲門の下一寸、前胸壁上外端、大小胸筋、腋窩動脈分枝、肋間神經側穿行枝、長胸神經分枝。

周榮。第二肋間、中府の下一寸六分、小胸筋、內外肋間筋、前大鋸筋、長胸動脈、長胸神經、肋間神經側穿行枝。

胸鄉。第三肋間、周榮の下一寸六分、正中線を去る事六寸、內外肋間筋、前大鋸筋、其他動脈、神經同前。

天谿。第四肋間、中府の下四寸八分、其他同前。

食竇。第五肋間、天谿の下、其他同前。

天池。乳中と天谿との間、第四肋間、大胸筋、前大鋸筋、肋間筋、肋間動脈、長胸動脈、肋間神經側穿行枝

輙筋。極泉の下三寸、第四肋間、前大鋸筋、內外肋間筋、動脈神經同前。

極泉。腋窩橫紋の前端より約五分腋窩に入る。大胸筋外側と腋窩線との交叉點、腋窩動脈、肩峰動脈分枝、長胸神經、第一肋間神經分枝。

□淵腋。輙筋の後方、側胸部第四肋間、前大鋸筋、肋間筋、長胸動脈肋間動脈、長胸神經、肋間神經側穿行枝

大包。淵腋の下三寸、側胸部第六肋間、其他同前。(注意、長胸神經は一名側胸廓神經である)。

腹部

△⊗鳩尾。胸骨劍尖の下五分、白條起始部、上腹壁動脈。肋間神經前穿行枝。

⊗巨闕。臍の上六寸白條線中其他同前。

⊗上脘。臍の上五寸、胃部其他同前。

⊗中脘。臍の上四寸、深部は橫行結腸部、其他同前。

⊗建里。臍の上三寸、劍尖の下五寸、白條線中、動脈神經同前。

⊗下脘。臍の上二寸、其他同前。

△水分。臍の上一寸、中腹部、其他同前。

△神闕。臍の正中、上、下腹壁動脈、肋間神經前穿行枝。

陰交。臍の下一寸、白條線中、下腹壁動脈、腸骨下腹神經、小腸部。

氣海。臍の下一寸五分、其他同前。

□石門。臍の下二寸、其他同前。

⊗關元。臍の下三寸、其他同前(注意。氣海、石門、關元の三穴は何れも一名を丹田(たんでん)といふ)。

中極。臍下四寸、恥骨軟骨接合上際の上、白條線中、下腹壁動脈、腸骨下腹神經、腸骨鼠蹊神經。

曲骨。中極の下一寸、白條停止部、三稜腹筋中、下腹壁動脈、腸骨下腹神經、腸骨鼠蹊神經。

△會陰。會陰部の中央、淺、深會陰筋、外痔動脈、會陰動脈、會陰神經。

⊗幽門。臍の傍五分の處を上る事六寸、巨闕の兩傍五分、直腹筋、上腹壁動脈、肋間神經前穿行枝。

⊗通穀。上脘の兩傍五分、幽門の下一寸、其他同前。

⊗陰都。中脘の兩傍五分、通穀の下一寸、其他同前。
⊗石關。建里の兩傍五分、陰都の下一寸、其他同前。
⊗商曲。臍の傍五分の處を上る事二寸、同前。
⊗肓兪。臍の兩傍五分、直腹筋、上、下腹壁動脈、肋間神經前穿行枝。
中注。肓兪の下一寸、直腹筋、下腹壁動脈、神經同前。
⊗四滿。肓兪の下二寸、石門の兩傍五分、直腹筋、下腹壁動脈、腸骨下腹神經。
氣穴。肓兪の下三寸、關元の兩傍五分、直腹筋、其他同前。
⊗大赫。肓兪の下四寸、中極の兩傍五分、直腹筋下端、下腹壁動脈、腸骨鼠蹊神經。
△横骨。肓兪の下五寸、曲骨の兩傍五分、其他同前。
⊗不容。第八肋軟骨の下際、白條線の兩傍二寸、天樞の直上六寸、直腹筋外緣、上腹壁動脈、肋間神經前穿行枝。
⊗承滿。不容の下一寸、上脘の兩傍二寸、其他同前。
⊗梁門。不容の下二寸、中脘の兩傍二寸、其他同前。
⊗關門。不容の下三寸、建里の兩傍二寸、其他同前。
⊗大乙。不容の下四寸、下脘の兩傍二寸、其他同前。

滑肉門。不容の下五寸、水分の兩傍二寸、其他同前。
⊗天樞。臍の正中神闕を去る事二寸、其他同前、但し動脈は上、下腹壁動脈吻合部。
⊗外陵。天樞の下一寸、直腹筋外緣、下腹壁動脈、肋間神經前穿行枝、腸骨下腹神經。
大巨。天樞の下二寸、石門の兩傍二寸、其他同前。
⊗水道。天樞の下三寸、關元の兩傍二寸、其他同前。
歸來。天樞の下四寸、中極の兩傍二寸、直腹筋、下腹壁動脈、腸骨下腹神經、腸骨鼠蹊神經。
△氣衝。歸來の外下方一寸、股動脈部、ブーパルト氏靱帶中央の上、直腹筋停止部の外方、淺廻旋腸骨動脈、腸骨鼠蹊神經。
期門。承滿の傍一寸五分、乳頭の直下、骨のはづれにとる。肋間神經、肋間動脈、上腹壁動脈、横腹筋、內外斜腹筋。
日月。第九肋骨尖端の下方、期門の直下五分、內外斜腹筋、横腹筋、肋間動脈、肋間神經側穿行枝。
⊗腹哀。中脘の傍各四寸、內、外斜腹筋、横腹筋、上腹壁動脈、肋間神經側穿行枝。
⊗大横。臍を兩傍に去る事四寸、筋は同前、淺腹壁動脈分枝、下腹壁動脈、腰動脈、腸骨下腹神經。
⊗腹結。大横の下一寸三分、其他同前。
府舍。大横を下る事四寸三分、恥骨地平枝の上部、內斜腹筋中、淺腹壁動脈分枝、腸骨下腹神經、腸骨鼠蹊神經

⊗衝門。大横を下る事五寸、府舍の下一寸、內、外斜腹筋の腱部、下腹壁動脈分枝、腸骨鼠蹊神經。
章門。第十一肋軟骨尖端、內、外斜腹筋、横腹筋、肋間動脈分枝、肋間神經側穿行枝。
京門。第十二肋軟骨の尖端、內、外斜腹筋、横腹筋、濶背筋、後肋間動脈、肋間神經側穿行枝。
帶脈。第十一肋軟骨尖端の下一寸八分、其他同前。
⊗五樞。帶脈の下三寸、腸骨前上棘の上部、內、外斜腹筋、横腹筋、廻旋腸骨動脈、腰動脈、腸骨下腹神經。
維道。五樞の下五分、筋、神經は同前、動脈は腰動脈分枝。
⊗居髎。維道の下を斜に內方に三寸、其他同前。

肩背の部

△肩井。鎖骨と肩胛棘との中間、僧帽筋前緣、棘上筋、横肩胛動脈、副神經、肩胛上神經。
天髎。肩井の後下方一寸、肩胛棘の稍々中央の前上緣、其他同前。
⊗曲垣。天髎の後方一寸、肩胛棘の中央、棘上窩、僧帽筋、棘上筋、横肩胛動脈、副神經、肩胛上神經。
⊗肩外。第一胸椎棘狀突起の外方三寸、僧帽筋、菱形筋、後上鋸筋、横頸動脈、副神經、後胸廓神經、背椎神經後枝。
肩中。第七頸椎棘狀突起外方二寸、其他同前。
臑兪。腋窩横紋後端の上方、肩峰突起の後下際、肩貞と乘風との稍々中央、棘下筋、僧帽筋、肩胛動脈、肩胛下神經

天宗。臑兪より二寸內下方、其他同前。
乘風。肩胛棘外端の下內隅、天宗から約二寸の上方で曲垣の外方、其他同前。
巨骨。鎖骨外端の後部陷中、雲門の後上方、三角筋、肩峰動脈分枝、肩胛上神經。
⊗肩髃。肩峰突起と鎖骨の關節部、三角筋、前廻旋上膊動脈、腋窩神經、肩胛上神經。
肩髎。肩峰突起の後下部、肩髃と臑兪との中間、大圓筋の上外端、三角筋起始部、後廻旋上膊動脈、腋窩神經、肩胛上神經。
□⊗肩貞。肩髎の後上部、肩峰突起と上膊骨との關節部の後面、三角筋、小圓筋、棘下筋、後廻旋上膊動脈、肩胛下神經、腋窩神經。
⊗大椎。第一胸椎の上、第七頸椎と第一胸椎棘狀突起の間、僧帽筋間、棘筋中、横頸動脈分枝、背椎神經後枝
陶道。第一、二胸椎棘狀突起間、其他同前。
⊗身柱。第三、四胸椎棘狀突起間、僧帽筋間、棘筋中、後肋間動脈の背枝、背椎神經後枝。
△神道。第五、六胸椎棘狀突起間、其他同前。
△靈臺。第六、七胸椎棘狀突起間、僧帽筋間、棘筋中、後肋間動脈の分枝、横頸動脈の下行枝、背椎神經後枝
肩胛下神經分枝。
至陽。第七、八胸椎棘狀突起間、左右僧帽筋間、棘筋中、背椎神經後枝。

筋縮。第九、十胸椎棘狀突起間、其他同前。

中樞。第十、十一胸椎棘狀突起間、左右薦骨脊柱筋間、濶背筋の間、棘筋、胸椎神經後枝、後肋間動脈背枝。

□脊中。第十一、十二胸椎棘狀突起間、其他同前。

⊗大杼。第一、二胸椎橫突起間、脊椎を去る事左右に各一寸五分、僧帽筋、菱形筋、後上鋸筋、肩胛背動脈、副神經、後胸廓神經、脊椎神經後枝。

風門。第二、三胸椎橫突起間、脊椎を去る事各一寸五分、其他同前。

⊗肺俞。第三、四胸椎橫突起間、脊椎を去る事各一寸五分、其他同前。

厥陰俞。第四、五胸椎橫突起間、脊椎を去る事各一寸五分、其他同前。

□⊗心俞。第五、六胸椎橫突起間、脊椎を左右に去る事各一寸五分、僧帽筋、後上鋸筋、橫頸動脈下行枝、副神經、後胸廓神經、脊椎神經後枝。

⊗膈俞。第七、八胸椎橫突起間、僧帽筋、後下鋸筋、後肋間動脈背枝、副神經、後胸廓神經、背椎神經後枝。

⊗肝俞。第九、十胸椎橫突起間、脊椎を去る事各一寸五分、薦骨脊柱筋、濶背筋、後下鋸筋、後肋間動脈背枝背椎神經後枝。

膽俞。第十、十一胸椎橫突起間、其他同前。

脾俞。第十一、第十二胸椎橫突起間、其他同前。

⊗胃俞。第十二胸椎と第一腰椎の橫突起間、同前。

附分。第二、三胸椎橫突起間の外方、脊柱を去る事各三寸、僧帽筋、菱形筋、後上鋸筋、肩胛動脈、橫頸動脈、副神經、後胸廓神經、肋間神經、背椎神經後枝。

魄戶。第三、四胸椎橫突起間の外方、其他同前。

膏肓。第四、五胸椎橫突起間外方、其他同前。

神堂。第五、六胸椎橫突起間外方、兩傍三寸、僧帽筋、後下鋸筋、橫頸動脈下行枝、後肋間動脈、副神經、肩胛背神經、肋間神經。

譩譆。第六、七胸椎橫突起間外方、濶背筋、後下鋸筋、其他同前。

膈關。第七、八胸椎橫突起間外方、其他同前。

魂門。第九、十胸椎橫突起間外方、濶背筋、後下鋸筋、後肋間動脈、肋間神經、背椎神經後枝。

陽綱。第十、十一胸椎橫突起間外方、其他同前。

意舍。第十一、十二胸椎橫突起間外方、脊柱の左右各三寸、其他同前。

胃倉。第十二胸椎と第一腰椎橫突起間外方、其他同前。

腰椎之部

懸樞。第一、二腰椎棘狀突起間、腰背筋膜、左右薦骨脊柱筋間、腰動脈背枝、腰椎神經後枝。

⊗命門。第二腰椎の下、第二、三腰椎棘狀突起間、腰背筋膜、左右薦骨脊柱筋間、棘筋中、腰動脈背枝、腰椎神經後枝。

陽關。第四、五腰椎棘狀突起間、其他同前。

腰兪。第四、五薦骨椎の癒着部、腰背筋膜、下臀動脈、薦骨神經後枝。

⊗長强。尾呂骨尖端の下、外肛門括約筋起始部、大臀筋、下痔動脈、尾呂骨神經、會陰神經。

三焦兪。第一、二腰椎横突起間、脊柱を左右に去る事各一寸五分、濶背筋、薦骨脊柱筋、腸腰筋、腰動脈背枝腰椎神經後枝。

⊗腎兪。第二、三腰椎横突起間、腰椎の兩傍一寸五分、其他同前。

⊗大腸兪。第四、五腰椎横突起間、其他同前。

小腸兪。第一、二薦骨假棘狀突起間の外方、兩傍一寸五分、腰背筋膜、大、中臀筋、上臀動脈、上臀神經、上臀皮下神經、薦骨神經後枝。

膀胱兪。第二、三薦骨假棘狀突起間の外方、兩傍一寸五分、腰背筋膜、側薦骨動脈、薦骨神經後枝、上臀皮下神經。

中膂內兪。第三、四薦骨假棘狀突起間、大、中臀筋、上臀動脈、上臀神經、薦骨神經後枝。

□⊗白環兪。第四薦骨椎の下、薦骨管裂孔の兩傍一寸五分、大臀筋、梨子狀筋、下臀動脈、下臀神經、薦骨神經後枝。

肓門。第一、二腰椎横突起間の外方、脊柱の兩傍三寸、濶背筋、薦骨脊柱筋、腰動脈背枝、腰椎神經後枝。

志室。第二、三腰椎横突起外端の間、脊柱の兩傍三寸、腰背筋膜、神經、動脈同前。

胞肓。第二、三薦骨椎の間、兩傍三寸、大、中臀筋、上臀動脈、下臀神經、薦骨神經後枝、坐骨神經分枝。

秩邊。第三、四薦骨假横突起外端の間、其他同前。

⊗上髎。第一後薦骨孔部、腰背筋膜、側薦骨動脈、薦骨神經後枝。

⊗次髎。第二後薦骨孔部、其他同前。

⊗中髎。第三後薦骨孔部、其他同前。

⊗下髎。第四後薦骨孔部、其他同前。

會陽。尾呂骨尖端を兩傍に去る事約五分、大臀筋起始部、下痔動脈、會陰神經、薦骨神經後枝。

⊗環跳。大腿關節の外側、鼠蹊部横紋の外端、股鞘張筋、大、中臀筋前緣、股動脈分枝、下臀神經、上臀皮下神經。

上膊之部

臂臑。上膊の前外側、曲池の上七寸、三角筋停止部、後廻旋上膊動脈、撓骨神經、外膊皮下神經。

△五里。曲池の上三寸、上膊の外側、二頭膊筋外筋溝、三頭膊筋外緣、撓骨副側動脈、外膊皮下神經。

肘髎。曲池の後上方一寸五分、膊撓骨筋起始部の上、三頭膊筋腱の外側、返廻撓骨動脈、頭靜脈、外膊皮下神經。

天泉。腋窩横紋前端から曲澤を的に二寸の下方、二頭膊筋內筋溝中、上膊動脈、正中、尺骨神經、腋窩神經外膊皮下神經。

△青靈。肘横紋内端の上三寸、二頭膊筋内筋溝、上膊動脈、正中神經、尺骨神經。

□天府。腋窩横紋の前端より拇指側に下る事三寸、二頭膊筋、烏啄膊筋、上膊動脈、筋皮神經(外膊皮下神經)

☒俠白。天府の下一寸、上膊骨前内側の中央、二頭膊筋内筋溝、上膊動脈、正中神經、外膊皮下神經。

顳會。肩髎より天井を的に三寸の處、三角筋と三頭膊筋との間、後廻旋上膊動脈、後膊皮下神經、撓骨神經。

☒消濼。上膊後面、三角筋停止部の下約一寸、螺旋狀溝部、三頭膊筋、後廻旋上膊動脈、後膊皮下神經、撓骨神經。

☒清冷淵。消濼の下二寸、鶯嘴突起尖端の上方、三頭膊筋中、下尺骨側副動脈、後膊皮下神經、撓骨神經。

☒天井。尺骨鶯嘴突起の上一寸、小肘筋、三頭膊筋中、肘關節動脈網、後膊皮下神經、撓骨神經筋枝。

肘關節之部

☒曲池。肘窩横紋の外端、膊撓骨筋起始部、返廻撓骨動脈、外膊皮下神經、撓骨神經。

☒尺澤。肘窩横紋の稍々尺側、動脈を感ずる部、二頭膊筋腱の小指側、肘關節動脈網、正中神經、外膊皮下神經。

曲澤。肘窩横紋で尺澤と小海との中間、二頭膊筋腱の下端、内膊筋内側、深屈指筋、上膊動脈、尺骨神經分枝、正中神經。

少海。肘窩横紋内端、卽ち小指側、内膊筋停止部、返廻尺骨動脈、尺骨神經、内膊皮下神經。

小海。尺骨鶯嘴突起の尖端を小指側に去る事五分陷中、卽ち尺骨神經溝、内尺骨筋起始部、下尺側副動脈、

尺骨神經。

前膊之部

孔最。尺澤より拇指に向つて下る事三寸、膊撓骨筋内側、長屈拇筋、廻前圓筋停止部、撓骨動脈、撓骨神經。

□經渠。撓骨莖狀突起内側、腕横紋の上一寸、廻前方筋、撓骨動脈、撓骨神經。

郄門。前膊前面の正中、腕横紋の上五寸、長屈拇筋と淺屈指筋の間、前骨間動脈、正中神經、前骨間神經。

間使。掌側腕横紋の上三寸、其他同前。

内關。掌側腕横紋の上二寸、間使の下一寸、其他同前。

靈道。掌側腕横紋の小指側の上一寸五分、内尺骨筋腱の撓骨側、廻前方筋中、尺骨動脈、尺骨神經。

通里。掌側腕横紋の上一寸、神門の上一寸、其他同前。

陰郄。掌側腕横紋の上五分、其他同前。

☒三里。曲池の下方二寸、膊撓骨筋と長外撓骨筋の間、廻前筋、撓骨動脈分枝、撓骨神經、外膊皮下神經。

上廉。三里の下一寸、膊撓骨筋と長外撓骨筋の間、撓骨神經、外膊皮下神經、撓骨動脈分枝。

下廉。三里の下二寸、其他同前。

溫溜。腕後五寸、其他同前。

偏歷。腕橫紋の上方二寸、其他同前。

⊗四瀆。前膊後面の正中、腕後五寸、總指伸筋と固有小指伸筋との間、骨間動脈、撓骨神經後枝。

△三陽絡。腕後四寸、尺骨莖狀突起の直上、總指伸筋と外尺骨筋との間、後骨間動脈、撓骨神經後枝、後下膊皮下神經。

會宗。支溝より撓骨側に一寸、(會宗は拇指側、支溝は小指側)、總指伸筋、後骨間動脈、撓骨神經分枝、外膊皮下神經。

⊗支溝。腕後三寸、三陽絡の下一寸、總指伸筋、後骨間動脈、撓骨神經、外膊皮下神經。

外關。腕後二寸、長外撓骨筋、後骨間動脈、撓骨神經、後下膊皮下神經。

支正。腕後五寸、尺骨後內側中央部、外尺骨筋、前骨間動脈、尺骨動脈分枝、尺骨神經。

養老。腕後一寸、尺骨莖狀突起直上、外尺骨筋腱、腕骨背側動脈、尺骨動脈分枝、尺骨神經。

列缺。腕橫紋の外側、上方一寸五分、內撓骨筋腱の拇指側、撓骨莖狀突起の上內側、長屈拇筋外部、撓骨動脈、撓骨神經。

腕關節之部

大淵。撓腕關節部、內撓骨筋腱の外側、廻前方筋中、撓骨神經、腕關節動脈網。

大陵。腕關節橫紋の中央、廻前方筋下緣、橫腕骨靱帶部、腕關節動脈網、尺骨神經分枝、正中神經。

神門。掌面腕橫紋の小指側、內尺骨筋停止部、尺骨動脈分枝、尺骨神經分枝。

陽谷。手の背側(小指側)腕骨と尺骨莖狀突起の間、固有小指伸筋內部、腕骨背側動脈、尺骨神經末枝。

□⊗陽池。腕骨と尺骨との關節部、陽谿と陽谷の稍中央、總指伸筋、腕骨背側動脈網、後下膊皮下神經、尺骨神經分枝。

陽谿。第一掌骨背面の上部、撓腕關節背面、短伸拇筋腱と長伸拇筋腱との間、撓骨動脈分枝、外膊皮下神經末枝、撓骨神經。

手之部

□魚際。第一掌骨の後(上方)と舟狀骨との關節部の外角、外轉拇筋停止部、指背動脈、撓骨神經。

勞宮。手掌に於て中指と示指とを屈した兩指頭の中間、拇指球の小指側、手掌腱膜、淺、深屈指筋、骨間筋中、淺掌動脈、正中神經、尺骨神經。

少府。環指と小指とを屈めて兩指頭の中間に當る、勞宮と橫に列ぶ、小指球の拇指側、手掌動脈、尺骨神經末枝。

⊗合谷。第一掌骨と第二掌骨の接際の岐骨部、長伸拇筋腱と總指伸筋腱との間、骨間筋中、撓骨動脈、撓骨神經。

三間。第二掌骨と示指第一節との關節部の拇指側、背側骨間筋中、指掌動脈、撓骨神經。
中渚。小指と環指の間第一節の後、骨間筋の前端、指背動脈、尺骨神經。
腕骨。第五掌骨と鉤狀骨との關節部、外轉小指筋、腕骨背側動脈、尺骨神經分枝。
後谿。小指第一節と第五掌骨との外側で關節の前にとる、外轉小指筋、指背動脈、尺骨神經終枝。
□少商。拇指外側爪甲を去る事一分、長屈拇筋の腱と長伸拇筋腱との間、指掌動脈、撓骨神經末枝。
商陽。示指の拇指側爪甲を去る事一分、固有示指伸筋と同屈筋の間、指掌動脈、正中神經淺枝、撓骨神經淺枝。
二間。示指第一節と第二節との關節部の拇指側、總指伸筋腱の外側、指背動脈、撓骨神經皮枝。
中衝。中指背面爪根の拇指側爪甲の角を去る事一分、總指伸筋腱の附着部、指掌動脈、正中神經の末枝。
關衝。環指爪根の小指側、爪甲の角を去る事一分、其他同前。
液門。環指第一節の根部、卽ち背面にて第四指と第五指との間、總指伸筋腱部、指背動脈、尺骨神經。
少衝。小指外側爪甲を去る事一分、指背動脈、尺骨神經末枝、總指伸筋停止部。
前谷。第五指骨第一節の前內部、第一節と第二節との關節の外角、短小指屈筋の傍、指背動脈、尺骨神經末枝。
少澤。小指內側爪甲の角を去る事一分、總指伸筋停止部、指背動脈、尺骨神經末枝。

大腿之部

㊋陰廉。鼠蹊溝中央の直下、氣衝の下二寸、長內轉股筋、內廻旋股動脈、閉鎖神經、內股皮下神經。
五里。大腿の內側、陰廉の下一寸、短內轉股筋、股動脈の分枝、閉鎖神經、內股皮下神經。
陰包。大腿骨內髁の上四寸、薄股筋と大內轉股筋の間、股動脈の分枝、閉鎖神經、內股皮下神經。
△箕門。膝蓋骨內緣の上八寸、血海の上六寸、薄股筋と內大股筋との間、閉鎖神經、內股皮下神經。
血海。膝蓋骨上內緣の上二寸、縫匠筋下部、直大股筋の內側、內大股筋中、膝胴動脈分枝、閉鎖神經、內股皮下神經。
㊋中瀆。膝胴窩橫紋の外端より環跳を的に五寸上、大腿外側、股鞘、外大股筋、股動脈分枝、外股皮下神經、股神經筋枝。
□陽關。大腿骨外上髁の直上陷凹中、外大股筋外緣、上外膝關節動脈、股神經分枝。
髀關。膝蓋骨上緣の上方一尺二寸、腸骨前下棘の下外側、股鞘張筋、下臀動脈、下臀神經。
伏兎。大腿外側膝蓋骨上方六寸、外大股筋、股動脈分枝、外股皮下神經、股神經の筋枝。
□陰市。膝蓋骨外緣の上方三寸、其他同前。
梁丘。膝蓋骨外側の上方二寸、其他同前。
□㊋承扶。坐骨下溝橫紋の中央、半膜樣筋、半腱樣筋、坐骨神經隨行動脈、下臀神經、後股皮下神經、坐骨神經。
□殷門。承扶の下六寸、二頭股筋と半腱、半膜樣筋の間、深在股動脈筋枝、坐骨神經、後股皮下神經。

膝關節之部

陰谷。膝關横紋内側、半膜様筋の前、薄股筋停止部、膝關動脈分枝。股神經、坐骨神經分枝。

委陽。膝關窩横紋の外端、腓腸筋外頭、二頭股筋の腱、膝關節動脈網、腓骨神經分枝。

浮郄。委陽の上一寸、二頭股筋外端、膝關動脈の分枝、坐骨神經分枝。

□委中。膝關窩横紋の中央、膝關筋、膝關動脈、脛骨神經。

犢鼻。脛骨結節と腓骨小頭との中間、長總趾伸筋、膝關節動脈網、脛骨神經、腓骨神經。

膝眼。(阿是穴也)膝蓋固有靱帶の兩側陷凹中、關節嚢、腓骨神經、脛骨神經分枝、膝關節動脈網。

下腿之部

㊋三里。外膝眼の下三寸、脛、腓骨間、長腓骨筋、前脛骨筋、前脛骨動脈、返廻脛骨動脈、淺、深腓骨神經。

巨虛上廉。(一名上巨虛、足の上廉)、三里の下三寸、長總趾伸筋、前脛骨筋、前脛骨動脈、前脛骨神經。

條口。三里の下五寸、其他同前。

巨虛下廉。(一名下巨虛、足の下廉)、條口の下一寸、其他同前。

豐隆。下腿外髁の上八寸、下巨虛の後方約一寸、其他同前。

㊋陽陵泉。腓骨小頭の後内部、長腓骨筋、長總趾伸筋起始部、下内膝關節動脈、腓骨神經分枝。

陽交。陽陵泉の下三寸、長腓骨筋と腓腸筋の間、前脛骨動脈分枝、腓骨神經分枝。

外丘。陽交より腓骨側に五分、短腓骨筋、長總趾伸筋、前脛骨動脈、淺腓骨神經。

光明。下腿外髁の上五寸、長總趾伸筋と長腓骨筋の間、神經動脈同前。

陽輔。(一名絶骨)下腿外髁の上四寸を脛骨側に三分程の處、長總趾伸筋、其他同前。

㊋懸鐘。(一名絶骨)外髁の上三寸、長、短腓骨筋の間、其他同前。

㊋飛陽。下腿外髁の上七寸、腓腸筋、比目魚筋、前腓骨動脈、深腓骨神經。

附陽。外髁の直上三寸の少し後方、其他同前。

合陽。膝關窩委中の下三寸、腓腸筋、後脛骨動脈、後脛骨神經(一名脛骨神經)

承筋。腓腸筋の正中、(コブラの最高部)、脛骨動脈、後脛骨神經。

承山。承筋の下方、アキリス腱より指で輕く壓上して指止まる所、其他同前。

築賓。腓腸筋下垂部、復溜の下三寸、内髁の上五寸、動脈、神經同前。

復溜。内髁の後方五分の處の上二寸、後脛骨筋、長總趾屈筋、後脛骨動脈、淺腓骨神經。

交信。復溜の前五分、筋神經、動脈同前。

曲泉。膝關窩横紋の内端の下方、半膜、半腱様筋停止部の前、下内膝關節動脈、脛骨神經、腓骨神經。

膝關。膝關節横紋の内端の直下、曲泉の直下、腓腸筋内頭、動脈、神經同前。

□⊗陰陵泉。脛骨内關節窩の下際、比目魚筋と腓腸筋との間、脛骨動脈分枝、脛骨神經、陽陵泉と内外相對す。

地機。陰陵泉の直下、三陰交の上五寸、脛骨後内緣、比目魚筋、脛骨動脈分枝、脛骨神經、サフエナ神經。

□漏谷。地機の下二寸、其他は同前。

⊗三陰交。内髁の一握上、卽内髁の上三寸、脛骨後内緣、長總趾屈筋、脛骨動脈分枝、脛骨神經、サフエナ神經。

中都。内髁の上方七寸、脛骨面の陷中、比目魚筋、動脈、神經同前。

蠡溝。内髁の上方五寸、其他同前。

足跗之部

中封。内髁の下一寸より前方に一寸陷凹中、第一楔狀骨内側、前脛骨筋腱の蹠趾側、前内髁動脈、深腓骨神經終枝。

解谿。大衝の直上、商陽の後一寸半、横十字靴帶中、長總趾伸筋内側、前脛骨動脈、サフエナ神經、淺腓骨神經。

丘墟。外髁の直下を前方に一寸、稍々陷凹せる部、長總趾伸筋腱の小指側、前外髁動脈、腓骨神經。

崑崙。外髁の後、跟骨上方の陷中、アキリス腱の外側、長總趾屈筋の腱、淺腓骨神經。

僕參。跟骨の外側、崑崙の直下約一寸五分の陷中、外轉小趾筋、淺腓骨神經分枝。

照海。内髁の直下一寸、之を壓せば空ある中、長屈蹠筋、後脛骨動脈、後脛骨神經。

⊗水泉。照海の後約一寸、照海と水平に挨る、其他同前。

大鐘。内髁の後方、大谿の後上方の陷凹部、アキリス腱の内側、長總趾屈筋の前下緣、動脈、神經同前。

大谿。内髁の後下方五分脈搏動する部、長屈蹠筋、動脈、神經同前。

商丘。内髁の下部を前にゆく事約一寸の陷中、前脛骨筋腱の蹠趾側、内髁動脈、脛骨神經末枝。

足之部

湧泉。趾を卷き屈むれば陷凹現はるゝ中、長屈蹠筋腱の内側、長、短總趾屈筋、足蹠動脈、足蹠神經。

然谷。下腿内髁の前、舟狀骨と第一楔狀骨との關節の下部、外轉蹠筋、脛骨動脈分枝、内足蹠神經、脛骨神經。

大白。第一蹠骨内側尖端の下、外轉蹠筋、足背動脈、淺腓骨神經。

公孫。第一蹠骨と第一楔狀骨との關節部の内側、足背と足蹠の境界部、外轉蹠筋、短伸蹠筋、神經、動脈同前。

大衝。(一名大沖)、第一、二蹠骨と第一楔狀骨との關節部、長伸蹠筋と總趾伸筋腱との間、足背動脈、深腓骨神經の終枝。

大都。蹠趾第一節内側の後、陷中、外轉蹠筋停止部、趾背動脈、淺腓骨神經。

衝陽。第二蹠骨と第三蹠骨との接際部の少し前、陥谷を去る事三分、背側骨間筋、足背動脈、淺腓骨神經。

陥谷。第二、第三蹠骨間腔前端、短總趾伸筋腱、背側骨間筋中、前脛骨動脈終枝、淺腓骨神經終枝。

地五會。第四、五蹠骨間の前端、背骨間筋中、長總趾伸筋、背骨間動脈、腓骨神經末枝。

□申脈。外髁の少し下方、空現はるの部、外轉小趾筋上端、趾背動脈、外足蹠神經。

金門。外髁の下約一寸、申脈の前下部五分、外轉小趾筋、神經、血管同前。

京骨。第五蹠骨後外側、膨大部の下、短小指屈筋、外轉小趾筋、足背動脈分枝。外足蹠神經、淺腓骨神經。

束骨。第五蹠骨と小趾第一節との關節部外側の前下部、外轉小趾筋と短小趾屈筋の間、趾背動脈、淺腓骨神經末枝。

□隱白。蹠趾の內側爪甲の角の上一分、外轉蹠筋の腱中、趾背動脈、淺腓骨神經末枝。

大敦。蹠趾外側爪甲を去る事一分、長、短伸蹠筋附着部、趾背動脈、淺腓骨神經末枝。

行間。蹠趾と第二趾との趾の股の部、長伸蹠筋と總趾伸筋との腱の間、背骨間動脈、深腓骨神經の終枝。

內庭。第二趾と第三趾の岐れる部、背骨間動脈、淺腓骨神經末枝。

厲兌。第二趾外側、爪甲の角を去る事一分、長總趾伸筋附着の外緣、趾背動脈、淺腓骨神經。

夾谿。第四趾第一節の前方、臨泣を去る事一寸五分の陥中、長總趾伸筋附着の外緣、趾背動脈、脛骨神經。

竅陰。第四趾外側爪根部、其他同前。

臨泣。外髁の直下を前方に一寸第四、第五、蹠骨聯接部の上、長總趾伸筋腱の小指側、前外髁動脈、脛骨神經。

通谷。小趾第一節前外側、長總趾伸筋の外緣、趾背動脈、淺骨神經。

至陰。小趾外側爪甲の角を去る事一分、其他同前。

注意。十四經の各穴はこれで全部である。

又更に經穴を徹底的に理解せんとせば余が別著、改訂圖解經穴學を精讀せよ。

又古學としての十四經の詳細は當出版部より驟刻發行せる假名付輸入訓釋十四經發揮を讀むがよい。

備考一。

新孔穴の排列

註。文部省囑託改正經穴調査委員（富士川游、大澤岳太郎、吉田弘道、富岡兵吉、町田則文、三宅秀氏）が調査して、經穴の數を多きにすぐるとして減少した時の報告書(大正二年)の要旨は、

經穴は鍼科の重要なものである、その說く所によると氣血が貫周する道を經絡といふ。經絡が臟腑から出でゝ手足、腹背に循環するに當つて、出づる所、入る所、流るゝ所、注ぐ所に一定の點を定めて孔穴といふ。

現今鍼科といふもの、滑伯仁の十四經を採用して金科玉條としてゐるが、十四經の流通によると、數穴相接する所は混錯し易い。故に今孔穴の名稱を頭、顏、胸、腹、上、下肢等に分類して經絡につながるの說を廢し、經穴の稱を改めて孔穴の古に復した。

(中畧)

六百六十穴(左右合せて)の中、身體局所の關係から考へて、左程重要でないと思ふものを省いて百二十穴を決定した。
但し身體の正中線以外は、孔穴は左右にあるから、名稱は百二十穴で、孔穴の數は左右合せて二百二十二穴となる。

(文部省普通學務局報告から抄す)

但し東京府では此孔穴によつて檢定試驗が行はれてゐるから、東京府で受驗する人は孔穴丈け記憶すればよい。
文部省撰定新孔穴の報告書には其總計百二十穴であるが、それを左記の通りに分類排列してゐる。

頭部正中線……六穴

神庭、　顖會、　百會、　後頂、　腦戸、　瘂門。

頭部第一側線……四穴

曲差、　承光、　通天、　天柱。

頭部第二側線……五穴

臨泣、　正營、　承靈、　腦空、　風池。

額　部……二穴

欝竹、　陽白。

顳顬部……三穴

頭維、　曲鬢、　絲竹空。

顱頂部……二穴

率谷、　竅陰。

耳前部……二穴

上關、　聽會。

耳下部……一穴

翳風。

顏面部……九穴

迎香、　四白、　巨髎、　地倉、　下關、　頰車、　大迎、　顴髎、　水溝。

頸　部……二穴

天鼎、　天突。

胸　部……十二穴

兪府、　或中、　神藏、　靈墟、　神封、　步廊、　氣戸、　庫房、　屋翳、　膺窓、　乳根、　中府。

腹部正中線……七穴

鳩尾、　巨闕、　上脘、　中脘、　建里、　下脘、　關元。

腹部第一側線……八穴

幽門、　通谷、　陰都、　石關、　商曲、　肓兪、　四滿、　大赫。

腹部第二側線……八穴

不容、承滿、梁門、關門、大乙、天樞、外陵、水道。

側腹部……六穴

腹哀、大橫、腹結、衝門、居髎、五樞。

背部正中線……四穴

大椎、身柱、命門、長强。

背部側線……十三穴

大杼、肺兪、心兪、膈兪、肝兪、胃兪、腎兪、大腸兪、白環兪、上髎、次髎、中髎、下髎。

肩胛部……二穴

曲垣、肩外。

上　肢……十三穴

消濼、清冷淵、四瀆、天井、俠白、尺澤、曲池、三里、肩貞、肩髃、支溝、合谷、陽池。

下　肢……十一穴

陰廉、環跳、承扶、中瀆、陽陵泉、三里、陰陵泉、飛陽、三陰交、懸鐘、水泉。

注意。一、新孔穴によつて勉强せんとする人は以上の穴名と部位を經穴の部より書き出して記憶すればよい。

一、新孔穴は十四經に排列せられたる以前の兪穴、孔穴の或部分であつて、實地上重要なる穴を多分に逸脫してゐる。

一、新孔穴を撰定したる理由と根據が薄弱である。

一、新孔穴を撰定したる理由と根據が薄弱である。

一、新孔穴は之を挨穴するに、大人にあつては、術者の指の横徑を一寸とし、小兒に於ては被術者の指の横徑を一寸として用ふるものである。(此點又大層不都合のやうに思はれる)

備考二。

同名異穴

頭の臨泣、足の臨泣。背の陽關、足の陽關。頭の竅陰、足の竅陰。腹の通谷、足の通谷。手の三里、足の三里。手の五里、足の五里。其他、「衝門(しようもん)」、「章門(しやうもん)」の如く同音異字のものもある。

經穴異名

一穴二名ある經穴

神庭、髮際。	曲差、鼻衝。	後頂、交衝。	通天、天白。	腦空、顳顬。	强間、大羽。
目窓、至榮。	顱息、顱顬。	瘈脈、資脈。	竅陰(頭)、枕骨。	素髎、面王。	迎香、衝陽。
地倉、會維。	大迎、髓孔。	顴髎、兌骨。	懸顱、髓空。	人迎、天五會。	水突、水門。
扶突、水穴。	天鼎、天項。	天窓、窓籠。	缺盆、天蓋。	肩井、膊井。	大椎、百勞。
神道、臟腧。	厥陰兪、闕兪。	心兪、背竅。	腎兪、高蓋。	中脊內兪、脊內兪	中髎、中空。

會陽、利機。　魄戸、魂戸。　志室、精宮。
乳根、薛息。　巨闕、心募。　下脘、幽門。
四滿、髓府。　大巨、腋門。　歸來、谿穴。
淵腋　腋門。　天池、天會。　維道、外樞。
間使、鬼路。　天泉、天溫。　少衝、經始。
三間、少谷。　合谷、虎口。　陽谿、中魁。
支溝、飛虎。　三陽絡、通門。　少澤、少吉。
血海、百虫窠。　中封、懸泉。　蠡溝、交儀。
陰市、陰鼎。　僕參、安邪。　懸鐘、絶骨。
承扶、肉郄。　大衝、大沖。

一穴三名ある經穴

絡却、强陽、腦蓋。　絲竹空、巨髎、目髎。　玉堂、玉英。　兪府、輸府。　乳中、當孔。
禾髎、顖、長頻。　廉泉、本池、舌本。　幽門、上門。　石門、石闕。　商曲、高曲。
脊中、神宗、脊兪。　命門、屬累、竹杖。　氣衝、氣街。　期門、肝募。　大横、腎氣。
水分、中守、分水。　神闕、臍中、氣舍。　少商、鬼信。　大淵、鬼心。　列缺、童玄。
大赫、陰維、陰關。　横骨、下極、屈骨。　少海、曲節。　商陽、絶陽。　二間、間谷。
尺澤、鬼受、鬼堂。　大陵、心世、鬼心。　肘髎、肘尖。　五里、(手)尺/五里。　陽池、別陽。
晴明、泪孔、淚孔。　聽宮、多所門、窓籠。　前谷、手太陽。　漏谷、大陰絡。　地機、脾舍。
承泣、顴穴、面髎。　膈會、顴髎、膈交。　陰包、陰胞。　湧泉、地衝。　梁丘、跨骨。
天突、玉戸、天霍。　中脘、大倉、胃募。　金門、關梁。　跗陽、附陽。　飛陽、厥陽。
陰都、食宮、通閑。　氣穴、胞門、子戸。
日月、膽募、神光。　衝門、慈宮、上慈宮。
溫溜、逆注、蛇頭。　曲池、鬼臣、陽澤。

臂臑、頭衝、頸衝。　隱白、鬼壘、鬼眼。　然谷、龍淵、然骨。　三陰交、承命、太陰。
大敦、水泉、大順。　中都、中郄、太陰。　巨虛上廉、上巨虛、下廉、下巨虛。　衝陽、會原、會湧。
巨虛上廉、上巨虛。　伏兎、外勾、外丘。　陽交、別陽、足髎。　陽輔、絶骨、分肉。
環跳、臏骨、分中。　申脈、鬼路、陽蹻。　三里(足)、下陵、鬼邪。　承筋、腨陽、直腸。

一穴四名ある經穴

上星、鬼堂、明堂、神堂。　勞宮、五里、鬼路、掌中。　顴會、顴上、鬼門、顴門。
腦戸、匝風、會額、合顱。　瞳子髎、太陽、前關、後曲。　頰車、機關、鬼林、曲芽。
膻中、元兒、上氣海、元見。　中府、膺中兪、肺募、府中兪。　陰交、少關、横戸、丹田。
氣海、脖映、下肓、丹田。　中極、氣原、玉泉、膀胱募。　曲骨、尿胞、屈骨、屈骨端。
京門、氣府、氣兪、腎募。　復溜、伏白、昌陽、外命。　太谿、昌細、照海、陰蹻。
神門、兌衝、中都、銳中。　陽關、關陵、陽陵、關陽。　承山、魚腹、肉柱、傷山。

一穴五名ある經穴

風府、舌本、鬼枕、鬼穴、曹谿。　痞門、舌横、舌脈、瘂門、舌腫。　承漿、天地、鬼市、懸漿、乘漿。
上關、客主人、客主、容主、太陽。　肩髃、肩骨、中育井、肩骨、肩尖。　鳩尾、尾翳、髑骨、神府、骨骨。
會陰、屏翳、金門、平豎、下極。　腹結、腹屈、腸結、腸屈、陽窟。　章門、長平、脇髎、脾募、肋髎。
委中、郄中、委中央、血郄、腿凹。

一穴六名以上ある經穴

水溝、鼻人中、鬼宮、鬼客聽、鬼市、人中。　攢竹、員在、始光、夜光、明光、元柱。
石門、利機、精露、丹田、命門、三焦募。　關元、下紀、次門、丹田、大中極、小腸募。
天樞、長谿、谷門、大腸募、循際、長谷。
百會、三陽五會、鬼門、涅丸宮、巔上、天滿、三陽、五會。
腰俞、背解、髓空、腰戶、髓孔、腰柱、髓府。
長强、竅骨、骶上、骨骶、氣之陰郄、龜尾、尾翠骨、龍虎穴、曹谿路、三分閭、河車路、朝天巔、上天梯、骶骨、
尾閭、氣郄。

一、以上は、單に參考の爲にこゝに記したのである。
一、別段記憶しなくてもよい。
一、但し、横に・印の符號ある異名丈け、記憶せねばならぬ。

備考三。

臨牀上(實地上)重要なる奇穴

印　堂　(神應經)

部　位。眉間の中央。(眉と眉との眞中)

主　治。嘔吐、眼痛、小兒痙攣、頭痛、眩暈等。
技　法。鍼二分、灸三壯乃至七壯。

天　聰　(神應經)

部　位。鼻尖より髮際までの寸をとつて兩折し、之を髮際正中より上方に當てゝ盡くる所。(取穴法)
主　治。諸種の熱性病。
技　法。灸七壯乃至三七壯。

神聰四穴　(類　經)

部　位。百會の前、後、左、右、各一寸。
主　治。頭痛、眩暈、中風、癲癇、精神病等。
技　法。鍼一分乃至二分、灸七壯乃至三七壯。

光　明　(銀海精微)

部　位。眉弓の中央。

主　治。眼瞼緣炎、結膜炎、眼筋麻痺等。
技　法。鍼一分乃至三分、灸三壯。

當　陽　(千金方)

部　位。眉弓中央の直上髮際を入る事一寸。
主　治。鼻加答兒、感冒、眼神經痛等。
技　法。鍼一分乃至三分、灸年齡の數を用ふ。

太　陽　(鍼灸大成)

部　位。眉毛後方の髮際凹なる部。
主　治。眼科一切の疾患、偏頭痛等。
技　法。鍼三分、灸三壯乃至七壯。

鬼　狀　(明堂灸經)

部　位。耳前髮際(ハエサガリ)、上關の後上方耳翼の前上起始部の凹なる中、
主　治。耳疾、中風等。

技　法。灸三壯。

陽　維　(千金翼)

部　位。耳後の中央(耳後筋の起始部)。
主　治。耳鳴、難聽、中耳炎等。
技　法。灸五十壯。

耳　尖　(千金方)

部　位。耳翼を前方に屈げて其上角に之をとる。(取穴法)
主　治。偏頭痛、中耳炎等。
技　法。灸三壯乃至七壯。

明　堂　(資生經)

部　位。項部後髮際を入る事五分、瘂門と風府の中央。(取穴法)
主　治。衄血、後頭神經痛等。

技　法。鍼三分、灸三壯。

太　祖　(鍼灸極祕傳)

部　位。大椎の上の小椎の下、卽ち第六頸椎の下。

主　治。百日咳、催嘔、咳嗽等。

技　法。鍼一分乃至三分、灸三壯乃至七壯。

百勞四穴　(鍼灸極祕傳)

部　位。大椎の直上二寸の處の左右各一寸(二穴)。
大椎の兩傍一寸三分の處(二穴)。

主　治。百日咳、咳嗽等。

技　法。鍼三分、灸七壯。

胸　堂　(千金方)

部　位。兩乳の間に於て胸骨の兩側緣。

主　治。氣管枝炎、喘息、食道痙攣、喀血、心臟神經痛等。

技　法。灸三壯乃至三七壯。

脇　堂　(外臺祕要)

部　位。極泉の直下、第二肋間。

主　治。喘息、喀血、吃逆、肺氣腫等。

技　法。灸三壯乃至五十壯。

玉　泉　(千金方)

部　位。男子陰莖根の上、陰阜と陰莖根との間、臍の下方六寸五分。

主　治。膀胱麻痺、睾丸炎、精系神經痛等。

技　法。灸七壯乃至百壯。

臍中四邊　(千金方)

部　位。臍の正中及其の上下左右各一寸。

主　治。小兒一切の痙攣、慢性腸加答兒等。

技　法。灸七壯。

腸　遺　(千金方)

部　位。中極の兩傍一寸。

主　治。慢性腸加答兒、便祕、鼠蹊ヘルニア(鼠蹊部脱腸)等。

技　法。鍼三分乃至二寸、灸、年の數を用ゆ。

子　宮　(鍼灸大成)

部　位。中極の兩傍三寸。

主　治。不姙症、子宮血腫、子宮內膜炎等。

技　法。鍼一寸、灸七壯乃至三七壯。

急　脈　(素問氣府論)

部　位。奇穴玉泉の兩傍二寸五分。

主　治。横痃(よこね)、下腹神經痛等。

技　法。灸七壯。

羊　矢　(類　經)

部　位。會陰の傍三寸。

主　治。脱腸、睾丸炎、痔疾、子宮內膜炎等。

技　法。灸七壯。

肓　募　(經穴彙解)

部　位。元結にて乳嘴から臍中までを斜に計り、

(取穴法)　之を兩斷(ふたつにきりて)して一片を捨てる。

兩斷したる元結の一つをとりて

乳嘴から腹部に下し、

其元結の盡くる處に灸す。

主　治。一切の慢性病、鍼術藥治も效なきものも治す。

技　法。灸、患者の年の數を用ゆ。

肋　頭　(千金方)

部　位。第十肋骨の尖端。

主　治。癰、卵巣神經痛、肝硬變症等。
技　法。灸三壯乃至七壯。

肩　上　(五藏抄)

部　位。大椎と肩胛との正中。
主　治。肩の凝、齒神經痛、咽、喉頭加答兒等。
技　法。灸七壯乃至二十一壯。

肩　頭　(經穴彙解)

部　位。肩端起骨の尖上。
　　鎖骨と肩胛關節との上際の陷凹部。
主　治。肩の凝、齒痛、腺病、三角筋麻痺等。
技　法。灸三壯乃至七壯。

督　脊　(千金方)

部　位。大椎と長强との正中。

主　治。小兒急癇、脊椎の疾患等。
技　法。灸三壯乃至七壯。

接　脊　(明堂灸經)

部　位。第十二胸椎と第一腰椎の間。
主　治。腸疝痛、慢性腸加答兒等。
技　法。鍼三分、灸三壯。

八　曜　(名家灸選)

部　位。大椎の八方各一寸宛、
　　大椎を中心として八角となる。
主　治。胃一切の疾患、頑固なる嘔吐、姙娠惡阻等。
技　法。灸七壯乃至十五壯。

督　兪　(資生經)

部　位。第六胸椎の兩傍一寸五分。

心兪と膈兪との中間。

主　治。狹心症、心臟痛、肋間神經痛、消化不良等。

技　法。灸七壯乃至二十一壯。

濁　浴　(千金翼)

部　位。膽兪の兩傍二寸五分。

主　治。黃疸、胃加答兒、神經衰弱等。

技　法。灸、年の數を用ゆ。

廻　氣　(類　經)

部　位。脊の窮骨の上、赤白肉の下、
　即ち尾呂骨部、長强の上、腰兪の下、骨の尖りの上。

主　治。痔、腸潰瘍、尿失禁等。

技　法。灸百壯。

夾　脊　(類　經)

部　位。一、上肢を體の側部より大腿に向つて伸して伏臥す。
(取穴法)
　二、元結を持つて左右の肘尖(尺骨鷲嘴突起)を横にさしわたす。
　三、二の元結と脊骨の交叉點に假點する。
　四、三の假點の兩傍一寸五分の處に眞點す。

主　治。霍亂、腓腸筋痙攣等。

技　法。灸百壯。

氣海兪　(醫學入門)

部　位。第十五椎の兩傍一寸五分、腎兪と大腸兪の間。

主　治。腰筋ロイマチス、腰神經痛、下痢、鼓腸、腸疝痛、子宮內膜炎、月經異常等。

技　法。鍼二寸乃至三寸、灸三壯乃至五十壯。

精　宮　(醫學入門)

部　位。第十四椎卽ち第二腰椎の兩傍三寸。

主　治。夢精、遺精、早漏、性感障礙等。

技　法。鍼八分乃至一寸五分、灸七壯乃至三七壯。

關元俞　(醫學入門)

部　位。第十七椎卽ち第五腰椎、第一薦骨假棘狀突起の間兩傍一寸五分。
主　治。痎痛、慢性腸加答兒、消渴、婦人の胃痙攣、子宮痙攣等。
技　法。鍼三分乃至二寸、灸三七壯乃至五十壯。

奪　命　(鍼灸聚英)

部　位。尺澤と肩髃の中間。
主　治。腹膜炎、失神、丹毒等。
技　法。鍼三分。

肘　尖　(千金翼)

部　位。肘骨の尖端卽ち尺骨鷲嘴突起の尖端。
主　治。瘰癧。
技　法。灸、患者の年の數丈けを用ゆ。

地　神　(千金方)

部　位。拇指本節橫紋の中央卽ち拇指第一節と第一掌骨との關節部掌面の中央。
主　治。縊首假死。
技　法。灸七壯。

手　心　(千金方)

部　位。手掌の正中。
主　治。黃疸、小兒疳蟲、百日咳等。
技　法。灸一壯乃至七壯。

虎　口　(神應經)

部　位。合谷の前下方、
取穴法。手指を展して拇指と示指を接着した指の分れ目。
主　治。頭痛、腦充血、眩暈、心臟神經痛、胃痛等。
技　法。鍼三分、灸七壯。

鬼　當　(千金翼)

部　位。拇指第一節と第二節との橫紋の頭、拇指の示指側でない方。

主　治。扁桃腺炎、マラリア等。

技　法。鍼一分、灸三壯。

鬼　哭　(醫學入門)

部　位。拇指の傍、爪と肉との間、卽ち示指側で無い方。

取穴法。手掌を合せ、拇指を展してくゝり、爪根部に之をとりて灸をする。

主　治。腦溢血、牙關緊急、癲癇、膀胱麻痺、遺精等。

技　法。灸三壯乃至二十壯。

五　虎　(類經圖翼)

部　位。示指、環指、第一節基底の背面、中指を挾む。

主　治。書痙、手指痙攣等。

技　法。灸五壯。

關　儀　(千金方)

部　位。大腿骨外上髁の直上一寸。

主　治。拔氏腺炎、子宮痙攣等。

技　法。灸百壯。

膝　眼　(類經圖翼)

部　位。膝蓋骨下端の兩側卽ち膝蓋固有靱帶の兩側陷なる部。

主　治。脚氣、膝關節炎、下腿麻痺等。

技　法。鍼三分。

交　儀　(千金方)

部　位。脛骨前面、正中線、內髁の上五寸。

主　治。慢性腹膜炎、下腹痛等。

技　法。灸七壯。

少陽維　(外臺祕要)

部　位。大谿と復溜の中間の動脈中。

主　治。下腿慢性濕疹、狼瘡等。

營　地　(千金方)

部　位。內髁の前後の陷なる處。
主　治。尿閉、子宮出血、子宮內膜炎、月經過多、腸出血等。
技　法。灸七壯乃至三十壯、鍼三分。

華　佗　(明堂灸經)

部　位。蹈趾內側爪甲の角を去る事五分、赤白肉の間、卽ち背面と蹠面との中間。
主　治。精系神經痛、副睾丸炎。
技　法。灸三壯。

泉生足　(醫宗金鑑)

部　位。足の第二趾の第二節蹠面の正中。
主　治。腦疾患、嘔吐、呑酸、食道痙攣等。
技　法。鍼二分、灸三壯乃至十五壯。

注意。階段の灸、四華患門、痞根、竹杖、騎竹馬、腰眼、背脊五穴、五臟の穴、六腑の穴、等。は灸科學の部に記述したるが故に此所には畧してをく。

第九篇　最近十數ケ年間之全國鍼灸檢定試驗問題集

縣別試驗問題一覽

將來を待望すべき親愛なる受驗者諸君へ

一、過去、現在、未來(想定)の全部數限りなき試驗問題を探究するが如きは、痴人無用の努力である。
一、本書の本文中に著述せられたる全文と注意、解題、備考等を理解すれば、凡百(あらゆる)の試驗問題を解答し得る實力の出來るものである。
一、必ずしも昭和十五年の問題なきを苦しむに及ばぬ。
一、又題の下に年月縣名等一々記入するは煩雜故、省略したるものもあれど、要するに出題年月古きが故に之を粗略にしてはならぬ。
一、本書を精讀理解すれば來年の問題も必ず解答し得るものである。

福　岡　縣　（大正十四年十一月）

一、腎臟の位置、形狀竝に其機能を問ふ
一、前膊撓骨側の筋肉及び主なる血管、神經の名稱を擧げよ
一、膀胱麻痺の原因、症候及び鍼治法を問ふ
一、鍼治を禁ずべき場合を擧げよ
一、熱を用ひて消毒すべき品名方法を問ふ　（以上鍼術）
一、肝臟の位置、形狀竝に其機能を問ふ
一、腹筋の名稱及び之に分佈する血管、神經は如何
一、風池、陽關、孔最の解剖的位置竝に其部に於ける灸治の適應症を問ふ
一、灸治を禁ずべき場合を擧げよ
一、消毒藥品の種類及び其應用を問ふ　（以上鍼術）

德　島　縣　（大正十四年十月）

一、坐骨神經の經過及び分佈狀態
一、血液の生理的作用
一、筋肉各部の名稱及び其の生理的作用を問ふ
一、刺鍼部及び手指の消毒法に就て
一、鍼術刺戟の神經に及ぼす影響如何
一、消毒藥五種をあげて其稀釋度及び其用法を記せ
一、薦骨部點灸の適應症及び其奏效の理由如何

和　歌　山　縣　（大正十四年十一月）

一、前膊に於ける屈筋の名稱を列擧せよ
一、脈膊の起る理由を問ふ
一、承扶、承靈、承漿の解剖的位置及び其禁鍼穴を示せ
一、横隔膜痙攣の原因、症候及び鍼灸療法を問ふ
一、神經性心悸亢進の症候及び鍼灸療法を問ふ
一、消毒に普通使用するリゾール水、石炭酸水は何％なりや
一、通常「アルコール」と無水「アルコール」とは何れが消毒力優れるか竝に理由如何

長　野　縣　（大正十四年十一月）

一、下肢を構成する骨の名稱
一、胸鎖乳嘴筋の起始、停止、其作用
一、横隔膜の位置及び作用
一、動脈とは何ぞ
一、常習便祕に對する鍼灸術
一、石炭酸に就て

◎同伊那町の分

一、腹腔内に有する臟器の名稱
一、前脛骨筋の起始、停止及び作用
一、腎臟の位置及び機能
一、坐骨神經を說明せよ
一、氣管枝喘息の鍼灸術
一、昇汞に就て

愛　媛　縣　（大正十四年十一月）

一、肘關節の構造及び深在動脈竝に神經を問ふ
一、血管の種類及び血液循環に就て
一、鍼の感通とは如何及び局部に起る變化を問ふ
一、左の經穴に就て知る所を記せ
　上關、天鼎、心俞、天府、承筋、
一、細菌を死滅せしむるには如何なる方法に依るや
一、消毒藥の種類及び稀釋度を問ふ
一、灸の醫治的效能のある理由

富　山　縣　（大正十四年十月）

一、鎖骨の位置、形狀竝に聯接を問ふ
一、睡眠を催す理由如何
一、刺鍼により上喉頭神經を刺戟したる時は如何なる反應ありや
一、顏面痛の刺鍼法を記せ